

金剛寺原第1遺跡

金剛寺原第2遺跡

〔県営農林漁業用揮発油税財源身替農道
整備事業瓜生野地区〕に伴う発掘調査報告書

1990

宮崎市教育委員会

序

みどり豊かな南九州の中核都市をめざす宮崎市と周辺の、清武町、田野町、佐土原町、高岡町、国富町、綾町の1市6町は、昭和46年7月に、宮崎東諸県広域市町村圏協議会を設立し、圏域の発展と振興を図るべく市町間に共通する議題解決のための諸施策の展開が推進されているところであります。なかでも、広域交通ネットワーク化もその施策の一つであり、広域圏内の交通網の整備も積極的に推進されているところであります。

昭和60年に、農林漁業揮発油税財源身替農道整備事業が計画され、池内町から垂水台地を横断し、瓜生野平松地区、柿木原台地を経て、国富町岩知野を結ぶ農免農道の建設路線が昭和61年5月8日に採択されました。よって、かかる計画路線内における埋蔵文化財等の分布調査を実施した結果、埋蔵文化財包蔵地の確認が成されました。宮崎市教育委員会では、宮崎県中部農林振興局からの依頼を受けて、昭和63年度に金剛寺原第1遺跡、平成元年度に金剛寺原第2遺跡の発掘調査を実施いたしました。

当該遺跡は、標高100m内外の垂水台地に立地することもあり、従来から旧石器時代遺跡の存在が知られていました。今回発掘調査を行った両遺跡ともに、ナイフ形石器を伴う良好な旧石器時代遺跡であることを確認し、宮崎市における旧石器時代遺跡の発掘調査は、宮崎学園都市遺跡群内の堂地西遺跡に次ぐものであり、旧石器文化資料を追加することとなりました。

発掘調査にあたりまして、色々と御配慮、御協力いただきました、中部農林振興局、発掘調査指導をいただきました、別府大学橘昌信教授、また、発掘調査に従事いただきました方々に深甚の謝意を表します。

平成2年3月

宮崎市教育委員会

教育長 柚木崎 敏

例 言

1. 本書は、県営瓜生野地区農免農道整備事業に伴う、金剛寺原第1遺跡・金剛寺原第2遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、宮崎県中部農林振興局の委託を受けて、金剛寺原第1遺跡を昭和63年12月20日から平成元年2月28日、金剛寺原第2遺跡を平成元年5月25日から平成元年7月10日まで宮崎市教育委員会が実施した。
3. 金剛寺原第1遺跡の調査組織は、次のとおりである。

調査主体	宮崎市教育委員会				
調査指導	別府大学	教	授	橘	昌信
	宮崎県農業試験場	科	長	有村	玄洋
調査員	文化振興課	係	長	野間	重孝
調査補助員	〃	主	事	浅井	清
	別府大学	学	生	宮下	貴浩
遺物整理	文化振興課	嘱	託	橋本	博文
		嘱	託	西本	州司
事務局	宮崎市教育委員会	教	育	長	柚木崎 敏
		教	育	局	長 守田 達朗
		文化振興課	長	野田	卓郎
		課	長	補	佐 松元 正

調査における実測及び測量は、野間、浅井が分担して行い、写真撮影は浅井が行った。

4. 金剛寺原第2遺跡の調査組織は、次のとおりである。

調査主体	宮崎市教育委員会				
調査総括	文化振興課	係	長	野間	重孝
調査指導	別府大学	教	授	橘	昌信
調査員	文化振興課	主	事	永井	淳生
	〃	主	事	中山	豪
	〃	嘱	託	宮下	貴浩
調査補助員	別府大学	研	究	生	高松 永治
遺物整理	文化振興課	嘱	託	橋本	博文
		嘱	託	西本	州司
	別府大学	学	生	毛利	直人
事務局	宮崎市教育委員会	教	育	長	柚木崎 敏
		教	育	局	長 守田 達朗
		文化振興課	長	松元	正
		課	長	補	佐 森本 雍子

調査における実測及び測量、写真撮影は、永井、中山、宮下が分担して行った。

5. 本書に掲載した図面の作成は、金剛寺原第1遺跡の遺物実測及びトレースを高松が行い、他は宮下が行った。
6. 本書の執筆は、金剛寺原第1遺跡を野間と高松が分担し、文責は末尾に明記した。金剛寺原第2遺跡は宮下が担当した。また、別府大学の橘昌信教授には玉稿をいただいた。
7. 本書の編集は宮下が行った。

本文目次

I	はじめに	1
1.	調査に至る経過と概要	1
2.	遺跡の立地と環境	1
II	金剛寺原第1遺跡	3
1.	調査の概要	3
2.	調査区の設定	3
3.	基本層序と遺物包含層	4
4.	遺跡の調査	9
(1)	石器群の出土状況	9
(2)	出土遺物	14
(3)	接合資料	17
5.	まとめ	31
III	金剛寺原第2遺跡	41
1.	調査の概要	41
2.	調査区の設定	41
3.	基本層序と遺物包含層	41
4.	遺跡の調査	43
(1)	石器群の出土状況	43
(2)	集石遺構	48
(3)	出土遺物	51
5.	まとめ	59
IV	金剛寺原遺跡の石器群とその位置づけ	62
	橘 昌信教授	

挿 図 目 次

第1図	金剛寺原第1遺跡・第2遺跡位置図	2
第2図	調査区及び土層観察地点	3
第3図	金剛寺原第1遺跡土層断面図	8
第4図	金剛寺原第1遺跡出土遺物平面・垂直分布図	11・12
第5図	金剛寺原第1遺跡ブロック位置図(接合図)	11・12
第6図	金剛寺原第1遺跡遺物出土頻度図	13
第7図	ナイフ形石器・スクレイパー出土分布図	13
第8図	ナイフ形石器・石錐・スクレイパー実測図	18
第9図	スクレイパー実測図(1)	19
第10図	スクレイパー実測図(2)	20
第11図	使用痕のある剥片・敲石実測図	21
第12図	二次加工剥片・石核実測図	22
第13図	接合資料A	23
第14図	接合資料B	24
第15図	接合資料C	25
第16図	接合資料D, E, F	26
第17図	調査区と土層観察地点	42
第18図	金剛寺原第2遺跡の土層図	42
第19図	金剛寺原第2遺跡出土遺物平面・垂直分布図	45
第20図	金剛寺原第2遺跡礫平面・垂直分布図	46
第21図	A-4グリッド剥片・碎片ブロック分布図	47
第22図	1号集石実測図	48
第23図	2号集石実測図	49
第24図	3号集石実測図	50
第25図	ナイフ形石器・石錐・角錐状石器実測図	52
第26図	スクレイパー実測図	53
第27図	使用痕剥片・接合資料	54
第28図	2号集石出土敲石	55

表 目 次

第1表	個体・器種別組成表	10
第2表	金剛寺原第1遺跡遺物観察表	27
第3表	金剛寺原第2遺跡の石器組成表	44
第4表	A-4グリッド剥片・碎片観察表	47
第5表	金剛寺原第2遺跡遺物観察表	56

図 版 目 次

図版1	金剛寺原第1遺跡調査前風景	35
図版2	金剛寺原第1遺跡調査風景	35
図版3	金剛寺原第1遺跡土層断面	35
図版4	金剛寺原第1遺跡の石器群出土状況(1)	36
図版5	金剛寺原第1遺跡の石器群出土状況(2)	36
図版6	ナイフ形石器出土状況	36
図版7	ナイフ形石器・石錐・スクレイパー	37
図版8	スクレイパー・使用痕のある剥片・敲石	38
図版9	二次加工剥片・石核・接合資料A, B	39
図版10	接合資料C, D, E, F	40
図版11	金剛寺原第2遺跡調査風景	67
図版12	金剛寺原第2遺跡石器群の出土状況	67
図版13	金剛寺原第2遺跡土層断面	67
図版14	1号集石遺構	68
図版15	2号集石遺構	68
図版16	3号集石遺構	68
図版17	ナイフ形石器・石錐・角錐状石器・スクレイパー	69
図版18	使用痕剥片・接合資料	79



I はじめに

1. 調査に至る経過と概要

宮崎市池内町から垂水台地、柿木原台地を横断して、国富町岩知野に至る農免道路建設（県営農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業瓜生野地区）計画が成され、埋蔵文化財等の所在の有無が宮崎県中部農林振興局より照会されているところであった。そこで宮崎県文化課により、昭和63年2月10日から12日にかけて、計画路線において埋蔵文化財の試掘調査が実施された。

その結果、宮崎市大字瓜生野字金剛寺原5247番地及び宮崎市大字大瀬町字中尾5649-49外の2個所において、旧石器時代の遺構存在確認が成された。上記遺構は、近接しており、この台地は、通称金剛寺原と呼ばれていることから、前者を金剛寺原第1遺跡、後者を金剛寺原第2遺跡と称することとなった。

かかる遺跡については、本発掘調査が必要となり、宮崎県中部農林振興局からの、業務委託により、宮崎市教育委員会が主体となって、発掘調査を実施することとなった。

金剛寺原第1遺跡は、昭和63年度の事業区内に存するため、昭和63年12月20日から平成元年2月28日にかけて発掘調査を実施した。

調査の結果、ナイフ形石器、石核、スクレイパー、剥片、石錐、台石等の旧石器時代遺物とブロック状に集積された焼石群の検出を行っている。

金剛寺原第2遺跡は、平成元年度の事業区内に存するため、平成元年5月25日から6月30日にかけて発掘調査を実施した。

調査の結果、ナイフ形石器、石核、スクレイパー、石錐、角錐状石器等の旧石器時代遺物と集石遺構を検出している。

2. 遺跡の立地と環境

宮崎市の桜の名所として知られる垂水公園を最高標高（120.5m）として持つ山塊が大淀川左岸及び宮崎平野に向かって数本の谷筋が入り込みながら、舌状台地を延び出している。

東に位置する宮崎平野から池内町に入り込む谷筋と、大淀川左岸に根幹をなす柏田から久保地区に入り込む谷筋に挟まれて、宮崎城の所在した舌状丘陵が延び出す。さらに大瀬町から浦田地区にかけて入り込む谷筋に挟まれて、国指定重要文化財の「木造薬師如来及び両脇侍像3軀」を所蔵する王楽寺のある竹篠台地が延び出している。

金剛寺原遺跡は、こうした舌状に延びだす丘陵部の根幹部に開けた、やや平坦部をもつ洪積台地上に立地している。

金剛寺原第1遺跡は、久保地区から垂水地区に通ずる市道から別れて、南西方向に位置する低丘陵地の平松地区に通ずる市道に沿った畑地に立地している。

東側には畑地が開け、北はスタキ池から東側に入り込む谷間へと落ち込み、南は古井手池から入り込む谷間へと落ち込んでいる。

西側は、北と南の谷間に挟まれた馬の背状の地形をなし中央部を平松に通ずる市道が走って

いる。金剛寺原第2遺跡は第1遺跡から直線で450m西に寄った位置に馬の背状の地形から南北に長い畑地が開かれており、遺跡は、畑地の北側縁辺部に立地して、北側は急傾斜となる。西側も傾斜地で、落ちて行き、麓に古刹の金剛寺が創建されており、市指定有形文化財「金剛寺文書」を所蔵している。さらに西側に離れて瓜生野八幡神社が鎮座しており、境内には、国指定天然記念物「瓜生野八幡神社のクスノキ群」が繁茂している。



第1図 ① 金剛寺原第1遺跡位置図
② 金剛寺原第2遺跡

II 金剛寺原第1遺跡

1. 調査の概要

遺跡の調査は、農免道路建設にかかる事前発掘調査のため、調査区の設定が道路幅内のみの制約されたものであった。

昭和63年2月に宮崎県文化課が実施した試掘調査から遺跡の立地個所が特定されていたこともあり、試掘調査の結果に基づいて機械による表土剥ぎ作業を実施した。現地表面から約50cmの深さで表土を取り除くと、焼石群の上面が露出することとなった。土層的には従来から畑地に開墾されていることもあり上面層は深くカットされている状況にあった。

発掘調査が進むにしたがって調査区全面に焼石群の分布が見受けられるようになり、これら焼石群は、散乱した状況で見受けられたが、細かくその分布を見ることにより幾つかのブロック状の集石を見ることができた。

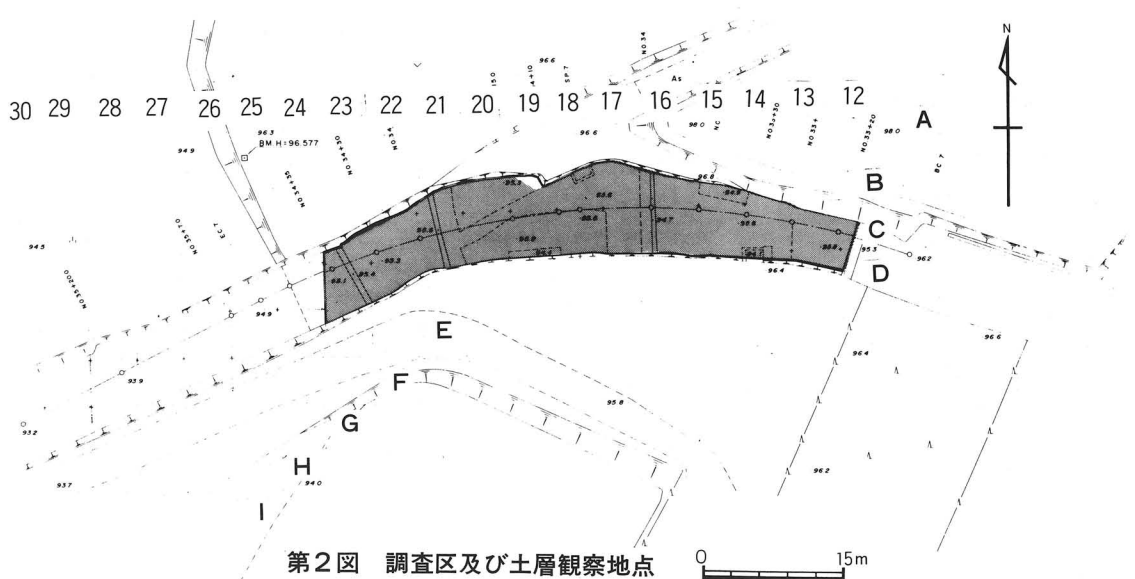
特に、こうした集石ブロックに伴って、石器が出土し、集石ブロックと石器の出土が合致することに、興味を持たれた。

また、調査区の限定もあり、遺跡の広がり範囲を確認することは困難であったが、出土状況から調査区北側にはそれほどの広がりはないものと思われ、南側に広がりを見せる傾向がうかがわれた。

焼石は強い熱を受けており、赤褐色を呈し、はじけた角礫状を成していた。石器では、石核9点、ナイフ形石器4点、スクレイパー33点、剥片166点、石錐2点、台石または磨石2点、砕石外17点の計233点を出土しており、石材は流文岩を素材としたものが大勢を占めていた。

2. 調査区の設定

昭和63年2月、県文化課の試掘調査により、認掘トレンチより、赤化の著しい焼礫約60点、



および二次加工を施した硅質凝灰岩製の剥片石器 1 点を出土しているという情報から、この地点を中心とした発掘調査区を設定した。

道路建設計画路線はカーブを描くため、調査グリッド組には一考を要したが、道路センターの杭打ちが成されていることもあり、道路計画図にある道路センターNo.34からSP7のポイントがほぼ東西方向の直線を示すことから、この方線を基軸に東西軸と南北軸による5m方形グリッドを組むこととなった。

南北軸をアルファベット、東西軸をアラビア数字で示した。

主体となった発掘調査区は、B列で14区～22区の一部、C列で12区～23区、D列では13区～15区および20区～23区、E列で23区の一部となった。

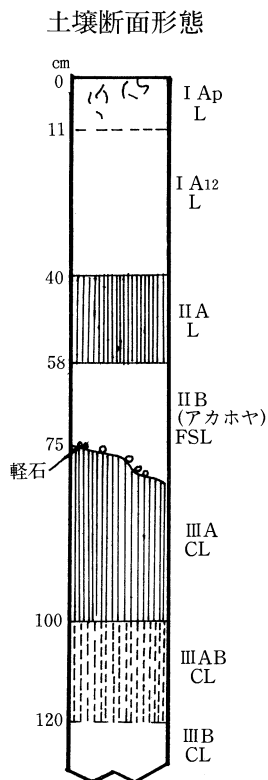
なお、調査後半になって、発掘調査区拡張を行いD-24区、E-24区からI-33区、J-33区までの表土剥ぎを行い遺構、遺物の検出を試みたが、検出することはできなかった。

遺物は、B列を主体とした調査区において良好な状態で検出されている。なお、前述の県文化課による試掘トレンチは、C-20区に位置していた。

3. 基本層序と遺物包含層

【基本層序】 (標高98.10m)

B-11区：土壌群 黒ボク土 (黒ボク土畑)

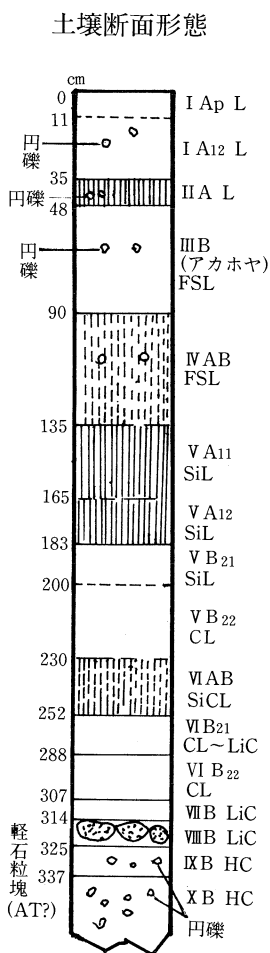


- I AP 0～11cm、黒褐 (7.5YR 3/2) 色の壤土 (L)、作土層、発達弱度の細粒状構造、腐植にやや富む、細孔隙あり、可塑性中、粘着性中、透水性中、植物根あり、ち密度は16mm、層界は漸変11～40cm、黒褐 (7.5YR 3
- I A12 11～40cm、黒褐 (7.5YR 3/2) 色の壤土 (L)、発達弱度の塊状構造、腐植にやや富む、細孔隙あり、可塑性中、粘着性中、透水性中、細円礫あり、植物根あり、ち密度は21mm、層は明瞭
- II A 40～58cm、黒 (7.5YR 2/1) 色の壤土 (L)、埋没表層、腐植に富む、細孔隙あり、発達弱度の塊状構造、細円礫あり、可塑性中、粘着性中、透水性中、ち密度は22mm、界層は明瞭
- II B 58～75 (～85) cm、褐 (7.5YR 4/4)～橙 (7.5YR 6/8) 色の細砂質壤土 (FSL)、アカホヤ層 (ガラス質火山灰層で下部位に軽石小粒を含む)、発達弱度の塊状構造、細孔隙あり、礫なし、可塑性弱、粘着性弱、透水性中、ち密度は23mm、層界は明瞭

- III A 75 (85) ~105cm、黒 (7.5YR 2/1) 色の埴壤土 (CL)、発達弱度の塊状構造、埋没表層、細孔隙あり、礫なし、上部位に橙 (7.5YR 7/8) 色の軽石小粒を含む、可塑性やや強、粘着性やや強、透水性中、ち密度は24mm、層界は漸変
- III AB 105~120cm、黒褐 (7.5YR 3/2) 色の埴壤土 (CL)、発達弱度の塊状構造、細孔隙あり、礫なし、可塑性やや強、粘着性やや強、透水性中、ち密度は24mm、層界はやや明瞭
- III B 120~150cm、暗褐 (7.5YR 3/3) 色の埴壤土 (CL)、弱度の塊状構造、細孔隙あり、礫なし、ち密度は22mm

本断面は3断面 (I, II, III) よりなっている。すなわち、II断面 (アカホヤ層) をはさみ、上下の断面が認められた。

C-12区：土壤群 黒ボク土 (黒ボク土畑)



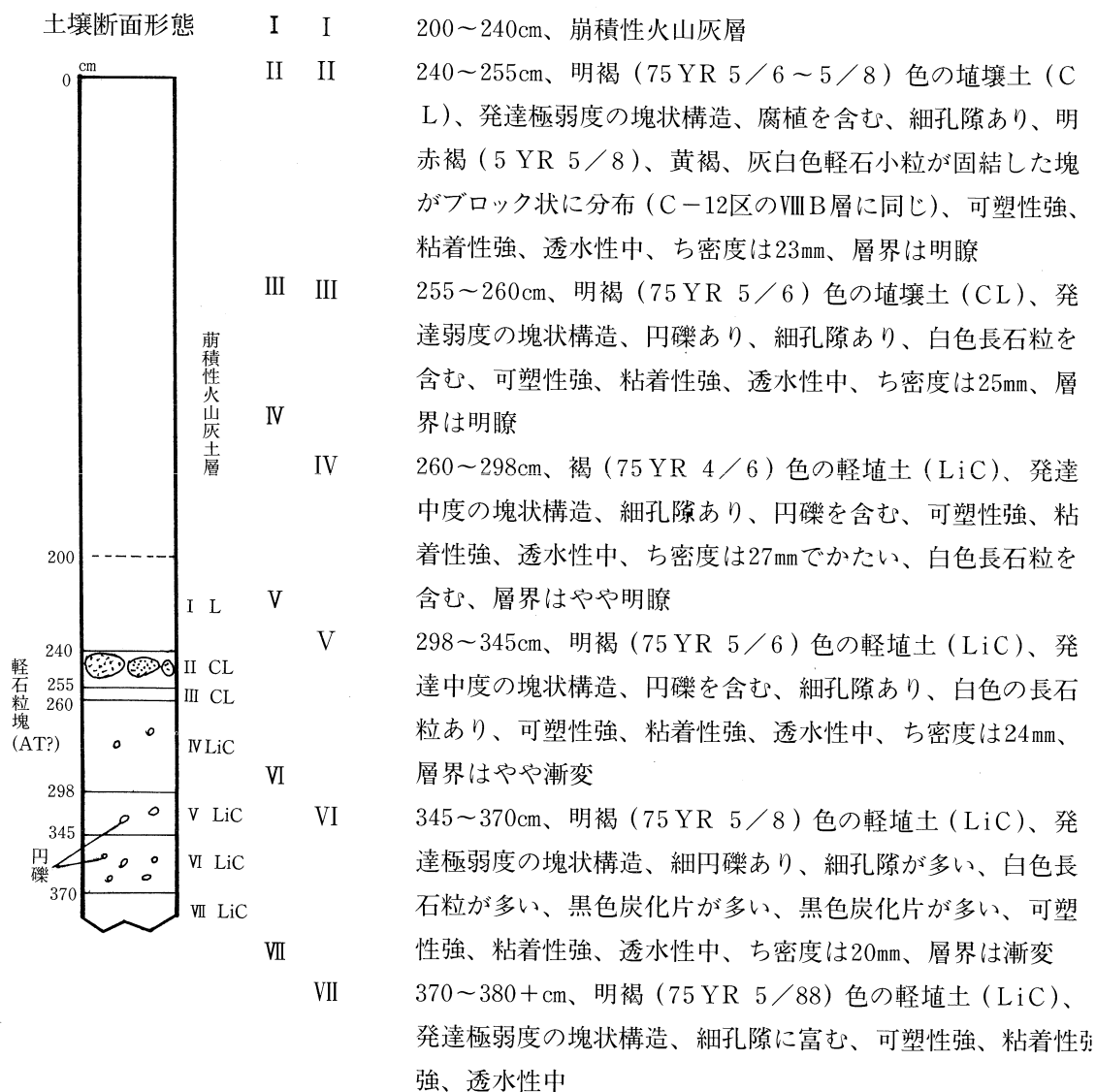
- I AP 0~11cm、黒褐 (7.5YR 3/2) 色の壤土 (L)、作土層、発達弱度の粒状構造、腐植にやや富む、細孔隙あり、可塑性中、粘着性中、透水性中、植物根あり、ち密度は15mm、層界は漸変
- I A12 11~35cm、黒褐 (7.5YR 3/2) 色の壤土 (L)、発達弱度の塊状構造、腐植にやや富む、細円礫あり、細孔隙あり、可塑性中、粘着性中、透水性中、ち密度は22mm、層界は明瞭
- II A 35~48cm、黒褐 (7.5YR 3/2) 色の壤土 (L)、発達弱度の塊状構造、腐植に富む、細孔隙あり、細円礫あり、可塑性中、粘着性中、透水性中、ち密度は21mm、層界は明瞭
- III B 48~90cm、褐 (7.5YR 4/6) 色の細砂質壤土 (FSL)、発達極弱度の塊状構造、細円礫あり、細孔隙あり、ガラス質火山灰層 (再積性アカホヤ層)、可塑性弱、粘着性弱、透水性大、ち密度は19mm、層界は明瞭
- IV AB 90~135cm、褐 (7.5YR 4/6) 色の細砂質壤土 (FSL)、腐植を含む、発達弱度の塊状構造、細孔隙あり、細円礫あり、可塑性中、粘着性中、透水性中、ち密度は22mm、層界は明瞭
- V A11 135~165cm、黒 (7.5YR 2/1) 色の微砂質壤土 (SiL) ~埴壤土 (CL)、発達弱度の塊状構造、腐植にすこぶる富む、細孔隙あり、可塑性中~やや強、粘着性中~

やや強、透水性中、ち密度は23mm、層界はやや明瞭

- V A 12 165～183cm、黒褐 (75 Y R 2 / 2) 色の微砂質壤土 (SiL)、発達弱度の塊状構造、腐植に富む、細孔隙を含む、可塑性中、粘着性中、透水性中、ち密度は24mmでややかたい、層界は明瞭
- V B 21 183～200cm、黒褐 (75 Y R 3 / 2) 色の微砂質壤土 (SiL)、発達弱度の塊状構造、腐植を含む、細孔隙あり、可塑性中、粘着性中、透水性中、ち密度は22cm、層界は漸変
- V B 22 200～230cm、黒褐 (75 Y R 2 / 2) 色の埴壤土 (CL)、発達中度の塊状構造、腐植を含む、細孔隙を含む、可塑性強、粘着性強、透水性小、ち密度は24mmでかたい、層界はやや漸変
- VI A B 230～252cm、黒褐 (75 Y R 3 / 1) 色の微砂質埴壤土 (SiCL)、発達やや中度の塊状構造、腐植にやや富む、可塑性強、粘着性強、透水性中～小、ち密度は23mm、層界は明瞭
- VI B 21 252～288cm、褐 (75 Y R 4 / 4) 色の埴壤土 (CL)～軽埴土 (LiC)、発達弱～中度の塊状構造、腐植を含む、細孔隙あり、可塑性強、粘着性強、透水性中、ややち密な土塊 (23mm) を含む、ち密度は21～22mm、層界はやや明瞭
- VI B 22 288～307cm、褐 (10 Y R 4 / 6) 色の埴壤土 (CL)、発達弱度の塊状構造、細孔隙を含む腐植あり、可塑性強、粘着性強、透水性中、ややち密な土塊を含む、ち密度は22mm、層界はやや明瞭
- VII B 307～314cm、明褐 (75 Y R 5 / 6) 色の軽埴土 (LiC)、発達極弱度の塊状構造、細孔隙を含む、腐植あり、可塑性強、粘着性強、透水性小、ち密度は18mm、層界はやや明瞭
- VIII B 314～325cm、明褐 (75 Y R 5 / 6) 色の軽埴土 (LiC)、発達弱度の塊状構造、腐植を含む、細孔隙あり、風化軽石 (黄褐、赤褐、灰白色) の塊 (径5～10cm大) (AT?) が多く認められた、可塑性強、粘着性強、透水性小、ち密度は19mm、層界はやや明瞭
- IX B 325～337cm、明褐 (75 Y R 5 / 6) 色の重埴土 (HC)、発達弱～中度の塊状構造、腐植やや含む、細孔隙あり、細円礫あり、上層よりかなり粘る、可塑性強、粘着性強、透水性小、ち密度は24mmで上層よりかたい、層界はやや漸変
- X B 337～367+cm、明褐 (75 Y R 5 / 6) 色の重埴土 (HC)、発達中度の塊状構造、腐植ややあり、細孔隙含む、かなり粘る、細円礫を多く含む、可塑性強、粘着性強、透水性小、ち密度は27mmでかたい

本断面はX断面よりなり、特徴的な土層としてアカホヤ層 (III B層) と風化軽石よりなる土塊を含む層 (AT?) をもち、4埋没表層 (II A、IV A B、V A、VI A B) が認められた。

B-15区：土壤群 黒ボク土（黒ボク土畑）



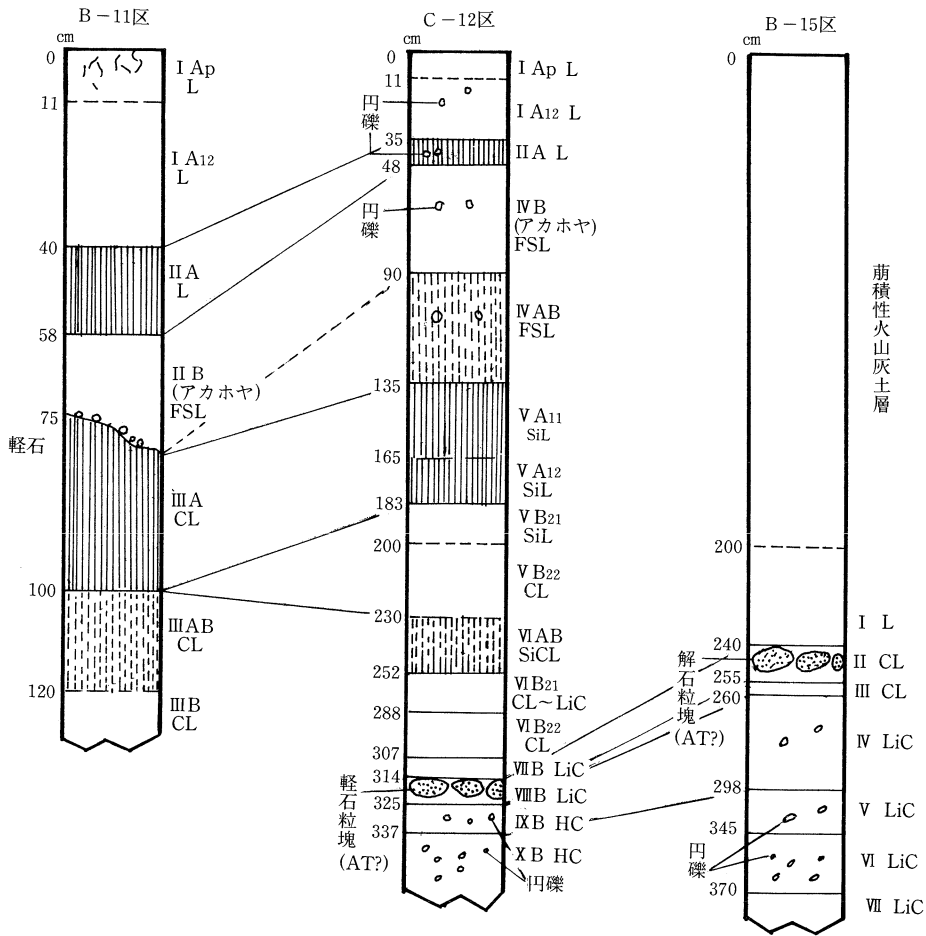
本断面の0~200cmは崩積性火山灰層よりなる。II~III層は断面C-12区のVII B層とVIII B層と同位層と考えられる。

【遺物包含層】

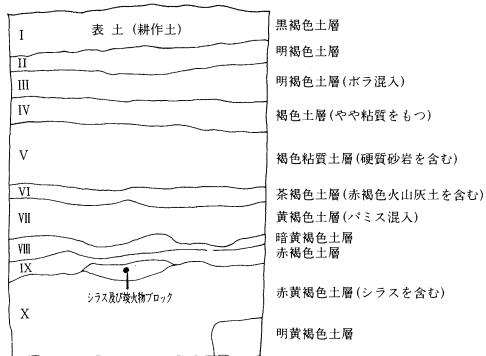
発掘調査区は、金剛寺原台地の古地形を開削して、畑地が開墾されたところであり、上層にあたる地層は消滅している。しかし、北側に接する11区~16区では一段高い畑地があり、B-11区における断面にて上層の土層を確認することができた。（B-11区基本層序I A P ~ III B）

土層傾きは北から南へのやや強い傾斜、東から西へはゆるやかな傾斜が見受けられる。

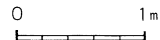
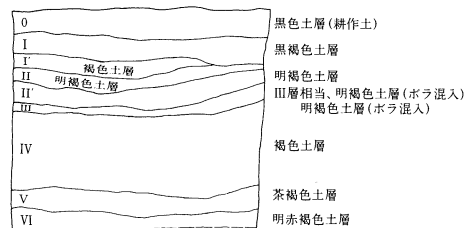
遺物は、C-12区のVIII B層、B-15区のII層に当る。風化軽石（黄褐、赤褐、灰白色）層の上層となる、明褐色土層を包含層としており20cm内外の厚さをもつ。下層には、全く遺物の包含を見受けなくなる。また、上記風化軽石層は、AT層に当るものと思われる。



土層トレンチ
18-B 北壁セクション



14-C 南壁セクション



第3図 金剛寺原第1遺跡土層断面図

4. 遺跡の調査

(1) 石器群の出土状況

金剛寺原第1遺跡では、ナイフ形石器、スクレイパー、使用痕剥片および剥片等の233点の石器を出土しており、これら石器群は、焼石群の分布と一致し、グルーピングされた状況で出土することが注目される。

それらグルーピングされた焼石及び石器群をブロック分けしてみると次のとおりとなる。

【第1ブロック】 C-12, C-13からD-12, D-13のグリッドの交点を含みやや13列のC, D区に、広がりを見せる。ブロックで、使用痕剥片、石錐、スクレイパー、エンド・スクレイパー、石核、剥片等を出土している。

石器の出土は良好な状況にあるが、焼石の分布にはややまとまりを欠く感をもつ。

【第2ブロック】 C-14区内にまとまるブロックで、小石核、二次加工剥片、ナイフ形石器等9点を出土している。焼石の分布は希薄でまとまりがない。

【第3ブロック】 B-15, B-16, B-17区及びC-16区の一部にかかる半円状の焼石群が見受けられるが、北側は調査区外となり、全体範囲を確認することはできない。スクレイパー、石核、ブランク、ナイフ形石器等を出土している。

このブロックは、北側に位置し、旧地形が南傾斜のため、包含層となる明褐色土層は10cmと薄く、下部層に風化軽石（黄褐、赤褐、灰白色）のAT層が露出する。

【第4ブロック】 第3ブロックの南に位置し、C-16, C-17区に半円状の焼石群が分布し、南側は調査区外となり、全体範囲を確認することはできない。

このブロックには台石を伴い、石核、剥片、スクレイパー、使用痕剥片等が出土しており、なかでも剥片の数が多く、また、石核と剥片が接合できる状況も見受けられ、石器製作の過程を窺うことができる。

なお、包含層は、25cmと厚くなる。

【第5ブロック】 B-17, B-18区とC-17, C-18区の交点を中心とする小範囲の円形を示すブロックである。焼石は、希薄で分布にまとまりを欠いている。石器は、敲石、コア・スクレイパー、使用痕剥片等が出土しており、ブロック内出土石器に接合できる石器5点が見受けられる。

【第6ブロック】 C-18, C-19区に半円形状の濃密な焼石の分布が見受けられ、南側調査区外にその範囲が延びる。焼石を伴う包含層は、25~30cmの厚さをもつ。焼石の濃密さに比例して、石器の出土も濃密であった。製品化された石器に比して、剥片が非常に多く、また、台石となる大型礫及び石核等も見受けられ、接合できる剥片の数も多く、素材となる円礫から製品石器となる石器製作過程を顕著に窺い知ることができることは注目される。

【第7ブロック】 第6ブロックの北に接してC-19, B-19区を中心としたブロックで、ブロック内の境界は明瞭ではないが、第6ブロック同様、接合石器が見受けられ、接合石器の分類からブロック分けしている。

焼石の分布は、やや散乱状況となり濃密さを欠く。

焼石を伴う包含層は20cm内外の厚さをもつ。石器には、スクレイパー、石核、石錐、二次加工剥片及び使用痕剥片の出土数が多いことに注目される。

【第8ブロック】 第6、第7ブロックから離れたC-21、C-22区に位置する焼石は、散乱した状態であり、ややまとまりのない範囲を示す。

石器はスクレイパー、二次加工剥片、使用痕剥片等が出土しており、このブロックでも接合石器が見受けられた。焼石及び石器を伴う包含層は約10cmと薄い。(野間)

第1表 個体・器種別組成表

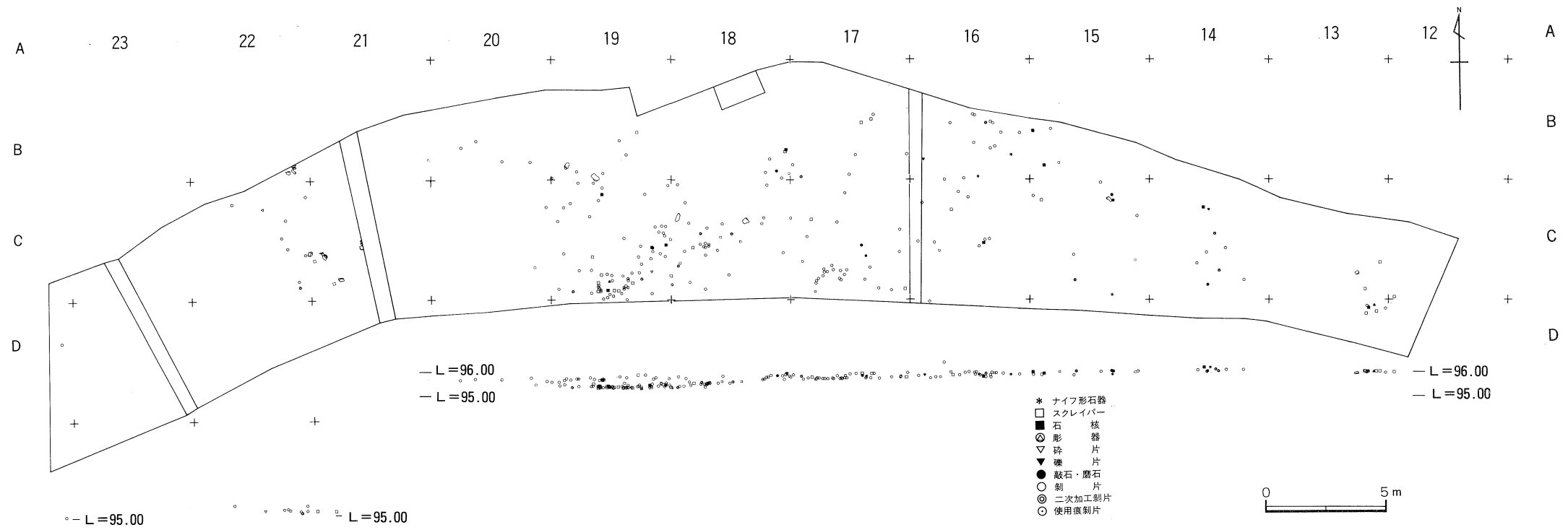
個体No.	KN	DR	SC	RF	UF	CO	H		小計		F	CH		合計
1			1	1	3	1			6		5			11
2				1	1	2			4		18			22
3			2	3	5	1			11		14			25
4			6	4	6				16		5			21
5	2	2	1	2	8				15		10			25
6	1		1			1			3		8			11
7			11		3	1			15		12			27
8			2		5	1			8		11			19
9				1	4				5		6			11
10					1				1		2			3
11	1		1		1				3					3
12				1		1			2		2			4
13											1			1
14				1					1					1
15					2				2		1			3
16			1	1					2		2			4
17							1		1					1
18			1		2				3					3
19					1				1					1
20			1						1		2			3
21				1	2				3		2	1		6
22			1	1					2					2
23												1		1
24				1					1					1
25			1						1					1
26			1						1					1
27					1				1					1
28			1						1					1
29											1			1
30						1			1					1
31											1			1
32			1						1					1
合計	4	2	33	18	45	9	1		112		103	2		217

個体別資料の検討は、基本的に台石、敲石を分類の対象としていない。ただし、敲石のうち接合したものは、分類の対象として個体No.を付けている。そのため、個体別資料の分類には、217点の石器類を対象としている。

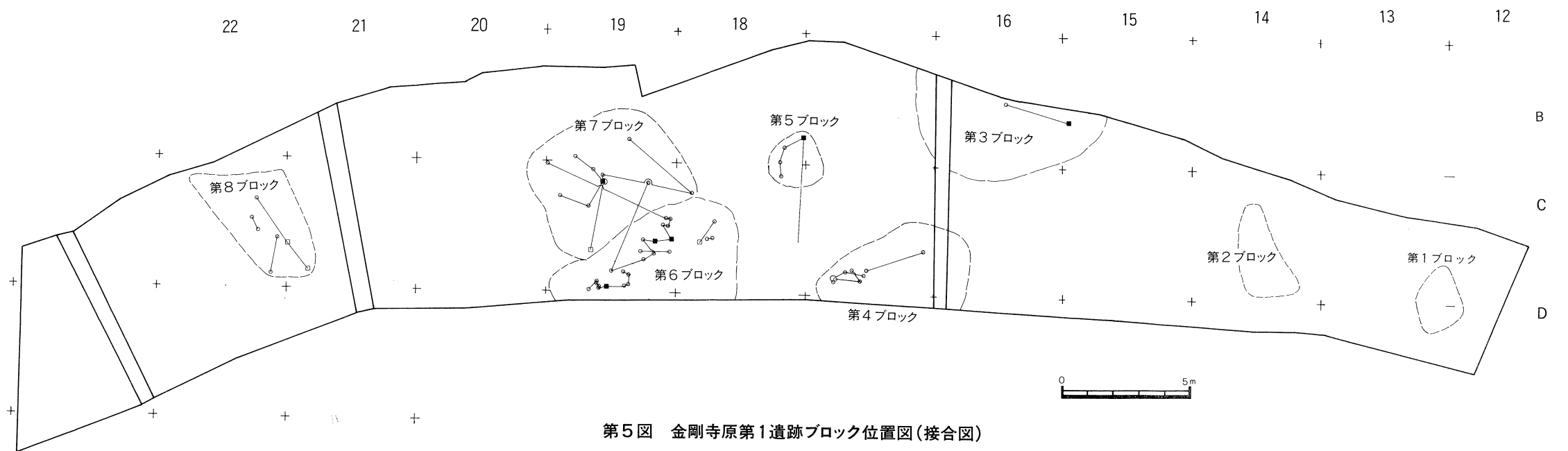
器種分類記号

KN…ナイフ形石器 DN…石錐 SC…スクレイパー RF…二次加工のある剥片

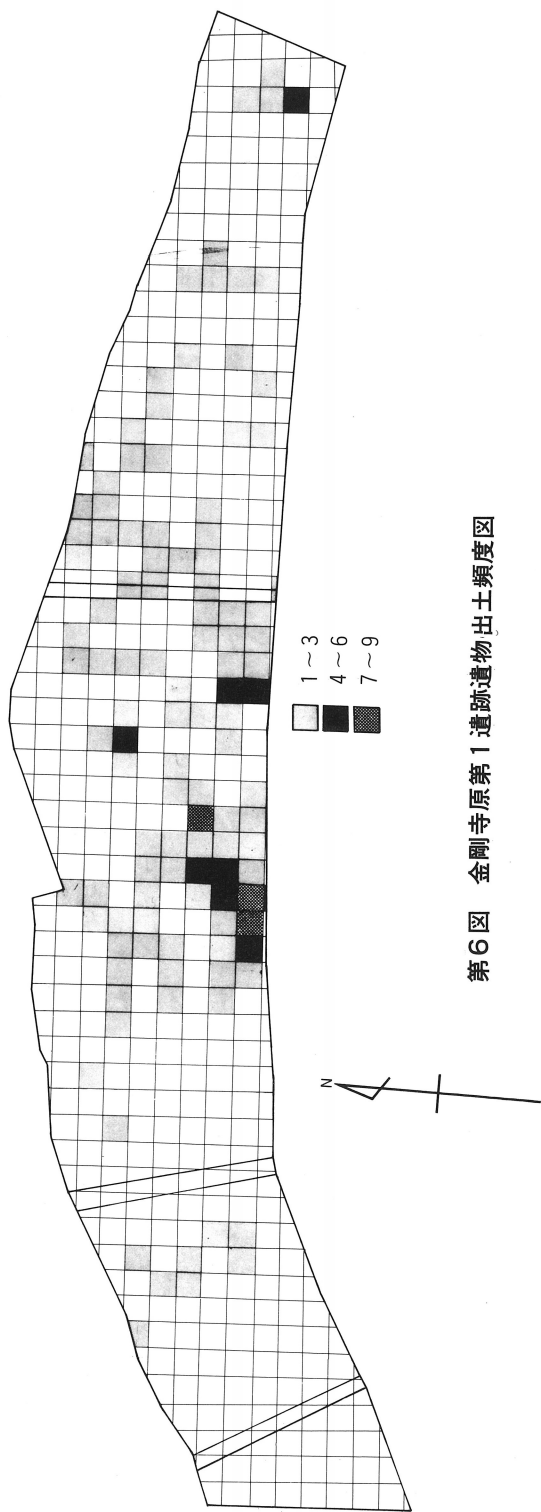
UF…使用痕のある剥片 CO…石核 H…敲石 AN…台石 F…剥片 CH…碎片



第4図 金剛寺原第1遺跡出土遺物平面・垂直分布図



第5図 金剛寺原第1遺跡ブロック位置図(接合図)



第6図 金剛寺原第1遺跡遺物出土頻度図



第7図 ナイフ形石器・スクレイパー出土分布図

(2) 出土遺物

金剛寺原第1遺跡では、233点の遺物が出土しているものの、礫が7点含まれるためこれを除き、5点の敲石片の接合により1点の敲石として復元できたため、石器類の出土総点数を222点とした。

○ナイフ形石器は4点出土している。(第8図)

- 111 厚みのある縦長剥片を素材とした二側縁加工のものである。ブランディングは右側縁に背面より2枚施されている以外、主要剥離面からのものである。背面に自然面を残し、先端部が少し欠損しており、刃部には、使用による摩滅が認められる。
- 116 不定形剥片を素材とした一側縁加工のものであるが、先端部と基部を欠損している。ブランディングは主に主要剥離面より施されているが、数枚背面からのものが認められる。
- 66 不定形剥片を素材とした部分加工のものである。剥片の打面部は、主要剥離面からのブランディングにより削除されている。右側縁には使用による微小剥離痕が認められる。
- 45 縦長剥片を素材とした二側縁加工のものである。ブランディングは主に主要剥離面から施されており、特に先端部の加工は左側縁上部の面からも緻密で先端を尖らすように施されている。二側縁にブランディングが施されており、ブランディングが施されていない左側縁は背面に対し直角に落ちている。そのため、先端を尖らすような加工から尖頭器的な機能が考えられる。

○石錐は2点出土している。1点は完形品であり、他は先端部のみである。(第8図)

- 136 厚みのある剥片を素材とし、打面部に主要剥離面からの粗い加工により錐部を作出している。背面に大きく自然面を残している。

○スクレイパーは33点出土している。コア、ラウンド、エンド、サイド、ノッチド・スクレイパーなど各種のものが認められる。(第8～10図)

- 24 剥片の打面と左側部が欠損しているが、右側部に刃部を残している。背面に一部自然面を残している。唯一、黒曜石製のものである。
- 25 右側縁に刃部を形成するサイド・スクレイパーである。剥片の打面部が欠損しており、背面に大きく節理面を残している。
- 215 剥片の打面部を切断し、切断面の一部と左側縁下部、右側縁上部から中部にかけて部分に刃部を形成している。右側部に自然面を残している。
- 14 石核を転用したいわゆるコア・スクレイパーである。石核より剥片が剥離されたあとの剥離痕の稜線部を石核の打面から大まかな加工を施したあと、細かな加工で刃部を形成している。使用により一部の刃部が摩滅している。
- 61 縦長剥片を素材にしたサイド・スクレイパーである。両側縁に大まかな刃部調整を施し刃部を形成している。下部は欠損している。

- 210 厚みのある剥片の下縁部に刃部調整を施したエンド・スクレイパーである。主要剥離面からの大まかな調整のあと細かな調整を施し、弧を描くような刃部を形成している。
- 168 自然面打面の石核より剥離された縦長剥片を素材としたエンド・スクレイパーである。刃部調整は、主要剥離面より細かに施されており、背面に大きく自然面を残している。
- 133 厚みのある剥片を素材とし、右側縁上部と左側縁下部に弧を描くような刃部を形成するラウンド・スクレイパーである。刃部調整は剥片の周囲に大まかな調整を施したあと、右側縁上部と左側縁下部に主要剥離面より細かな調整が施されている。上部は大まかな調整のみ背面から施されている。
- 157 右側縁の一部以外は全て二次加工が施されているラウンド・スクレイパーである。打面部には背面より、左側縁から右側縁下部にかけては主要剥離面より刃部調整が施されている。背面には大きく自然面を残し、右側縁に使用痕と思われる微小剥離痕が認められる。
- 112 自然面打面の剥片を素材としたものである。下部は背面からの粗い加工によりカットされており、その部分に接するように右側縁下部に刃部調整が施されている。
- 190 縦長剥片を素材としたエンド・スクレイパーである。剥片の下部から右側縁中部にかけて主要剥離面から刃部調整が施されており、右側部には節理面が認められる。
- 135 分割礫を素材としたものである。刃部調整は、右側縁上部と下部に分割面より施されており、右側縁上部はノッチ状を呈している。
- 95 剥片の下縁部に主要剥離面からの刃部調整が施されているエンド・スクレイパーである。左側縁下部と右側縁下部には細かな調整が施されており、下縁部の大きな剥離痕は刃部調整時におけるアクシデントによるものと考えられる。
- 127 厚みある縦長剥片を切断したものを素材としたサイド・スクレイパーである。左側縁に主要剥離面からの刃部調整が施され、右側縁には使用によるものと思われる微小剥離痕が認められる。
- 199 厚みのある剥片の下部を中心に左側縁から右側縁中部にかけて刃部を形成するエンド・スクレイパーである。刃部調整は主要剥離面から施されており、下縁の先端部には使用による摩滅が認められる。
- 8 剥片の下部に刃部を形成するエンド・スクレイパーである。右側縁上部から中部にかけてと下部に背面からの粗い加工が、また下部には主要剥離面からの加工が認められる。右側縁の中部に使用による微小剥離痕が認められる。また火の影響を受けたためか赤褐色に変色している。
- 72 右側部の自然面を残す部分に刃部を形成するサイド・スクレイパーである。
- 187 左側縁上部と右側縁中部から下部にかけて刃部を形成するサイド・スクレイパーである。打面に自然面を残している。
- 38 幅広の剥片を素材とし、右側縁と左側縁下部に刃部を形成するノッチド・スクレイパーである。刃部調整は主に主要剥離面からのものであるが、右側縁には背面からのものも認められる。

159 剥片の打面部をカットして右側縁上部にかけて刃部調整が施されている。下縁部に節理面を残している。(第16図・接合資料F)

○使用痕のある剥片は45点出土している。(第11図)

96 幅広の縦長剥片の両側縁及び下縁部に使用による微小剥離痕が認められる。下縁部の微小剥離痕はステップぎみであり、両側縁との使用用途が異なることが考えられる。

148 縦長剥片の右側縁の中部から下部にかけて使用による微小剥離痕が認められる。

233 剥片の左側縁に使用による微小剥離痕が認められる。右側部には自然面を残している。

52 剥片の背面はほとんど自然面が占めており、右側縁に使用による摩滅が認められる。

131 打面が小さく下部が幅広の縦長剥片の両側縁に使用による微小剥離痕と摩滅した部分が認められる。下部には自然面を残す。

○敲石は3点出土している。(第11図)

(13・15・92・97・98)

拳大よりやや大きな楕円礫の片端に打痕を残すものである。石材は流紋岩であり、礫面には安定した平坦面があることから、石器製作のための原石として持ちこまれたものとも考えられる。使用中のアクセントにより破損したものと考えられる。

○二次加工剥片は18点出土している。(第12図)

58 厚みのある剥片を素材とし、主要剥離面側の右側部、下部、左側部にかけて二次的な調整が施されている。

○石核は9点出土している。(第12図～16図)

32 礫を分割した分割面を打面として縦長剥片が剥離されている。打面調整は施されない。また打面の一部には岩石の中に含まれ化石化したものが露出している。一側面から後方にかけて自然面を残している。作業面には打面からの大まかな調整が施されている。

57 偏平な礫を分割し、打面を転移しながら不定形な剥片を剥離している。右側面では下部に自然面が認められるため剥片をそれほど多く剥離していないものと考えられる。

101 偏平な礫の節理面を打面あるいは一側面として設定し、頻繁に打面転移を行いながら幅広の剥片を目的剥片として剥離している。また、頭部調整は余り施されていない。

208 自然面を打面として設定し、打面や側面の調整が施されずに剥片を剥離している。そのため作業面以外は自然面が占めている。また左側面と打面転移している。

177 礫を分割した分割面を打面とし、不定形な剥片を剥離している。後方には大きく自然面を残し、一部調整が認められる。

175 偏平な礫の平坦面を一側面に設定して平坦打面より縦長剥片を剥離している。右側面には平坦な自然面を残し、左側面は打面からの調整により形成されている。

138 厚みのある大形の剥片を素材とし、交互剥離により幅広の剥片を剥離している。また頭部調整が施されており、作業面には一部自然面を残している。

(3) 接合資料

金剛寺原第1遺跡では、16例の接合関係が確認することができる。(第13~16図)

接合資料A (105, 5, 103, 4, 101)

石核1点、二次加工剥片1点、使用痕剥片1点、剥片2点の計5点の資料のもので、第2ブロックに分布している。節理面を石核の側面あるいは打面として設定し、頻繁に打面を転移しながら幅広の剥片を目的剥片として剥片剥離を行っている。打面転移のため作業面であったところが打面として用いられることが認められる。したがって剥片の打面には節理面打面のもの、複剥離打面のものが主体を占める。また石核の上面には一部に熱を受けて変色している部分が認められる。

接合資料B (189, 211, 213, 209, 194, 212, 191, 158, 193, 208)

この資料は角錐状に近い礫の一面を自然面打面として設定し、剥片剥離が行われている。石核を整えるための側面調整や剥片の形を整えるための頭部調整などはまったく施されていない。ただ剥片剥離の終盤には、作業面をかえずに打面転移されている。剥片剥離に関しては規則性は感じられず、剥片の形態も様々である。

接合資料C (9, 183, 177, 151, 154, 153, 172, 2, 181, 174, 171, 175)

拳大の扁平な礫を分割し、一方を小石核(117)として用い、もう一方は石核としてそれぞれ分割面を打面として設定している。小石核は不定形剥片(9, 183)を剥離しているが、礫の厚さからそれほど剥離されていない。一方の石核は側面からの剥離(151)より作業面が準備され、打面からの調整(172)より左側面を整え、右側面に平坦な自然面を残したまま縦長剥片を剥離している。また剥片剥離が進んだ段階で打面再生(171)が施されている。

接合資料D (77, 73)

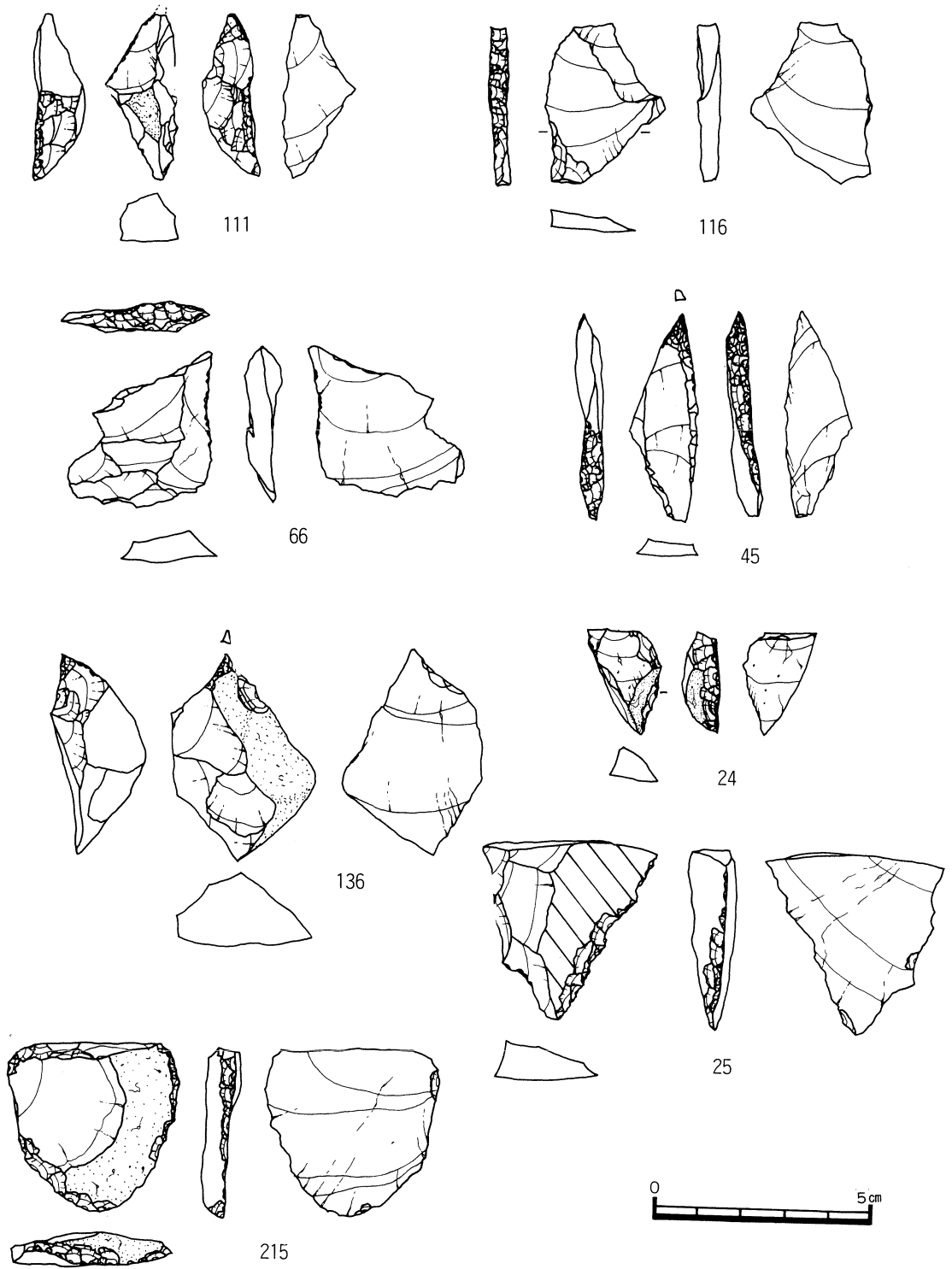
縦長剥片の接合である。剥片には頭部調整が施されているため、打面の厚さも薄く面積も小さい。このような剥片は本遺跡において極めて点数の少ないものである。

接合資料E (139, 138)

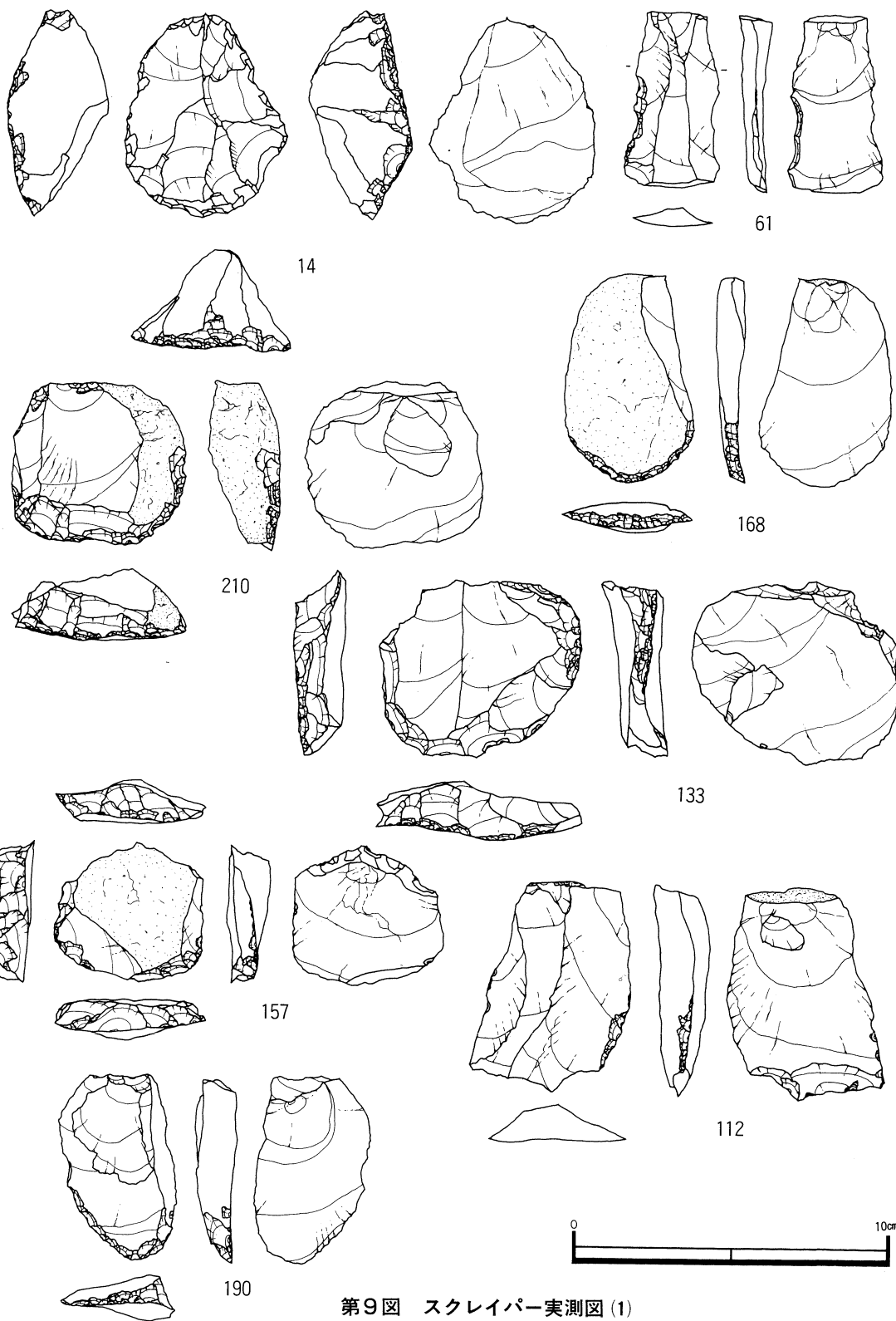
石核と剥片の接合である。石核の素材には厚みのある剥片が素材とされ、交互剥離のため剥片の打面には頭部調整や剥片剥離の痕跡が認められる。

接合資料F (7, 102, 159, 99)

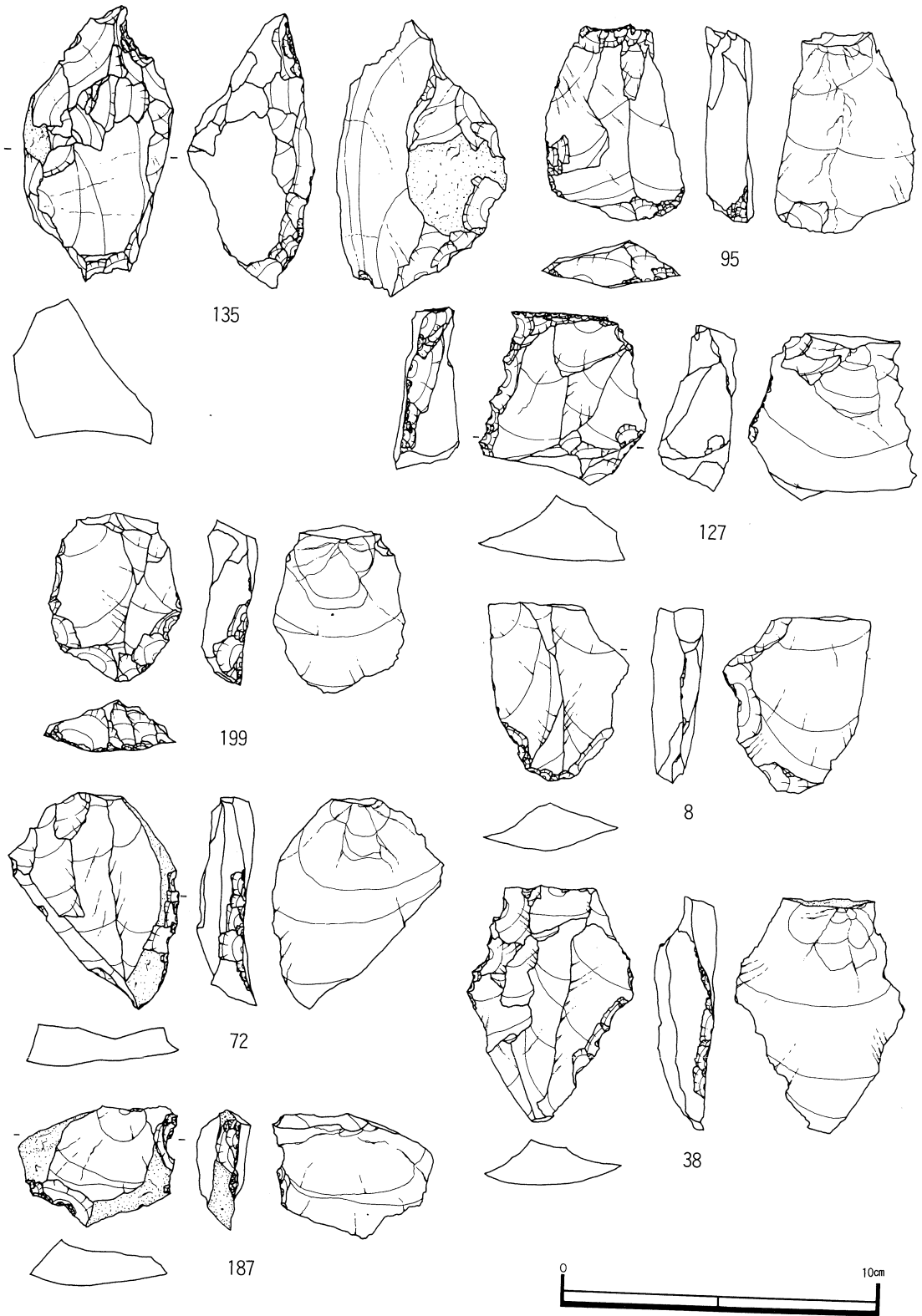
剥片とスクレイパーの接合である。底面に節理面を用い、頭部調整を施しながら剥片剥離が進んでいる。



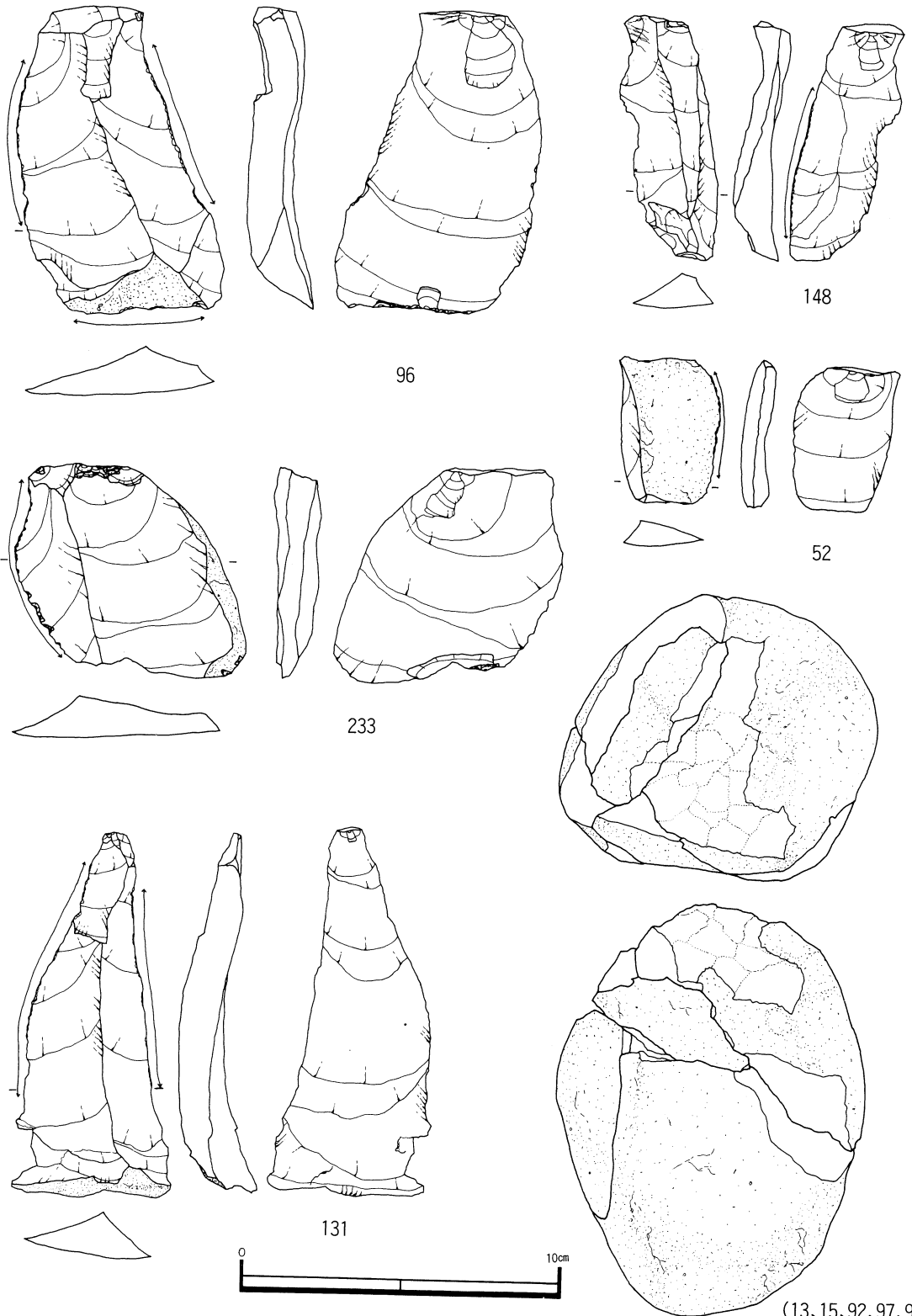
第8図 ナイフ形石器・石錐・スクレイパー実測図



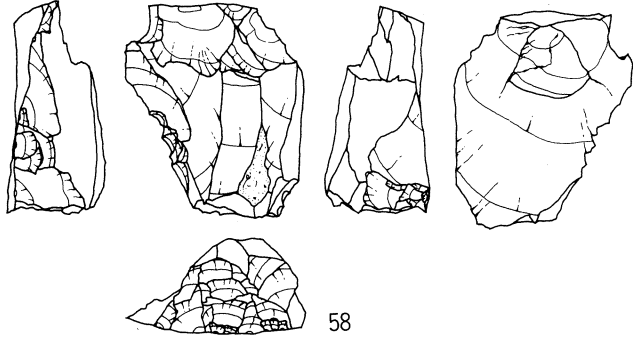
第9図 スクレイパー実測図(1)



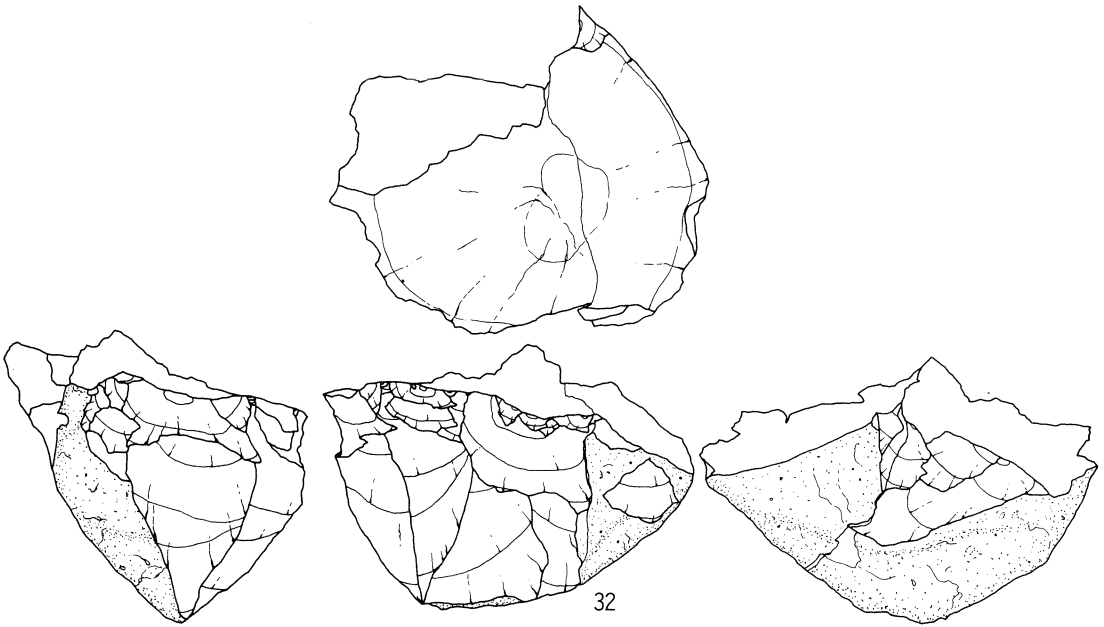
第10図 スクレイパー実測図(2)



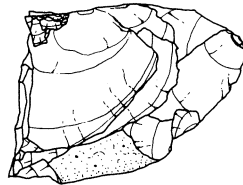
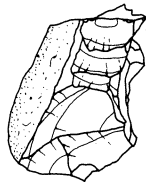
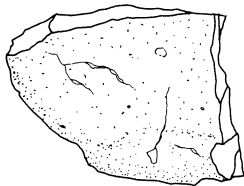
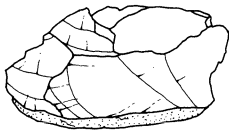
第11図 使用痕のある剥片・敲石実測図



58



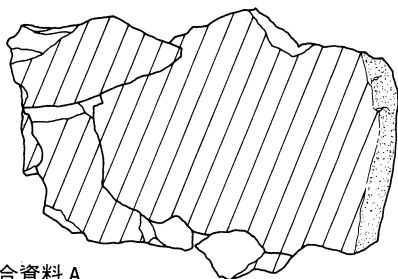
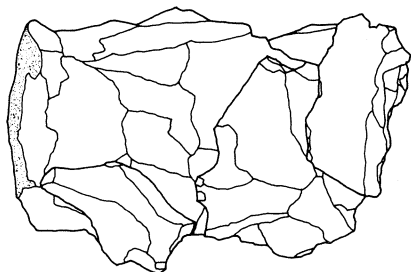
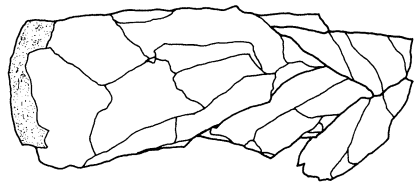
32



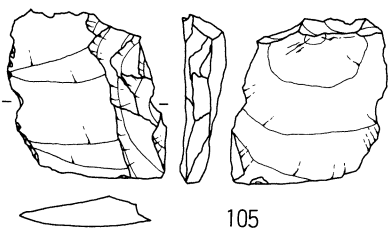
57



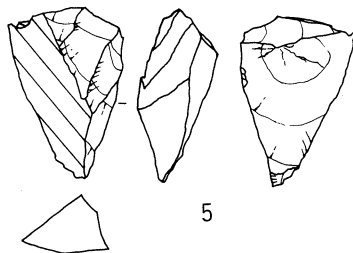
第12図 二次加工剥片・石核実測図



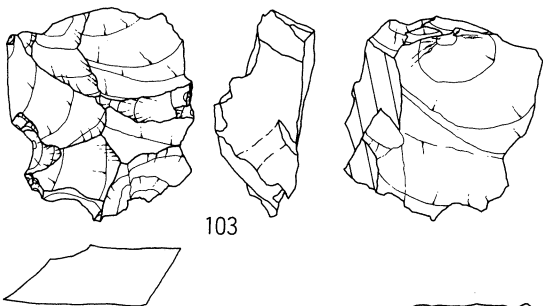
接合資料 A



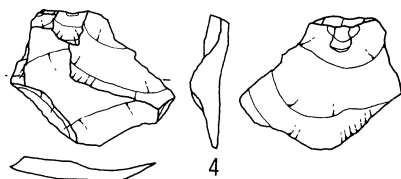
105



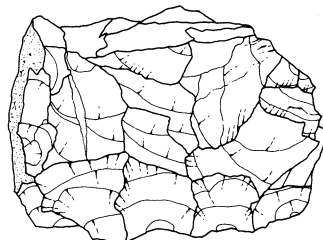
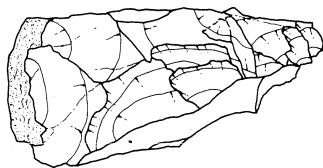
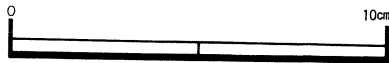
5



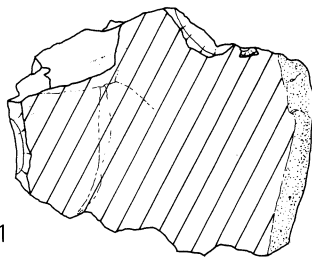
103



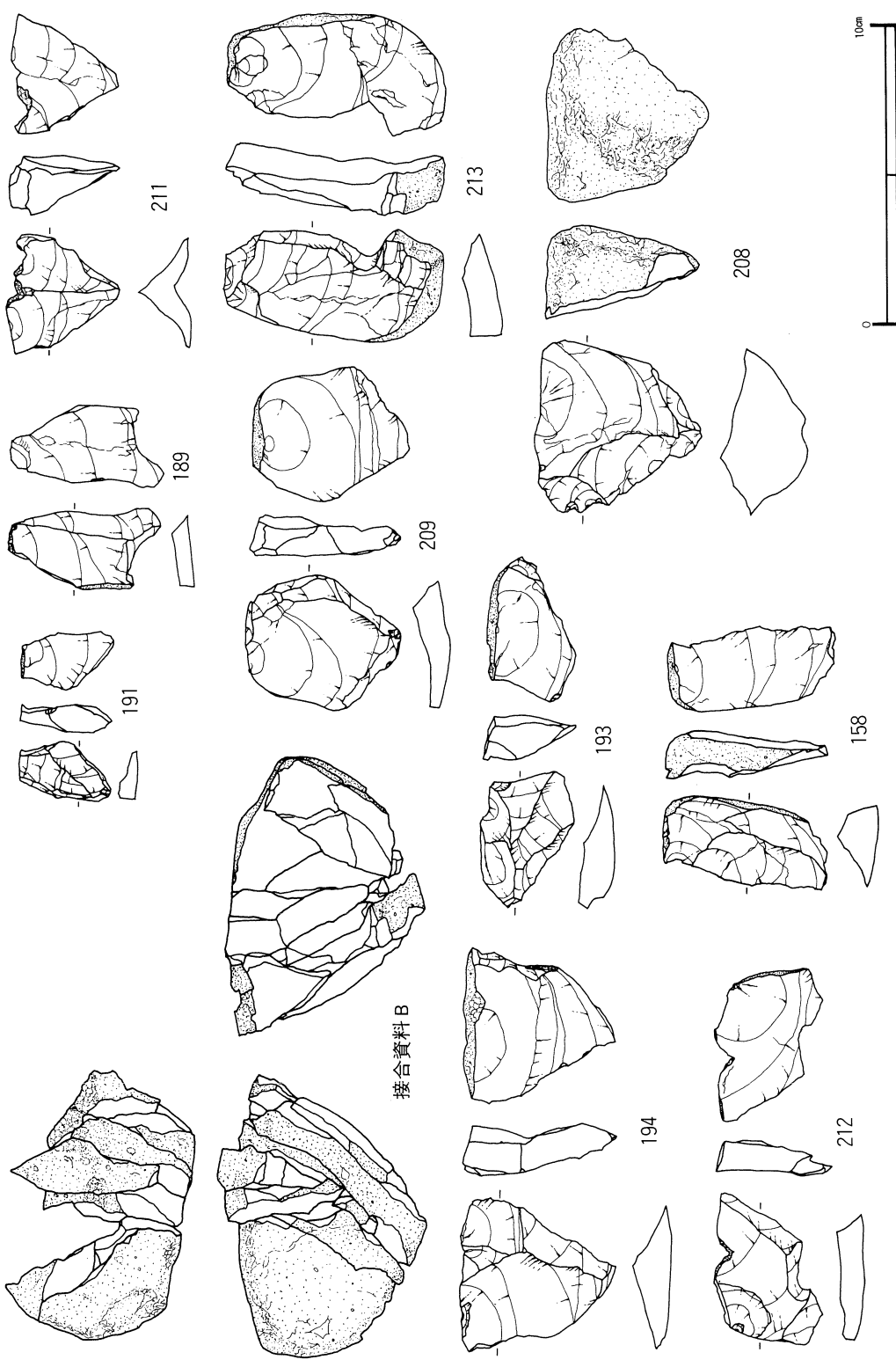
4



101

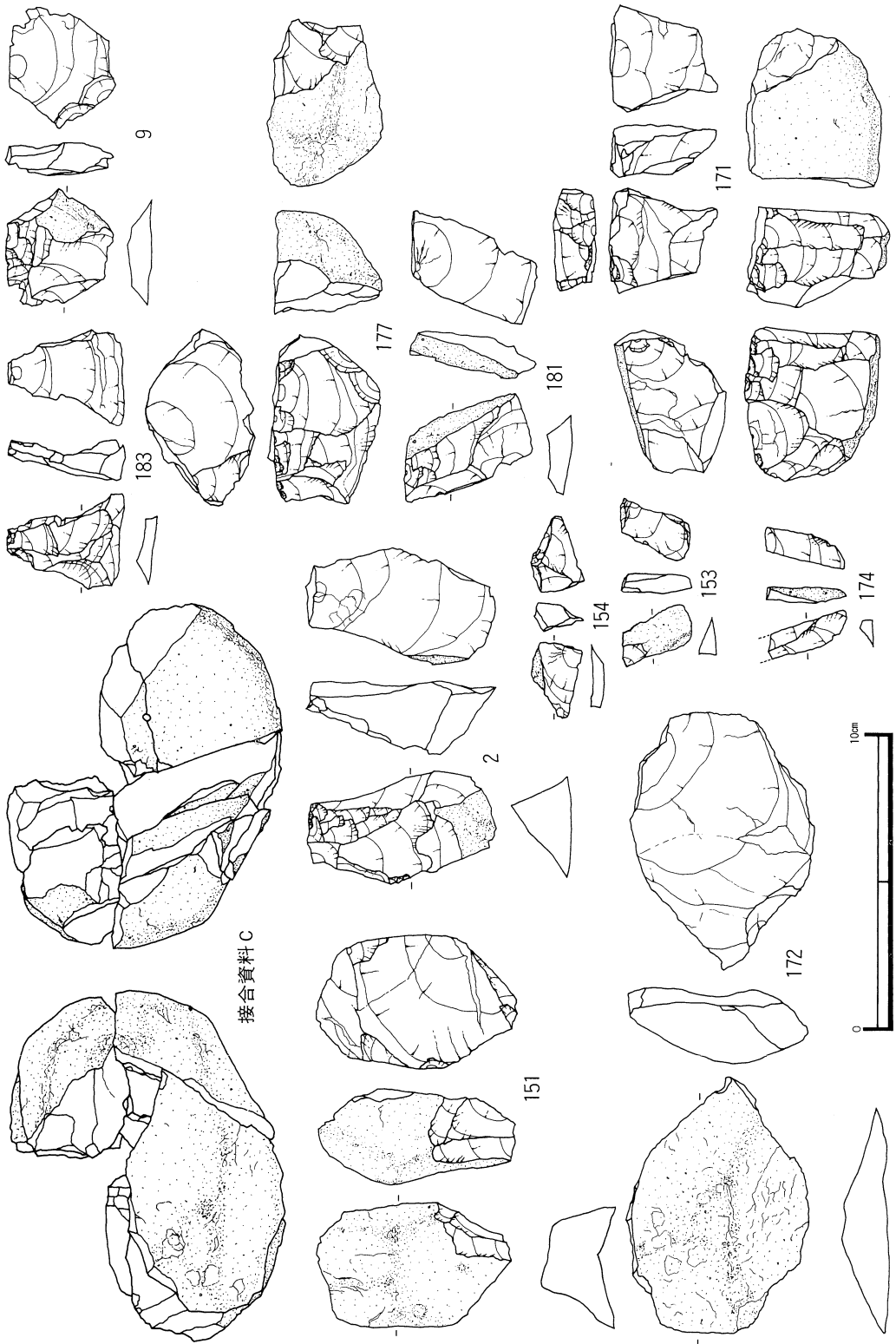


第13図 接合資料 A



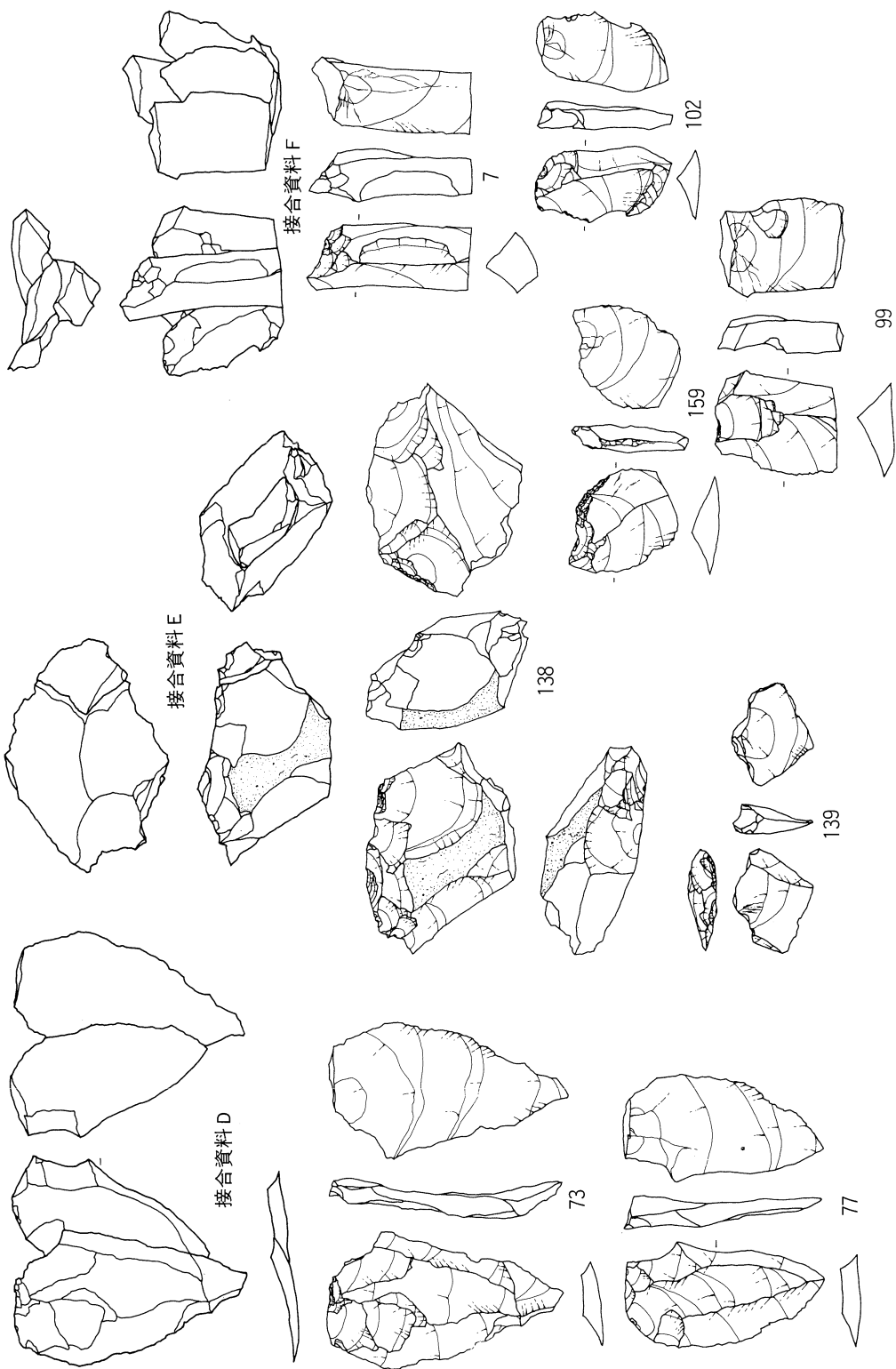
接合資料 B

第14図 接合資料 B



接合資料 C

第15図 接合資料 C



第16図 接合資料D, E, F

第2表 金剛寺原第1遺跡遺物観察表

No.	グリッド	器種	石材	個体	最長	最幅	最厚	重量	打面	備考	図版
1	B-20	RF	Ru	3	2.2	3.1	0.5	4.0			
2	B-20	UF	Ru	2	6.4	3.8	2.1	42.0	単剥離	接合資料C	
3	B-19	F	Ru	8	4.3	3.1	0.7	9.5	単剥離		
4	B-19	F	Ru	3	3.6	4.3	0.5	7.5	自然	接合資料A	
5	C-19	F	Ru	3	4.5	3.0	1.6	16.0	複剥離	接合資料A	
6	B-19	UF	Ru	3	6.2	7.7	1.8	71.5	単剥離		
7	B-19	F	Ru	3	5.4	2.3	1.7	20.0	単剥離	接合資料F	
8	B-19	SC	Ru	28	6.6	4.5	1.5	37.0		熱を受け赤く変色。	
9	C-19	F	Ru	2	3.6	4.1	0.8	13.0	単剥離	接合資料C	
10	C-19	F	Ru	6	3.1	1.1	0.3	0.5			
11	C-19	UF	Ru	3	3.3	2.1	0.7	3.5	自然		
12	C-18	F	Ru	6	1.8	2.4	0.8	3.0			
13	B-18	H	Ru	17	6.9	6.4	1.9	49.0		15・92・97・98と接合	
14	B-18	SC	Ru	8	4.5	5.3	3.2	80.0	単剥離		
15	B-18	H	Ru	17	9.6	8.7	7.7	910.0		13・92・97・98と接合	
16	B-17	UF	Ru	5	8.7	3.6	1.2	35.0			
17	B-18	F	Ru	6	7.5	4.9	1.3	30.1	自然		
18	B-18	SC	Ru	26	5.8	5.8	1.4	45.0	単剥離		
19	B-17	RF	Ru	5	3.9	4.4	1.0	17.0			
20	C-17	P	An			
21	C-17	F	Ru	5	5.9	3.5	0.5	14.5	単剥離		
22	B-17	F	Ru	5	3.9	3.1	0.4	4.0	単剥離		
23	B-17	F	Ru	5	1.8	1.5	0.4	1.0			
24	B-17	SC	Ob	32	2.3	1.6	0.7	3.0			
25	B-17	SC	Ru	16	4.1	4.0	0.8	14.5			
26	B-17	F	Ru	16	3.3	2.2	0.7	4.0			
27	B-17	F	Ru	16	4.1	2.5	1.0	8.0	単剥離		
28	B-16	UF	Ru	8	3.5	5.1	1.6	16.0			
29	B-16	P	An			
30	C-16	F	Ru	7	3.2	2.9	0.6	4.5	単剥離		
31	C-17	AN	An	2905.0			
32	C-17	CO	Ru	7	5.7	8.0	10.0	46.0	単剥離		
33	C-17	UF	Ru	9	7.5	4.5	1.9	51.0	単剥離		
34	C-16	SC	Ru	4	5.8	6.2	2.1	62.0	単剥離		
35										欠番	
36	C-16	P	An			
37	B-18	H	An	365.0			
38	B-15	SC	Ru	25	3.9	5.0	1.4	32.0	単剥離		
39	B-15	F	Ru	7	5.3	3.2	1.2	13.0	単剥離		
40	C-15	F	Ru	4	5.5	4.1	1.7	27.0	複剥離		
41	C-14	RF	Ru	8	4.6	3.6	1.8	34.0	複剥離		
42	C-14	RF	Ru	3	4.9	4.3	1.8	35.0	単剥離		
43	C-14	F	Ru	5	3.1	2.6	0.6	6.0			
44	C-14	F	Ru	3	4.6	4.1	1.3	18.0	複剥離		
45	C-14	KN	Ru	5	4.7	1.6	0.6	5.0			
46	C-15	RF	Ru	14	5.2	4.2	2.4	35.0	複剥離		
47	C-14	P	An			
48	C-14	RF	Ru		3.1	6.7	1.1	20.0			
49	C-14	H	An	40.0			
50	C-14	P	Ru			
51	C-15	UF	Ru	8	6.0	5.2	1.8	59.0	単剥離		
52	C-15	UF	Ru	15	4.8	3.2	0.7	15.0	自然		
53	C-15	AN	An				
54										欠番	
55	C-15	SC	Ru	5	8.6	6.0	1.8	73.0	単剥離		
56	C-15	F	Ru	3	3.5	1.2	0.4	1.5			
57	B-15	CO	Ru	6	4.3	4.0	6.2	10.4	複剥離		
58	C-15	RF	Ru	3	5.7	4.8	2.7	60.5	自然	63と接合	

No.	グリッド	器種	石材	個体	最長	最幅	最厚	重量	打面	備考	図版
59	B-16	F	Ru	8	4.8	3.5	1.2	23.5			
60	B-16	F	Ru	5	3.0	3.0	0.3	5.0			
61	B-16	SC	Ru	3	5.6	3.1	0.6	15.0	単剥離		
62	B-16	RF	Ru	12	3.7	1.8	0.4	2.0			
63	B-16	F	Ru	3	2.6	3.1	0.6	4.5		58と接合	
64	B-16	F	Ru	3	7.9	2.7	1.1	23.0	単剥離		
65	B-16	F	Ru	7	3.1	4.1	0.6	6.0	単剥離		
66	B-16	KN	Ru	6	3.5	3.4	0.7	5.0			
67	C-16	SC	Ru	7	5.7	4.3	1.6	33.0			
68	C-16	F	Ru	8	4.1	2.9	0.9	11.0	単剥離		
69	C-16	F	Ru	13	6.7	4.8	1.4	34.0	単剥離		
70	C-16	RF	Ru	5	7.0	8.5	2.5	88.5			
71	C-16	UF	Ru	8	5.3	5.4	1.5	43.0	単剥離		
72	C-17	SC	Ru	18	6.8	5.4	1.5	51.0	単剥離		
73	C-17	F	Ru	10	7.8	4.6	0.6	20.0	単剥離	接合資料D	
74	C-17	UF	Ru	4	8.5	4.1	1.6	44.5			
75	C-17	F	Ru	8	3.4	2.9	1.1	5.0	単剥離		
76	C-17	UF	Ru	10	5.7	4.0	0.9	15.5	自然		
77	C-17	F	Ru	10	6.7	3.6	0.6	15.0	単剥離	接合資料D	
78	C-17	F	Ru	7	4.0	4.5	1.1	21.0	自然	84・88と接合	
79	C-17	F	Ru	4	2.9	2.8	0.6	2.5	単剥離		
80	C-17	F	Ru	5	5.4	2.2	0.7	6.5	単剥離		
81	C-17	F	Ru	8	3.5	3.5	1.0	1.0		83・87と接合	
82	C-17	F	Ru	8	6.4	3.9	1.4	28.0	単剥離		
83	C-17	F	Ru	8	4.1	3.2	1.2	20.0	単剥離	81・87と接合	
84	C-17	F	Ru	7	4.1	3.4	1.3	18.0	自然	78・88と接合	
85	C-17	F	Ru	5	7.1	3.0	1.5	19.5	単剥離		
86	C-17	F	Ch	31	2.2	3.5	0.7	5.5			
87	C-17	F	Ru	8	4.1	2.8	0.5	8.0	単剥離	81・83と接合	
88	C-17	F	Ru	7	5.5	3.2	1.2	14	単剥離	78・84と接合	
89	C-17	F	Ru	9	3.7	3.7	1.4	7.0			
90	C-17	SC	Ru	1	5.6	2.4	1.0	7.0			
91	C-17	SC	Ru	4	5.7	4.6	10.4	27.0	複剥離		
92	C-18	H	Ru	17	9.3	7.3	5.0	370.0		13・15・97・98と接合	
93	C-18	UF	Ru	4	9.3	3.8	1.8	36.5	単剥離		
94	C-18	UF	Ru	18	9.1	4.9	1.7	63.0	自然		
95	C-17	SC	Ru	7	6.1	4.6	1.4	40.0	単剥離		
96	C-17	UF	Ru	15	9.6	6.6	1.5	85.5	単剥離		
97	C-18	H	Ru	17	5.7	2.2	2.4	28.0		13・15・92・98と接合	
98	C-18	H	Ru	17	6.6	4.1	1.2	30.0		13・15・92・97と接合	
99	C-18	F	Ru	3	4.1	3.0	1.2	18.0	単剥離	接合資料F	
100	C-18	UF	Ru	27	6.1	4.8	1.9	42.0	単剥離		
101	C-19	CO	Ru	3	8.6	6.4	4.2	230.0	複剥離	接合資料A	
102	C-19	F	Ru	3	4.5	2.6	0.9	8.0	単剥離	接合資料F	
103	C-19	RF	Ru	3	5.7	5.1	1.9	55.0	複剥離	接合資料A	
104	C-19	F	Ru	3	2.0	5.1	1.2	14.5	自然		
105	C-19	UF	Ru	3	4.4	4.2	1.0	18.5	複剥離	接合資料A	
106	C-19	F	Ru	3	6.2	6.4	1.4	34.5	自然		
107	C-19	P	An			
108	C-20	UF	Ru	19	5.4	2.5	0.9	13.5	単剥離		
109	C-16	F	Ru	2	4.2	1.9	0.5	3.5	単剥離		
110	B-16	P	An			
111	C-15	KN	Ru	11	3.8	1.7	1.1	6.0			
112	C-13	SC	Ru	7	6.6	5.2	1.4	47.0	自然		
113	C-13	SC	Ru	7	3.6	3.8	0.9	14.0			
114	B-15	F	Ru	7	3.1	1.6	1.7	5.0			
115	B-16	F	Ru	8	4.0	1.9	0.7	4.0	単剥離		
116	B-16	KN	Ru	5	3.6	2.7	0.4	4.0			
117	B-16	F	Ru	6	1.9	4.0	0.3	4.5			
118	B-16	RF	Ru	22	5.5	6.7	3.0	89.5			

No.	グリッド	器種	石材	個体	最長	最長	最厚	重量	打面	備考	図版
119	B-16	UF	Ru	3	4.3	2.7	1.3	13.0	自然		
120	B-16	F	Ru	5	3.7	2.9	6.5	6.5			
121	C-16	CO	Ch	30	2.7	3.5	2.7	30.5	複剥離		
122	C-17	F	Ru	6	3.3	3.8	0.9	7.5	自然		
123	C-17	UF	Ru	5	7.6	3.9	1.1	20.5	単剥離		
124	C-17	UF	Ru	5	5.2	4.0	0.7	12.5	複剥離		
125	C-18	SC	Ru	7	5.3	5.7	1.9	50.0	自然		
126	C-18	UF	Ru	5	5.5	4.3	1.3	23.0	自然		
127	C-18	SC	Ru	11	5.3	5.3	2.1	51.0	単剥離	160と接合	
128	C-18	RF	Ru	4	3.9	3.1	0.6	5.0			
129	C-18	F	Ru	6	2.4	3.3	1.0	6.0	自然		
130	C-19	RF	Ru	24	5.1	3.3	1.1	15.5			
131	C-19	UF	Ru	5	11.5	5.1	1.5	53.0	単剥離		
132	C-20	UF	Ru	7	7.9	7.0	2.3	139.0	自然		
133	C-12	SC	Ru	22	5.6	6.5	1.8	68.0			
134	D-13	UF	Ru	8	2.6	4.5	1.4	11.5	単剥離		
135	D-13	SC	Ru	6	8.8	4.8	4.1	120.0	自然		
136	D-13	DR	Ru	5	4.7	3.2	1.6	19.0			
137	D-13	SC	Ru	7	5.6	4.7	2.3	72.0	複剥離		
138	D-13	CO	Ru	12	4.9	6.8	3.7	105.0	複剥離	接合資料E	
139	D-13	F	Ru	12	2.7	3.4	0.8	5.0	複剥離	接合資料E	
140	C-18	F	Ru	9	5.1	3.2	0.7	13.0	単剥離		
141	C-18	SC	Ru	7	4.1	2.9	0.7	8.0	単剥離		
142	C-18	F	Ru	7	7.0	4.9	1.0	25.0	自然		
143	C-18	UF	Ru	5	7.5	3.9	1.1	27.5	自然		
144	C-18	F	Ru	9	7.9	5.4	1.4	50.0	単剥離	147と接合	
145	C-18	F	Ru	4	3.1	4.5	1.0	9.5	自然		
146	C-18	F	Ru	9	3.3	1.2	0.3	1.5			
147	C-18	UF	Ru	9	6.8	4.2	1.0	3.0	単剥離	144と接合	
148	C-18	UF	Ru	9	7.9	2.7	1.0	9.5	自然		
149	C-18	UF	Ru	9	6.8	3.4	1.0	26.5	自然		
150	C-18	UF	Ru	4	6.7	4.3	1.0	40.5	単剥離		
151	C-19	F	Ru	2	6.6	3.3	2.2	84.0	自然	接合資料C	
152	C-19	F	Ru	2	2.5	3.2	0.9	7.0	単剥離		
153	C-19	F	Ru	2	2.4	2.1	0.6	3.0	単剥離	接合資料C	
154	C-19	F	Ru	2	1.7	2.6	0.4	3.0	単剥離	接合資料C	
155	C-19	F	Ru	8	4.7	2.9	1.3	12.5	複剥離		
156	C-19	F	Ru	4	3.1	1.6	0.3	1.5			
157	C-19	SC	Ru	4	4.4	4.8	1.2	28.0	複剥離		
158	C-19	F	Ru	1	5.5	3.0	1.4	24.0	自然	接合資料B	
159	C-19	SC	Ru	3	3.6	3.5	0.9	10.5		接合資料F	
160	C-18	UF	Ru	11	3.3	3.7	3.1	19.0		127と接合	
161	C-19	F	Ru	5	4.5	2.4	0.7	5.0			
162	C-19	F	Ru	20	4.2	3.0	0.9	10.0	単剥離		
163	C-19	F	Ru	15	2.0	2.2	0.7	3.0	自然		
164	C-18	RF	Ru	4	5.4	3.6	0.8	16.0			
165	C-18	F	Ru	7	1.3	1.9	0.3	0.2	自然		
166	C-18	UF	Ru	7	5.1	4.8	0.9	13.0	自然		
167	C-18	RF	Ru	4	4.1	4.2	1.5	19.0	単剥離		
168	C-18	SC	Ru	7	6.6	4.2	0.9	28.0	自然		
169	C-18	RF	Ru	9	6.1	2.6	1.1	17.5	単剥離		
170	C-19	F	Ru	9	2.7	3.4	0.7	7.0	自然		
171	C-19	F	Ru	2	3.7	3.6	1.4	24.0	複剥離	接合資料C	
172	C-19	F	Ru	2	6.3	8.8	1.7	94.0	単剥離	接合資料C	
173	C-19	F	Ru	29	2.8	3.2	0.7	4.5	単剥離		
174	C-19	F	Ru	2	2.6	1.0	0.5	1.5		接合資料C	
175	C-19	CO	Ru	2	4.8	5.2	3.4	101.0	単剥離	接合資料C	
176	C-19	F	Ru	2	4.4	7.6	1.7	49.0	単剥離		
177	C-19	CO	Ru	2	3.7	5.7	3.5	80.0	単剥離	接合資料C	
178	C-19	UF	Ru	18	5.5	4.7	0.6	9.0			

No.	グリッド	器種	石材	個体	最長	最幅	最厚	重量	打面	備考	図版
179	C-19	CH	Ru	23	2.5	0.7	0.3	0.3			
180	C-19	UF	Ru	7	5.7	3.1	0.8	14.0			
181	C-19	F	Ru	2	4.2	3.7	0.9	14.0	単剥離	接合資料C	
182	C-19	F	Ru	2	2.9	2.4	0.6	2.0	単剥離		
183	C-19	F	Ru	2	4.0	3.2	0.6	11.0	単剥離	接合資料C	
184	C-19	F	Ru	2	4.4	3.0	1.3	14.0	単剥離		
185	C-19	RF	Ru	2	2.9	2.0	0.7	3.0	単剥離		
186	C-19	UF	Ru	3	3.6	1.5	0.6	2.0	単剥離		
187	C-19	SC	Ru	7	7.4	5.4	1.4	50.0	自然		
188	C-19	F	Ru	2	1.8	1.3	3.0	2.0	単剥離		
189	C-19	RF	Ru	1	5.1	2.7	0.5	13.0		接合資料B	
190	C-19	SC	Ru	7	5.8	3.8	1.4	28.0	単剥離		
191	C-19	F	Ru	2	3.3	1.9	0.6	0.5	自然	接合資料B	
192	C-19	F	Ru	1	3.6	3.0	3.0	10.0	自然		
193	C-19	F	Ru	1	3.2	4.6	1.1	18.0	自然	接合資料B	
194	C-19	UF	Ru	1	5.2	5.2	1.3	34.0	自然	接合資料B	
195	C-19	F	Ru	2	3.1	1.9	0.4	5.0	自然		
196	C-19	UF	Ru	4	4.6	4.0	0.5	9.0	単剥離		
197	C-19	F	Ru	4	1.5	2.3	0.8	2.5			
198	C-19	DR	Ru	5	2.0	1.1	0.7	1.0			
199	C-19	SC	Ru	8	5.3	4.2	1.6	35.0	単剥離		
200	C-19	F	Ru	3	4.7	1.7	0.9	6.0	単剥離		
201	C-19	F	Ru	2	2.3	1.6	0.4	2.5	単剥離		
202	C-19	UF	Ru	5	5.6	4.5	1.4	35.0	単剥離		
203	C-19	SC	Ru	20	4.3	4.2	1.3	21.0			
204	C-19	F	Ru	7	3.7	1.4	0.4	2.0			
205	C-19	F	Ru	21	5.2	3.8	1.0	19.0	単剥離		
206	C-19	F	Ru	1	3.8	3.1	1.2	14.5	自然		
207	C-19	F	Ru	21	2.7	2.5	0.5	2.0	単剥離		
208	C-19	CO	Ru	1	5.2	5.8	3.0	77.0	自然	接合資料B	
209	C-19	UF	Ru	1	5.2	4.5	1.0	22.5	自然	接合資料B	
210	C-19	SC	Ru	7	5.2	5.6	1.9	66.0	単剥離		
211	C-19	F	Ru	1	3.8	4.2	1.2	14.0	自然	接合資料B	
212	C-19	F	Ru	1	3.6	5.0	0.9	15.0	自然	接合資料B	
213	C-19	UF	Ru	1	7.4	3.8	1.5	47.5	自然	接合資料B	
214	C-19	RF	Ru	21	3.1	4.5	1.2	20.0			
215	C-19	SC	Ru	4	3.8	4.0	0.7	12.5			
216	C-19	F	Ru	20	3.7	2.4	1.2	12.0			
217	C-19	F	Ru	12	5.6	4.9	1.5	39.5	複剥離		
218	C-19	F	Ru	8	2.8	2.7	0.6	4.5	単剥離		
219	C-19	F	Ru	9	3.2	1.9	0.5	0.3			
220	C-19	UF	Ru	5	5.9	2.7	1.0	13.0	単剥離		
221	C-22	F	Ru	6	2.2	3.7	0.9	5.0	複剥離		
222	C-22	UF	Ru	4	1.6	2.9	0.6	1.5	単剥離		
223	C-22	UF	Ru	4	2.1	2.9	0.8	3.5	単剥離		
224	C-21	SC	Ru	4	2.2	4.0	1.3	10.0			
225	C-21	UF	Ru	8	3.1	5.1	2.1	15.0	単剥離		
226	C-22	RF	Ru	4	2.4	2.2	1.3	6.0		223と接合	
227	C-21	SC	Ru	4	3.7	3.4	1.7	23.0		222・224と接合	
228	C-24	F	Ru	7	3.0	3.0	0.7	9.0	単剥離		
229	C-22	UF	Ru	21	2.4	1.6	0.5	8.0		230と接合	
230	C-22	UF	Ru	21	4.3	2.3	0.5	5.0	単剥離	229と接合	
231	C-22	F	Ru	6	2.1	3.5	0.6	7.0	複剥離		
232	C-22	CH	Ru	21	1.1	1.7	0.3	3.0			
233	C-12	UF	Ru	4	6.7	7.2	1.3	59.0	単剥離		

5. まとめ

金剛寺原第1遺跡では総数222点の石器類が出土しており、出土層位については傾斜地であり土層の堆積が良好ではないもののATの直上に検出されているため、ATより上位であることは確実といえる。

個体別資料とブロックの検討

まずブロックについてであるが、視覚的な遺物の集中という点を基本に接合資料を加味しながら設定を行った。ブロックは第1～8までの8ヶ所を設定した。第2ブロックと第3ブロックでナイフ形石器が認められる。また、全てのブロックで使用痕のある剥片またはスクレイパーが多いようである。第5・第8ブロックと第1ブロックではブロックを構成する石器類の点数が少ないものの、いわゆる石器（ナイフ形石器・スクレイパー・石錐・二次加工のある剥片・使用痕のある剥片・石核・敲石・台石）を含む割合が高い。そのため、このようなブロックでは石器製作は行われずに他の地点（ブロック）より完成された石器が持ちこまれて構成されていると考えられる。ブロック間の接合関係は第6・第7ブロック間で認められる。

次に個体別資料の検討であるが黒曜石1点・チャート2点以外は全て流紋岩であり、流紋岩と分類したものには、無斑晶のもの、白っぽい斑晶を有するもの、両者が熱変成しホルンフェルス化したものが認められる。白っぽい斑晶を有する流紋岩を石材として用いている石器群は宮崎平野から延岡市周辺の地域で確認でき、大分県大野川流域では確認されていないようである。本遺跡では、接合資料をもとにして32個体に分類した。総数222点のうち、それぞれ5%以上を占める個体が9個体存在する。この個体別資料をブロックごとにその分布を検討した結果、1つのブロック内に収まるものと、ほとんど分散するものの両者が認められる。前者については個体No.2（接合資料C）の個体が第7ブロック内に、個体No.1（接合資料B）個体No.3（接合資料A）の個体が第6ブロック内にそれぞれ分布する。後者については資料が提示できないため詳細は説明できないが、6個体があるブロックで石器製作に用いられそれぞれのブロックに持ちこまれていると推定できる。また、以上のことからこの遺跡で設定した8ヶ所のブロックは一時期のものと考えられる。

石器組成について

石器組成は、ナイフ形石器4点、石錐2点、スクレイパー33点、二次加工のある剥片18点、使用痕のある剥片45点、敲石3点、台石1点であり、他に剥片103点、碎片2点、石核9点である。

ナイフ形石器は、二側縁加工の切出形のもの、先端を尖らすもの、一側縁加工のもの、部分加工のものがある。

石錐は、短く突出する断面三角形の錐部を作出している。

スクレイパーは、コア・スクレイパー1点、ラウンド・スクレイパー2点、エンド・スクレイパー16点、サイド・スクレイパー8点、ノッチド・スクレイパー6点に分類できる。エンド・スクレイパーには、素材剥片の末端に刃部調整を施すもの、素材を切断し末端に刃部調整を施すものが認められる。

剥片剥離技術について

剥片剥離技術は接合資料によりいくつかの種類に分類できる。

I類・礫、分割礫を素材とし、分割面または礫の平坦面を打面として設定し、基本的に石核調整を施さずに縦長剥片剥離を目的としているが、幅広の剥片も多く生産されるもの。

II類・打面転移を頻繁に行いながら幅広の剥片を生産するもの。

III類・頭部調整を行い形の整った縦長剥片を生産するもの。

IV類・交互剥離により幅広の剥片を生産するもの。

以上の分類から、生産される剥片は幅広の剥片が主流を占め、縦長剥片も剥離している。また、石核に施される調整は大まかであり、微細なものはあまり施されない。そのこともあってか出土した石器類には碎片が極めて少ない。

編年上の問題

金剛寺原第1遺跡の石器群の年代的位置付けについては、A Tより上位のものであることは確実であるが、土層の堆積状態が良好とは言えず層位より詳しく検討することは困難である。A T上位のナイフ形石器文化の石器群として堂地西遺跡、赤木遺跡、船野遺跡第1地点・第2地点、芳ヶ追遺跡、地蔵ヶ森遺跡、林遺跡、片田遺跡、そして金剛寺原第2遺跡があげられる。しかし、本報告されているものは一部であり、編年的位置づけをより困難なものとしている。現状で、船野遺跡について、ナイフ形石器と細石刃・細石核との共伴関係が疑問視されているが、ナイフ形石器についてはA T上位のナイフ形石器文化のものとして考えておきたい。宮崎県下におけるA T上位の石器組成は、基本的にナイフ形石器+剥片尖頭器+角錐状石器（三稜尖頭器）が考えられている。堂地西遺跡では、縦長剥片が石器の素材として用いられており、横長の剥片は極めて少ない。ナイフ形石器は切出し形の二側縁加工のもの、基部加工のものに、剥片尖頭器が伴っている。赤木遺跡では、縦長剥片・「ノ」の字状剥片・横長剥片が石器の素材として用いられている。ナイフ形石器は縦長剥片素材の二側縁加工、「ノ」の字状剥片素材の切出し形のもの（二側縁・一側縁加工）、横長剥片素材の一側縁のものが認められ、剥片尖頭器・角錐状石器を伴っている。船野遺跡第1地点では、縦長剥片・横長剥片が石器の素材として用いられている。ナイフ形石器は縦長剥片の二側縁、基部・先端部、基部と横長剥片素材の一側縁のもの、二側縁の切出し形のもの、横長剥片素材の基部加工のものが認められる。この他、尖頭器、角錐状石器、台形様石器が伴うようである。

東九州の地域として大分県大野川流域の石器群の変遷を考えた場合、A T直下の縦長剥片素材の二側縁加工主体の石器群から、A T上位では瀬戸内技法の影響の横長剥片素材の一側縁、両側縁のものが伴い、さらに剥片尖頭器、三稜尖頭器が伴うようである。またこの後は、「ノ」の字状剥片素材の二側縁の切出し形、縦長剥片素材の基部加工のものが主体を占めるようになると考えられる。

以上、上記3遺跡のナイフ形石器の特徴、組成と大野川流域の石器群の変遷を考えると、本遺跡のナイフ形石器の特徴や石器組成は比較的古い様相を持っているのではないだろうか。

また、宮崎県においてA T上位の石器群の古い時期には、剥片尖頭器、角錐状石器（三稜尖頭器）の存在しない時期があるのではないだろうか。最近、片田遺跡においてA T上位と思われる石器群が検出されており、剥片尖頭器、角錐状石器（三稜尖頭器）が伴わない特徴を持っている。ナイフ形石器については、縦長剥片素材の二側縁加工のものが主体を占めており、横長素材のものは、確認されていないようである。このことは、より前記の問題を示唆するものである。

また、本遺跡ではエンド・スクレイパーが発達しており、南九州の地域で見ると熊本県の狸谷遺跡でA T直下から直上にかけて発達したエンド・スクレイパーが見られるものの直下では横長剥片が石器の素材となり、直上でも横長剥片が石器の素材となりしかも剥片尖頭器、三稜尖頭器を伴っており様相が異なっている。

以上のように、金剛寺原第1遺跡の石器群の年代的位置付けについては今のところA T上位と考えられるが、今後の資料の蓄積を待って検討をしていきたい。

おわりに、金剛寺原第2遺跡の調査および第1遺跡の遺物整理の機会を与えていただいた野間重孝氏をはじめ、宮崎市教育委員会の方々にお世話になり心より厚くお礼申し上げます。別府大学の橘昌信教授には多大な御指導を頂き厚く感謝申し上げます次第である。また、広島大学の藤野次史助手をはじめ、いろいろな方に御助言、御助力頂いた。文末に明記し感謝申し上げます次第である。

永友良典 穴戸 章 長友郁子（以上県文化課）
緒方博文（日向市教委） 山田 聡（延岡市教委）
多田 仁 毛利直人（以上別府大学学生）

（高松）



図版 1

金剛寺原第 1 遺跡

調査前風景



図版 2

金剛寺原第 1 遺跡

調査風景



図版 3

金剛寺原第 1 遺跡

土層断面



図版4

金剛寺原第1遺跡の

石器群出土状況(1)



図版5

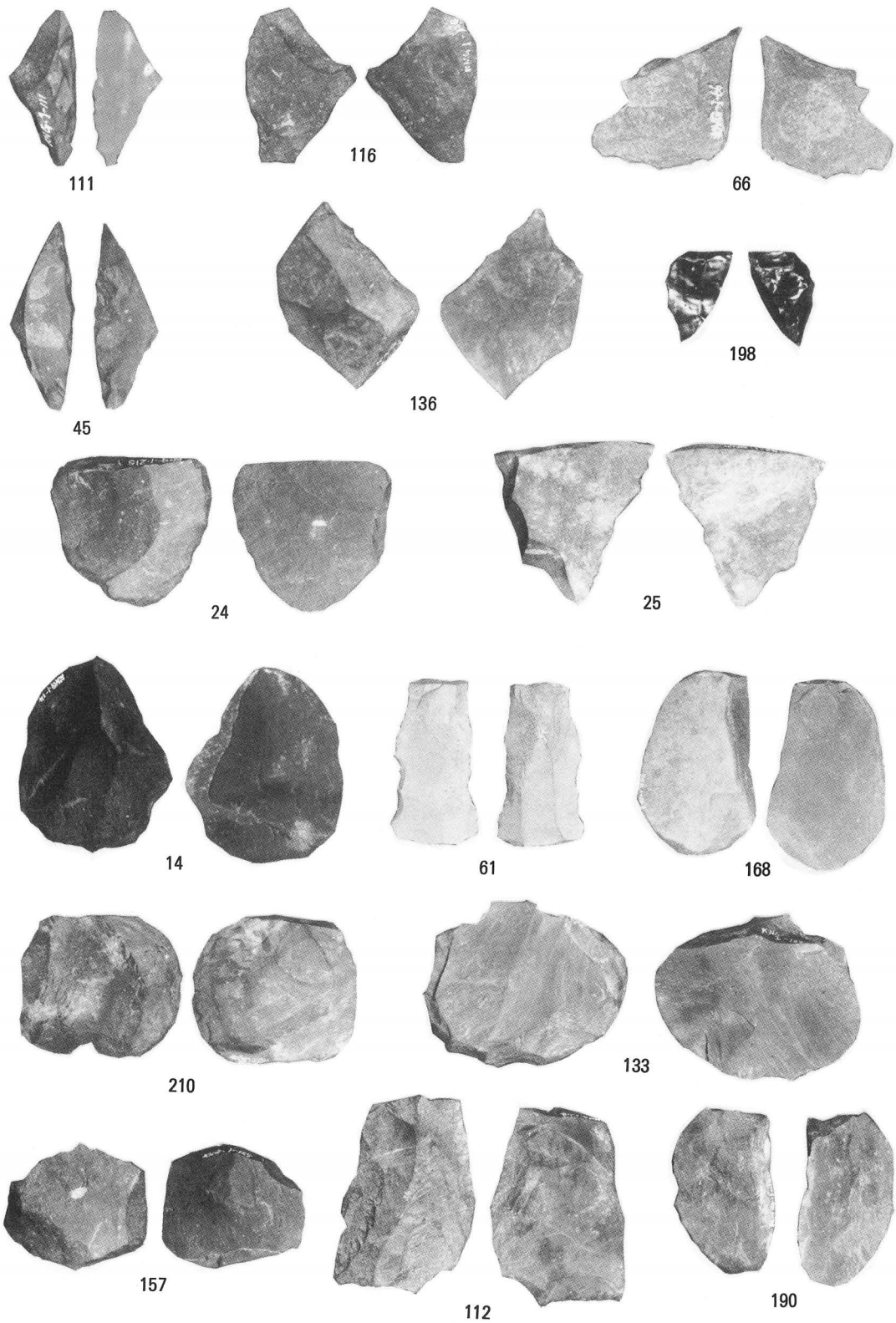
金剛寺原第1遺跡の

石器群出土状況(2)

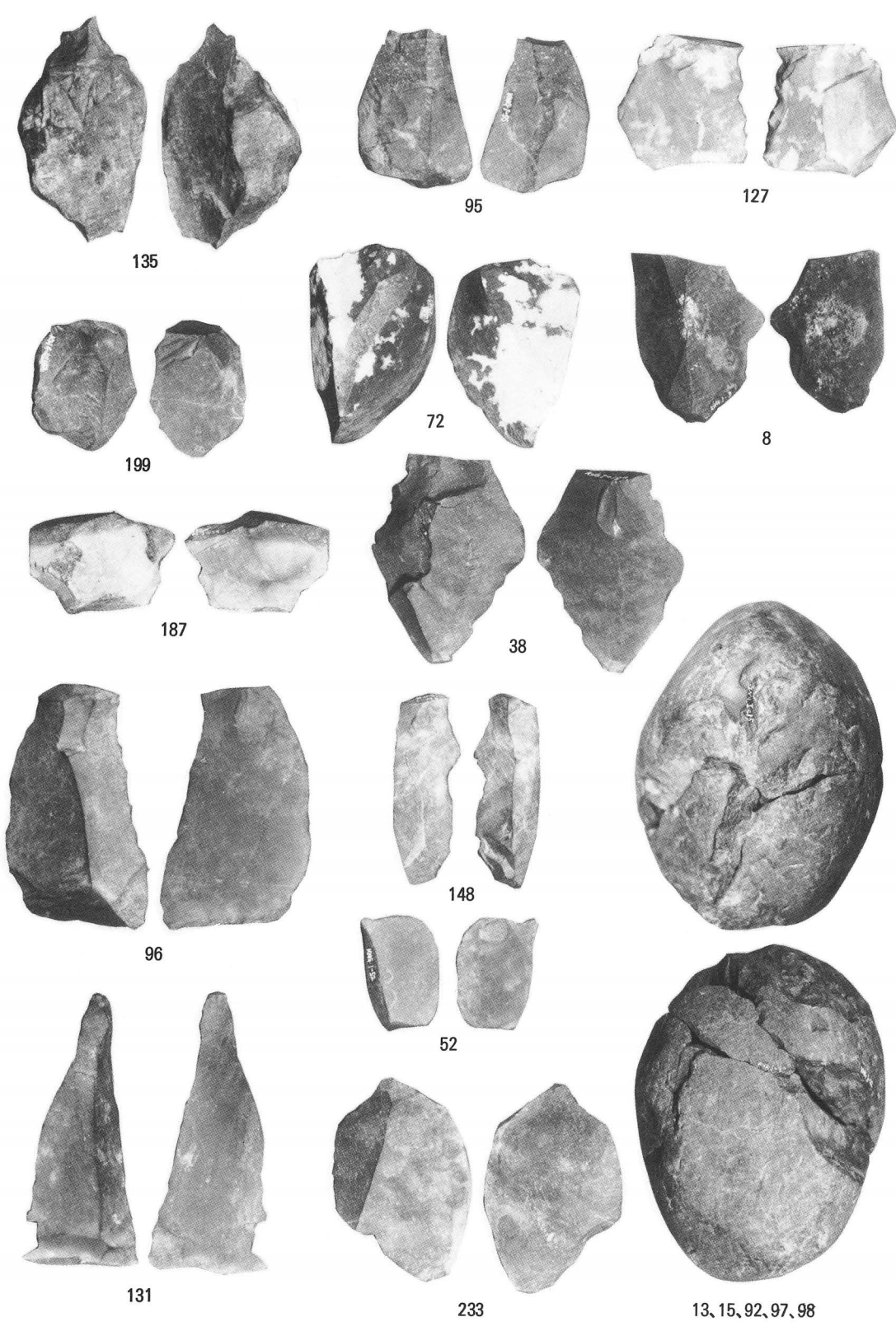


図版6

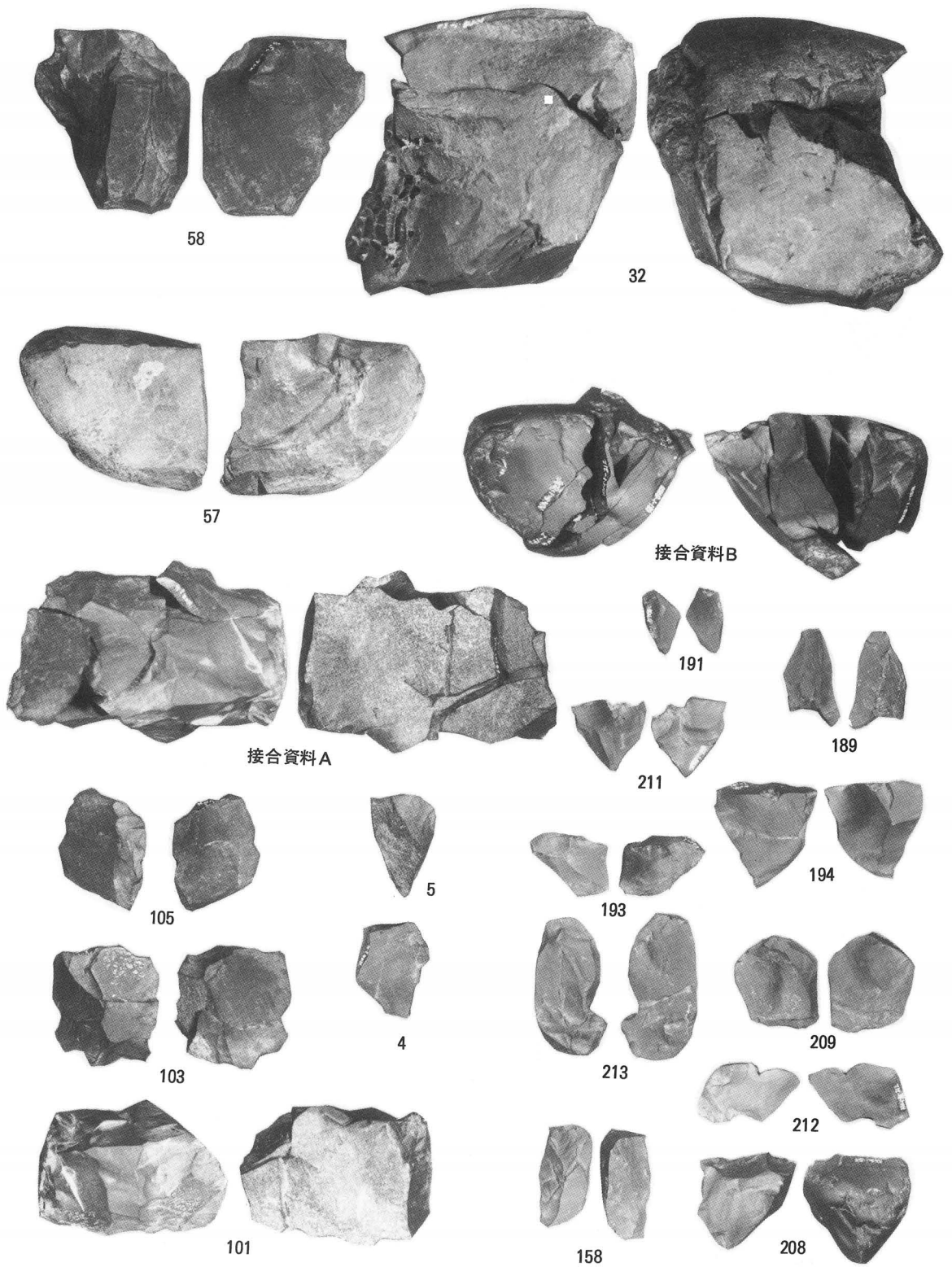
ナイフ形石器出土状況



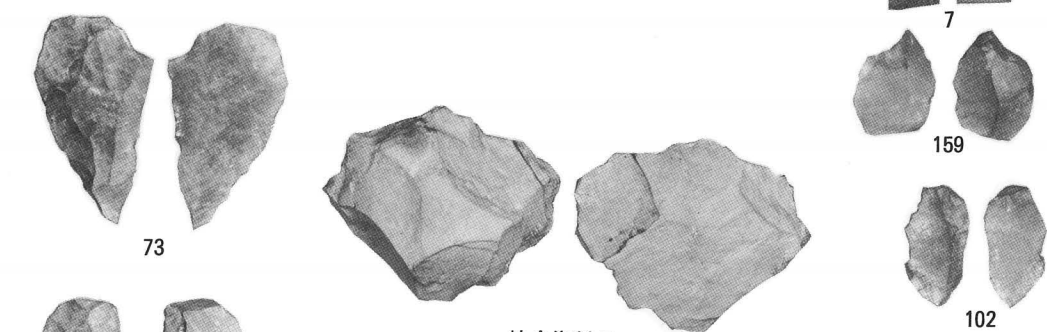
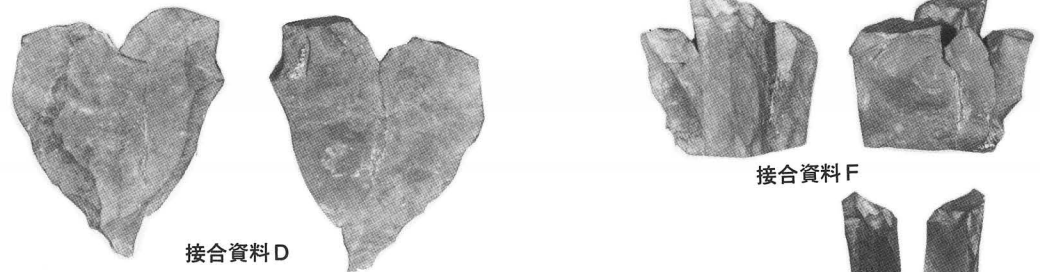
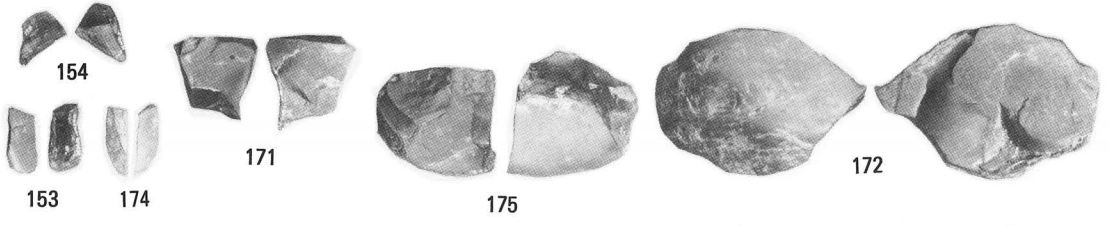
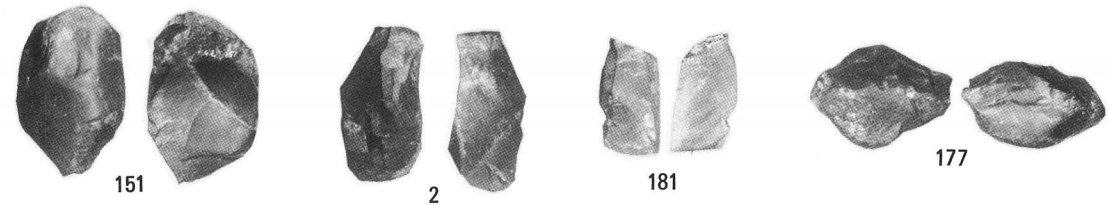
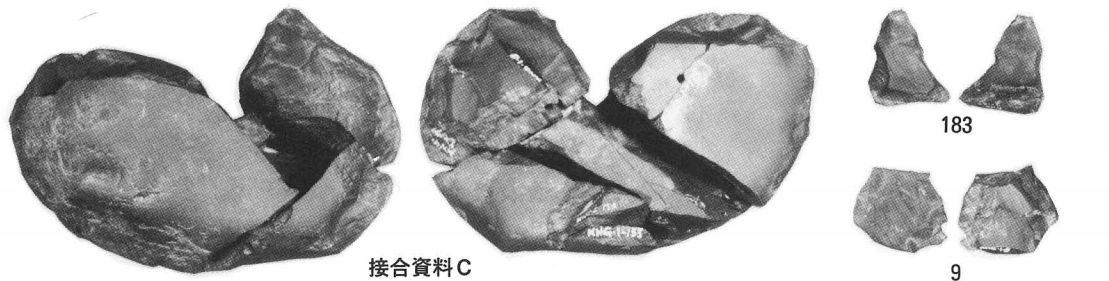
図版7 ナイフ形石器・石錐・スクレイパー



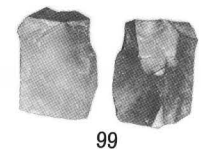
図版8 スクレイパー・使用痕のある剥片・敲石



図版9 二次加工剥片・石核・接合資料A, B



接合資料E
(138、139)



図版10 接合資料C, D, E, F

III 金剛寺原第2遺跡

1. 調査の概要

金剛寺原第2遺跡はナイフ形石器文化に相当する後期旧石器時代の単純遺跡である。

遺跡からは集石遺構3基が検出され、ナイフ形石器、スクレイパーをはじめ角錐状石器や石錐など貴重な資料を含め、横長剥片素材を主体とした石器群が出土している。

調査範囲が東西に長く延びる形のため面的な広がりが見えにくかったが、多数の焼礫及び形態の異なる3基の集石遺構をはじめ、碎片の集中区も認められ、宮崎平野でのナイフ形石器文化の遺跡構造を知るうえで、一つの資料提示をすることができた。石材は、無斑晶流紋岩とチャートに限られている。

また、当遺跡でATが確認できたことに一つの成果が挙げられる。ATを確認したことで、船野遺跡、堂地西遺跡といった宮崎平野で調査された他の遺跡の石器群と対比することができた。その他、田野町の札ノ元遺跡、芳ヶ追遺跡も所在しているが、これまで資料的に限定されていたこともあって、旧石器時代研究が大きく遅れていた。AT上位において、切り出し状のナイフ形石器、角錐状石器及び横長剥片素材の石器の出土は、宮崎平野の諸遺跡についても時間的位置付けが可能となった。

遺構について触れておくと、A-4区で1基、B-6区で2基確認されたが、割に台地端に位置した個所で検出されている。

2. 調査区の設定

金剛寺原第2遺跡は、県営農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業の工区内にあたるため、宮崎県文化課が平成元年3月、5日間にわたって遺跡確認調査を行った。調査の結果、旧石器時代の遺跡が存在することが判ったため発掘調査を実施することとなった。

調査はグリッド法により、工区内に任意に10×10mの調査区を設定し、南北方向に南からA・B列、東西方向に東から1～6区を設けた。名称はA-1区、A-2区、……と呼ぶこととする。

調査を続けるうちに、B-4及びA-3、B-3以東については包含層の遺存状況が悪く、遺物もほとんど残存しなかったため、B-2、B-3は掘り下げを行わなかった。

調査工区内の西側、A-4、A-5、A-6、B-5、B-6の包含層の遺存状態の良い地点を中心に掘り下げを実施した。

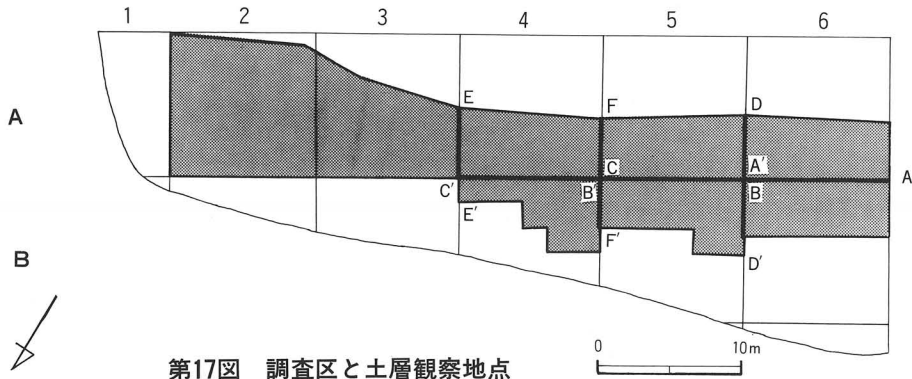
最終的な発掘調査面積は、約426㎡である。

3. 基本層序と遺物包含層

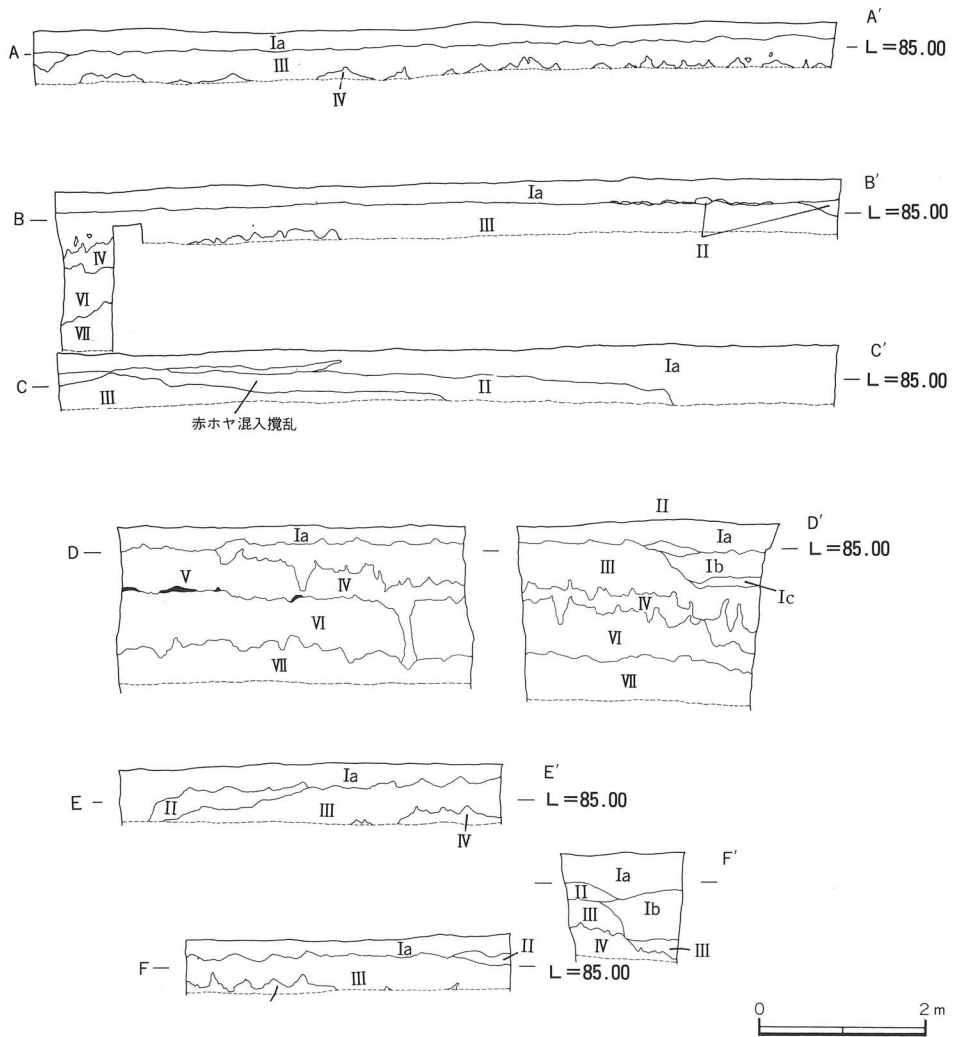
金剛寺原第2遺跡の基本層序はA-4区、B-4区の西側壁に深さ2mの深掘りを行い、7層を確認したD-D'を基本とする。

I層 表土。

I a 茶褐色土層であり、攪乱された石器を少量含む。また、トラクター痕がIII層まで痕跡として残されていた。



第17図 調査区と土層観察地点



第18図 金剛寺原第2遺跡の土層図

- I b・I c 暗茶褐色土層で、共に後世の客土と思われ無遺物層である。
- II層 明茶褐色土層。アカホヤの二次堆積層で台地端に流れ込み等で残存したものと考えられ、調査区の東側に向かうほど堆積が厚い。縄文～弥生土器片が混入されている。
- III層 明黄褐色ローム層。旧石器時代遺物包含層で焼石及び集石遺構を検出する。C-Cの土層観察でもわかるように東側では遺存状態が悪い。
- IV層 暗褐色硬質土層。無遺物層で、ブロック混入が多く、III層との境は不整合である。
- V層 黄褐色土層。始良丹沢火山灰層であるがブロック的にしか残存しておらず、必ずしも純粋な層位を形成しているとは言えない。
- VI層 黒褐色硬質土層。無遺物層で、ブロック含有量も多く固結している。
- VII層 暗赤褐色硬質土層。固結している。

基本的には宮崎市周辺で見受けられる土層柱状図と大差はない。しかし、台地端に立地していることもあり、遺物包含層であるIII層の傾斜が著しく、現地形を平坦にするために運ばれたと思われる客土（I層～II層）も厚く堆積しているため調査区北側端ではIII層が観察できない。

また調査区南側端においてはIII層が削平されており、部分的に遺物が検出される状態である。よって、III層の堆積状態が良好であったのは、A、B列の境を中心とした西側に片寄っている。

4. 遺跡の調査

(1) 石器群の出土状況

金剛寺原第2遺跡の調査では約200点の石器群が検出された。平面的分布からその広がりを見てみると、A-4区において碎片のブロックが確認でき、また、A-6区西側にはスクレイパー・剥片で構成されたブロックが認められる。

金剛寺原第2遺跡でのブロックの概念は接合資料が少ないため、あくまで遺物集中部分といった視覚的な判断が優先するものである。A-4区では、碎片のブロックを含め1号集石を中心にA-5区まで石器群のまとまった出土状況が窺える。

ナイフ形石器は、A-4、A-5区において顕著な出土が見られる。特に1号集石を中心に6×6mの範囲内に5点分布している状況は特徴的である。また、ナイフ形石器の分布に対してスクレイパーはA-5、B-5、B-6区に片寄っている傾向があり、A-4区ではその出土例が皆無で、5区より西側に存在している。使用痕剥片や二次加工剥片等については全体的に広がって出土しており興味ある傾向性は見出せなかった。

平面的分布状況から大まかな傾向としてはナイフ形石器とスクレイパーの出土状況が対照的であることが把握される。

礫群の平面的分布を観察してみることにする。礫群は石器群とほぼ同じ広がりを示し、全面にわたって出土しているが、石器群が多く出土しているA-4区と2号集石周辺では比較的礫群の集中が見られる。

次に石器群と礫群の垂直的分布状況を観察してみることにする。遺物はIII層内において上面から下面まで40～50cm前後の間で検出されている。石器群と礫群を比較してみると、やや石器群が上位にくる傾向があるものの比較的同一レベルで収まっているようである。一般に石器群

が上位にくる傾向は低温な気候のもとで凍結と融解の繰り返しによって礫群より軽い石器群が浮き上がるといった自然現象が考えられており、当遺跡でもその可能性が示唆される。ただ、40～50cmある遺物包含層の中で2枚以上の文化層が存在するののかについては微妙な判断ではあるが、接合・石材・層序の細分・技法の相違などといった検討に加え、集石遺構の検出面レベルからの判断を加味しても何らかの有効な解釈は得られなかった。

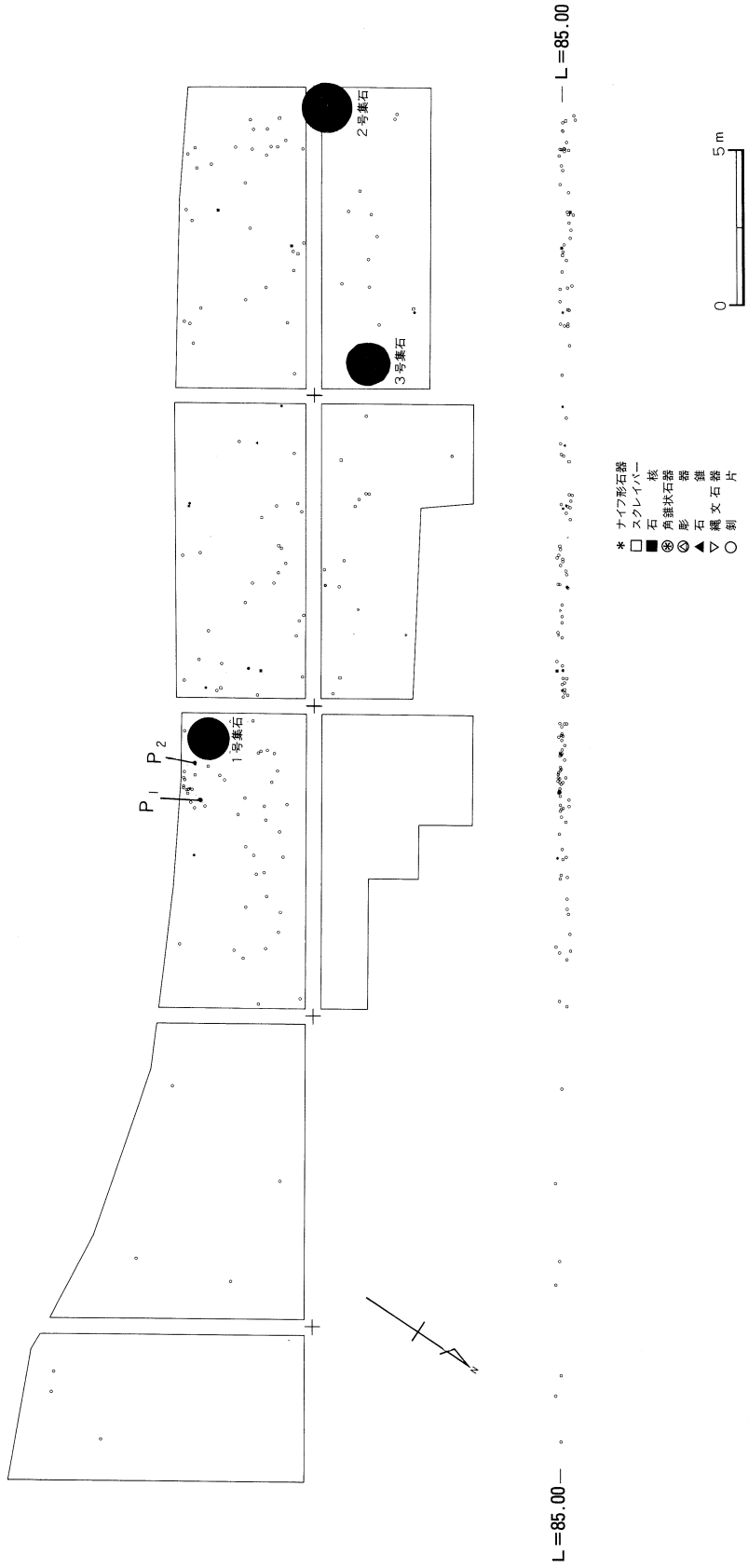
最後に、A-4区の剥片、碎片のブロックについてであるが、折れたナイフ形石器1点を含み、剥片、碎片ばかり46点前後で構成されている。

ブロックの解釈として、限られた場所での行為、例えば、石器製作、獲物の解体・料理などが考えられる訳で場の機能を知ることができる。特にこのブロックでは剥片の接合資料が含まれ、特定の石器だけが集中し石器製作跡の存在を彷彿させるが、碎片の接合資料はなく断定はできない。いずれにせよ、何らかの作業場であったことには違いないであろう。

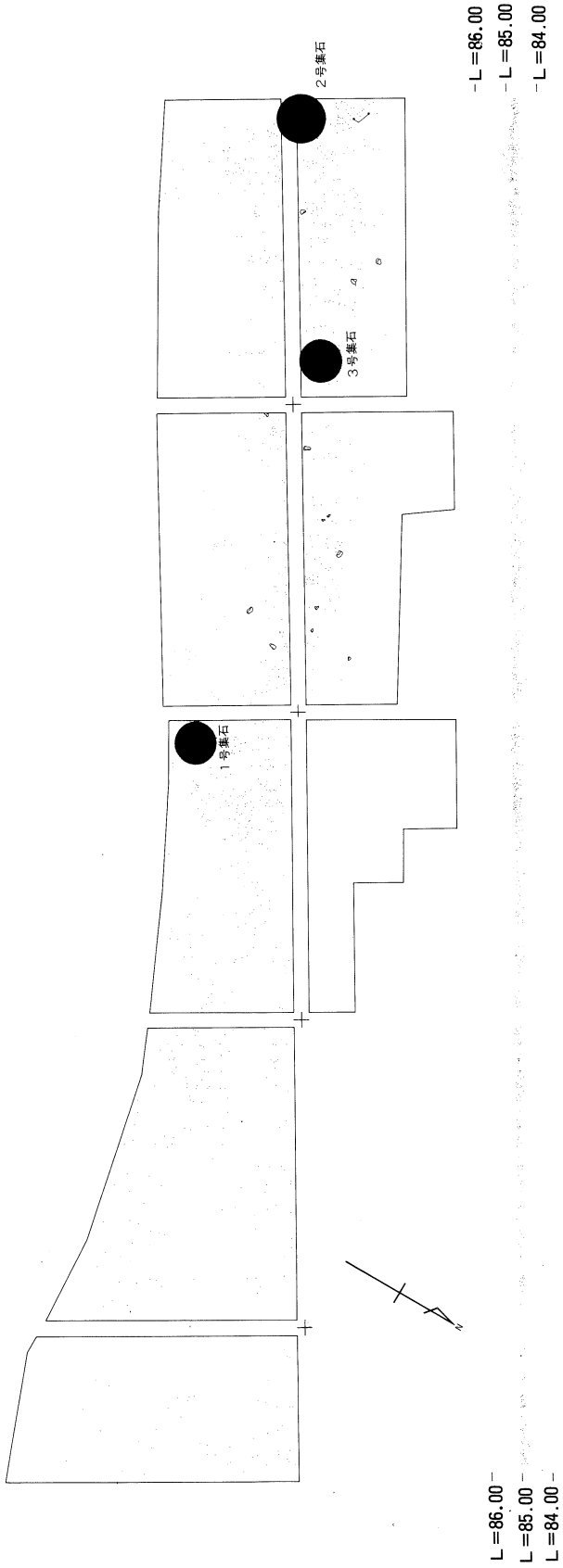
(注) 第21図は第19図のP-1・P-2を中心としたブロックを別に実測したものである。

器種名	剥片	ナイフ形石器	石核	二次加工剥片	使用痕剥片	スクレイパー	角錐状石器	石錐	碎片	礫片	不明	合計
点数	90	7	2	26	30	7	1	1	32	1	2	199
器種別における全体の比率(%)	45.2	3.5	1.0	13.1	15.1	3.5	0.5	0.5	16.1	0.5	1.0	100%
石器数		7		26	30	7	1	1				72
石器別における全体の比率(%)		9.7		36.1	41.7	9.7	1.4	1.4				100%

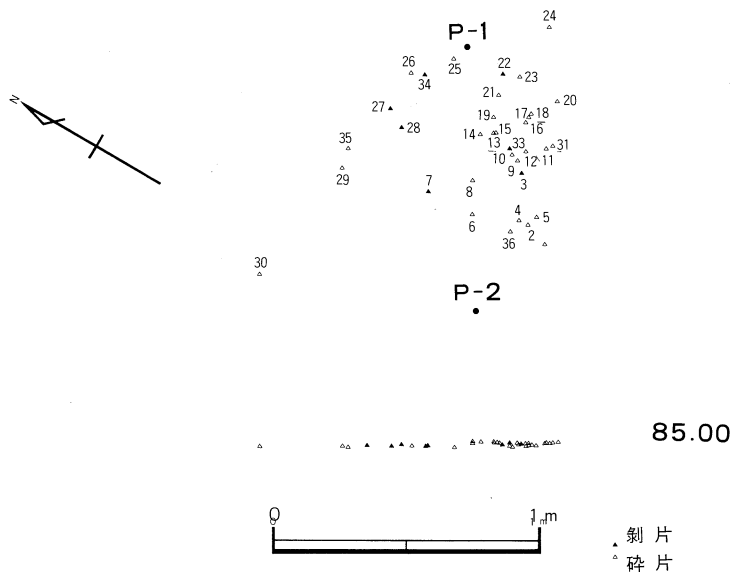
第3表 金剛寺原第2遺跡石器組成表



第19図 金剛寺原第2遺跡出土遺物平面・垂直分布図



第20図 金剛寺原第2遺跡礫平面・垂直分布図



第21図 A-4グリッド剥片・碎片ブロック分布図

第4表 A-4グリッド剥片・碎片観察表

No.	グリッド	器種	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)
1	A-4	剥片	流紋岩	1.4	2.0	1.0	2.0
2	A-4	碎片	〃	0.9	0.7	0.2	0.2
3	A-4	碎片	〃	1.3	0.7	0.4	0.5
4	A-4	碎片	〃	1.4	0.7	0.2	0.5
5	A-4	碎片	〃	1.1	0.9	0.2	0.2
6	A-4	碎片	〃	1.3	0.6	0.2	0.2
7	A-4	剥片	〃	1.9	1.9	0.4	1.0
8	A-4	碎片	〃	1.3	0.8	0.4	0.9
9	A-4	剥片	〃	1.3	2.0	0.3	0.5
10	A-4	碎片	〃	1.0	0.8	0.3	0.1
11	A-4	碎片	〃	1.4	0.6	0.2	0.1
12	A-4	碎片	〃	1.1	0.6	0.1	0.1
13	A-4	剥片	〃	1.4	1.4	0.5	1.0
14	A-4	碎片	〃	0.8	0.7	0.2	0.3
15	A-4	剥片	〃	1.8	2.0	1.9	0.5
16	A-4	剥片	〃	1.0	1.9	0.2	0.5
17	A-4	碎片	〃	1.3	0.8	0.2	0.1
18	A-4	碎片	〃	1.7	1.3	0.4	0.1
19	A-4	碎片	〃	1.0	0.7	0.1	0.1
20	A-4	碎片	〃	2.1	0.8	0.4	0.5
21	A-4	碎片	〃	0.9	0.8	0.2	0.1
22	A-4	剥片	〃	1.4	2.3	1.0	2.0
23	A-4	碎片	〃	0.8	1.2	0.2	0.3
24	A-4	碎片	〃	1.0	0.5	0.1	0.1
25	A-4	碎片	〃	1.1	0.8	0.1	0.1
26	A-4	碎片	〃	1.4	1.0	0.6	0.3
27	A-4	剥片	〃	1.6	0.8	0.4	0.5
28	A-4	剥片	〃	1.2	1.8	0.7	1.4
29	A-4	碎片	〃	1.7	1.0	0.6	1.0
30	A-4	碎片	〃	0.7	0.6	0.1	0.1
31	A-4	碎片	〃	1.0	0.4	0.3	0.1
32	A-4	碎片	〃	1.2	0.9	0.6	0.3
33	A-4	碎片	〃	1.5	0.6	0.2	0.1
34	A-4	剥片	〃	1.1	2.3	0.4	1.0
35	A-4	碎片	〃	1.3	1.4	0.2	0.5
36	A-4	碎片	〃	0.9	0.8	0.2	0.1

(2) 集石遺構

【1号集石遺構】

1号集石遺構はA-4区西側寄りに検出され完形礫、破損礫合わせて28点で構成されている。礫は赤化現象が著しく、単に集めたもので接合資料もなく、掘り込み等の土壌や基底部施設などは見受けられない。

遺構は、約170×130cmの範囲内に収まるが、集石遺構の東側には剥片、碎片の集中区が位置し、周辺ではナイフ形石器をはじめ剥片などの石器も散乱している。

集石遺構を中心に生活域の存在を示唆させるものであるが直接的にその機能を推測させるには到らなかった。集石遺構の検出下面の海拔高は約85.1mである。



第22図 1号集石実測図

【2号集石遺構】

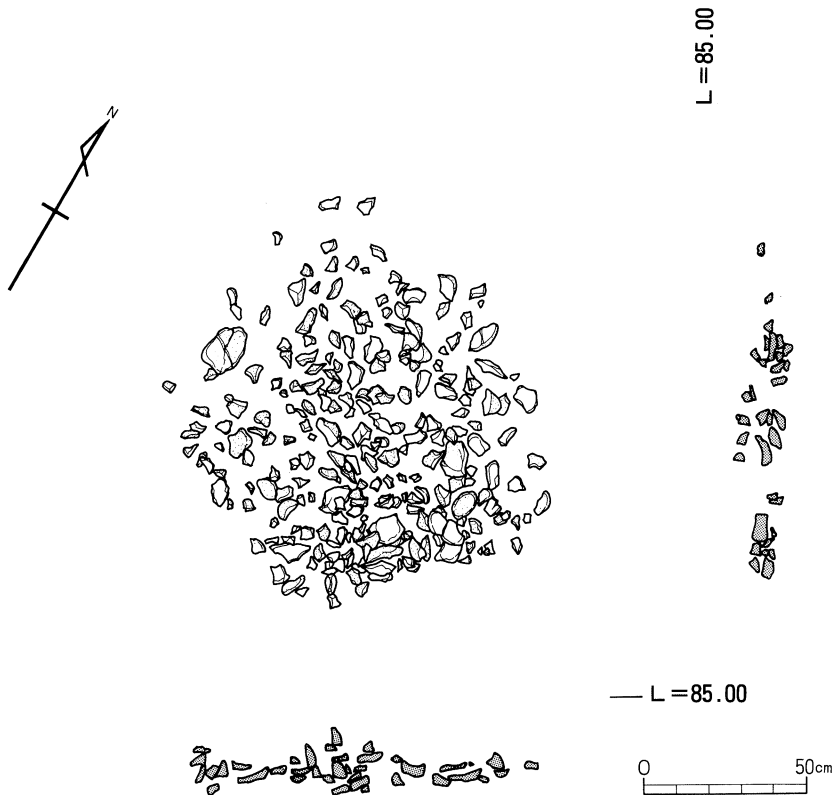
2号集石遺構はB-6区西側に位置し、破損礫を中心に、完形礫を合わせて大小652個からなり、約120×130cmの範囲の中に密集している。

集石はその大半が破損礫で、また加熱による赤化現象が見られ、その使用頻度の高いことを推測させる（意図的に打ち割ったものか?）。このうち、完形礫はわずかに16個であった。

また、2号集石の構成礫の総重量は47,195gにも及び、1個平均の重量は72.38gということになる。破損礫は集石内は勿論、集石遺構の北側周辺にも多量に検出されており2号集石の構成礫であった可能性も高い。

集石遺構の断面を観察すると、掘り込み、土壌等は見受けられなかったが、全体的に厚い堆積状態を示し、上下20cm前後の厚みを持つ。周辺には比較的石器は少ないが、南側にスクレイパーと剥片がブロックを形成している。構成礫の中には敲石が含まれていた。敲打痕が著しいえ赤化現象が見られ、敲石として使用した後、集石に転用されたものと考えられる。

こうした石器の出土状況からも集石遺構の周辺で植物食料の加工が施されていた可能性が高く、調理用施設そのものとしての用途が積極的に考えられるが、周辺では炭化物、焼土は確認されていないためまだ検討を要する。集石遺構の検出下面の海拔高は約84.7mである。



第23図 2号集石実測図

【3号集石遺構】

3号集石遺構はB-6区東側で検出され、拳大の石礫94個で構成されている。遺構は約190×180cmの範囲でまとまっており、掘り込み等は観察できなかった。

礫は全て赤化現象が見られ破損礫も多く目立った。構成礫の総重量は24,541gで1個平均261.07gと割に大きな礫で構成されていることが判る。また、接合作業を行ったところ94個から71個に減少し、1個平均重量も345.65gになった。接合作業を観察すると破損面にも赤化現象が見られ、2～5個の割合で破損しており、かなりの熱が加えられていたことが推測される。

集石周辺では石器群、礫群の出土量はさほど見受けられない。また、集石は北側に二次堆積のアカホヤ層が堆積しているため、旧地形ではかなり台地端に迫っていたものではないかと推測させる。断面観察では、遺構がやや北側へ傾いており、焼土、炭化物等は検出されなかった。集石遺構の検出下面の海拔高は約85.1mである。



第24図 3号集石実測図

(3) 出土遺物

ナイフ形石器 (第25図)

ナイフ形石器は7点出土している。

- 1 縦長剥片を素材とし、切出し形を呈する二側縁加工のナイフ形石器である。比較的小型であり、主要剥離面方向よりブランディングが施されている。
- 60, 86 横長剥片を素材とした二側縁加工のナイフ形石器である。60は背面右側縁を中心に主要剥離面方向よりブランディングが施されている。86は先端部を欠損しているものの、両側縁の基部に細かなブランディングが施されている。また、右側縁上部には刃部と考えられる縁辺の一部を残しており、この部位より先端の間を刃部としていたものと考えられる。
- 38, 144 横長剥片を素材とした一側縁加工のナイフ形石器である。38は自然面をそのまま残し左側縁を刃部にしている。144は右側縁を刃部とし、使用痕が認められ、下部は欠損している。
- 62は縦長剥片を素材とした一側縁加工のナイフ形石器である。左側縁を刃部とし、右側縁に、主要剥離面方向からブランディングが施されている。また、基部は欠損している。
- 52 縦長剥片を素材とし、先端部に主要剥離面方向から粗いブランディングが施されている。素材の打面を残し、背面には一部自然面が認められる。

石 錐 (第25図)

- 59 横長剥片を素材としており、両側縁に連続した調整を施し、先端を尖らせるように錐部を作出している。先端には細部調整が施され、断面が三角形を呈している。

角錐状石器 (第25図)

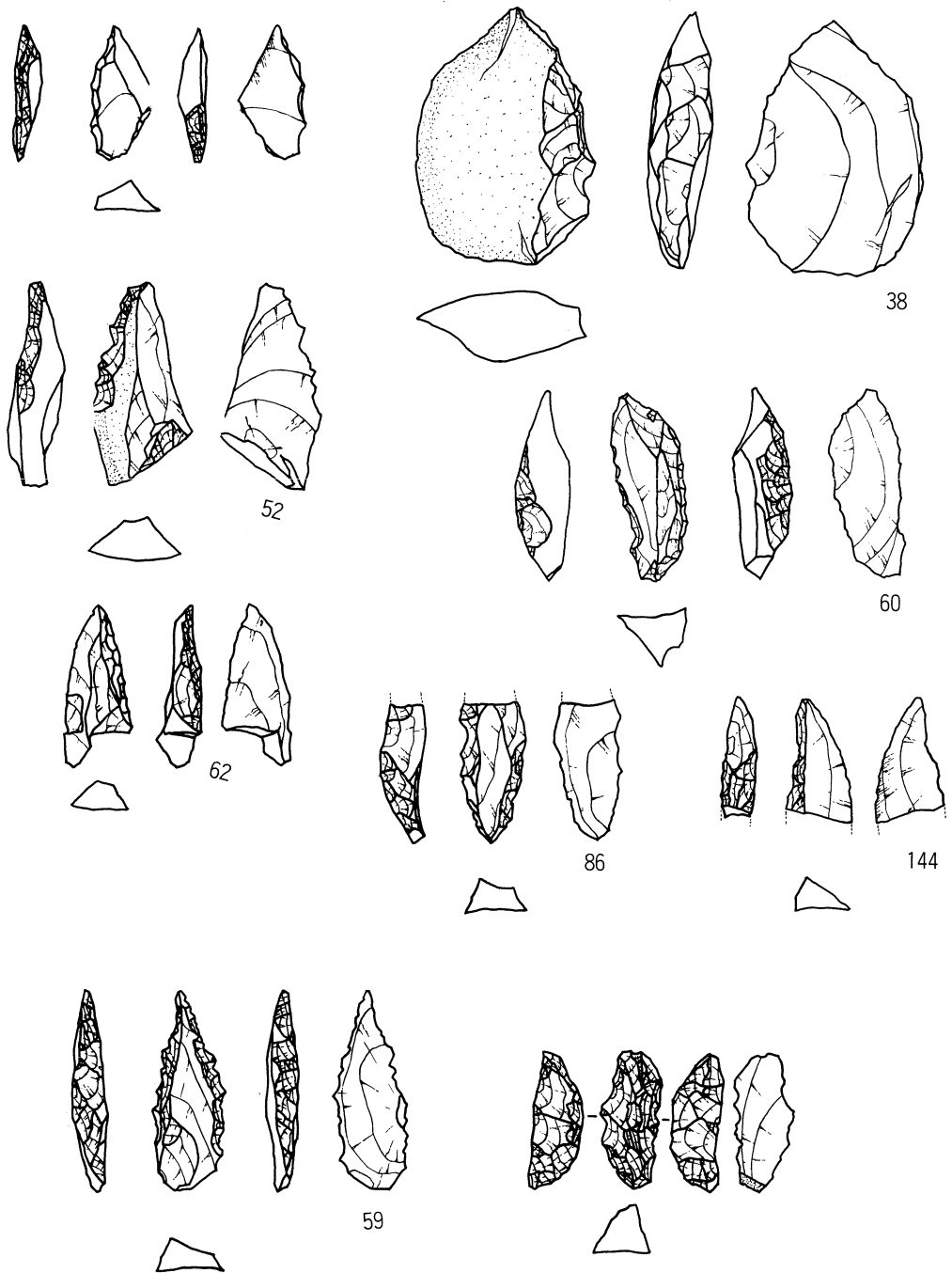
- 64 横長剥片を素材とし、両側縁に主要剥離面方向からの調整により、断面が三角形を呈している。また、稜上からの打撃は一切認めない。

スクレイパー (第26図)

- 4 大型で厚みのある剥片を素材としたスクレイパーである。両側縁に粗い調整が施され、抉入を呈している。抉入はあまり顕著とは言えない。5は、4と接合する横長剥片素材の使用痕剥片である。左側縁の上部を刃部としている。
- 18 厚みのある剥片を素材とし、背面方向より刃部調整が施されている。
- 77, 128 横長剥片を素材とし、自然面を残すサイドスクレイパーである。77は素材の打面部に、大まかな刃部調整を施している。128は左側縁に直線状の刃部を形成し、背面に使用痕が認められる。
- 69 縦長剥片を素材としたサイド・スクレイパーである。打面と対応する端部に主要剥離面方向からの調整加工が施されている。
- 125, 150 横長剥片を素材としたスクレイパーである。127は先端部両側縁を刃部形成している。150は背面に自然面を残し、粗い刃部調整を直線状に施すものである。

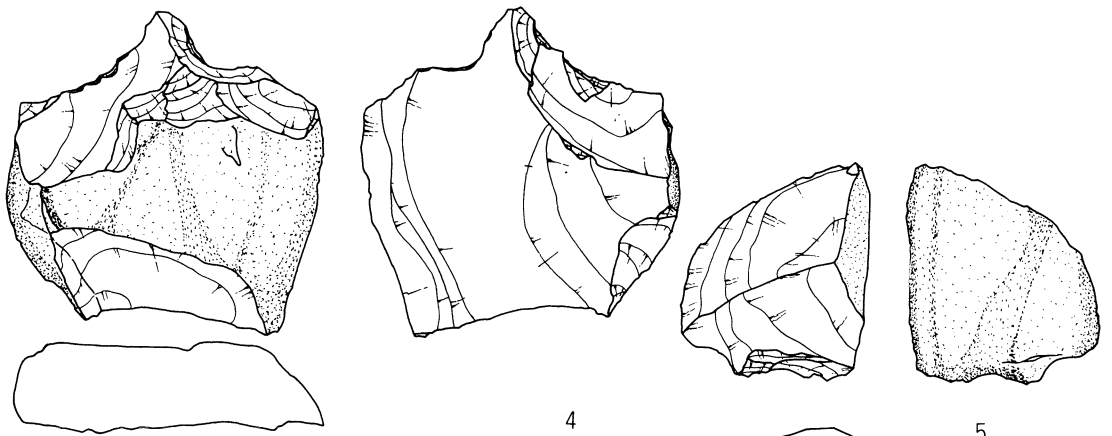
使用痕剥片 (第27図)

- 19 横長剥片を素材とし、下端部に使用による刃こぼれが認められる。
- 20, 47, 75, 124 横長剥片を素材とし、背面に自然面を残すものである。20は左側縁を刃部と



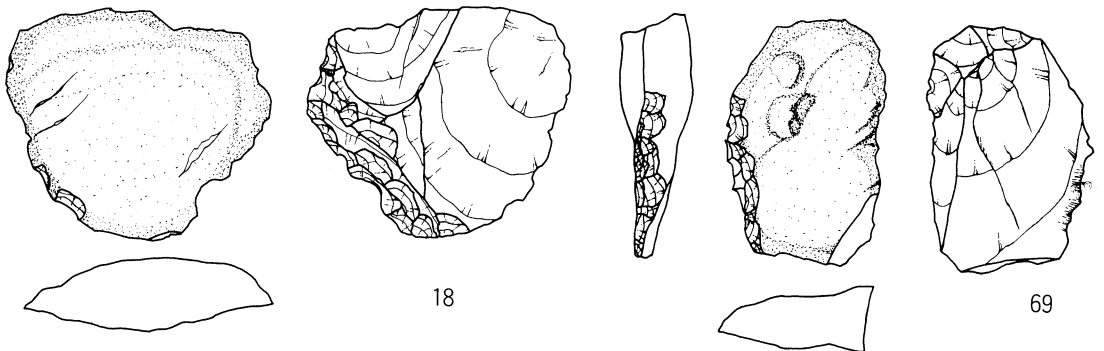
第25図 ナイフ形石器・石錐・角錐状石器実測図





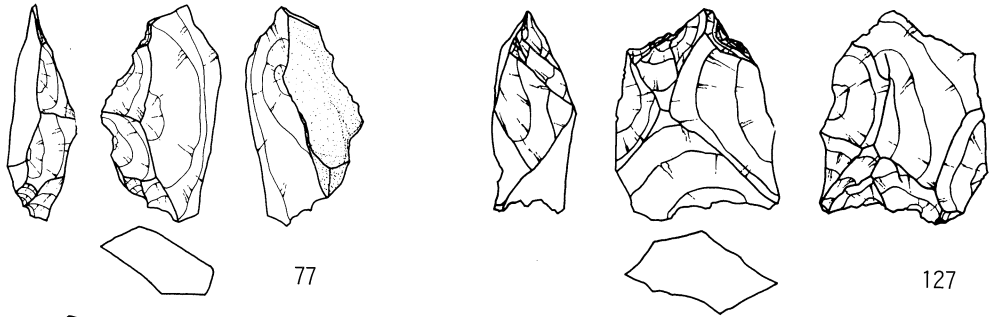
4

5



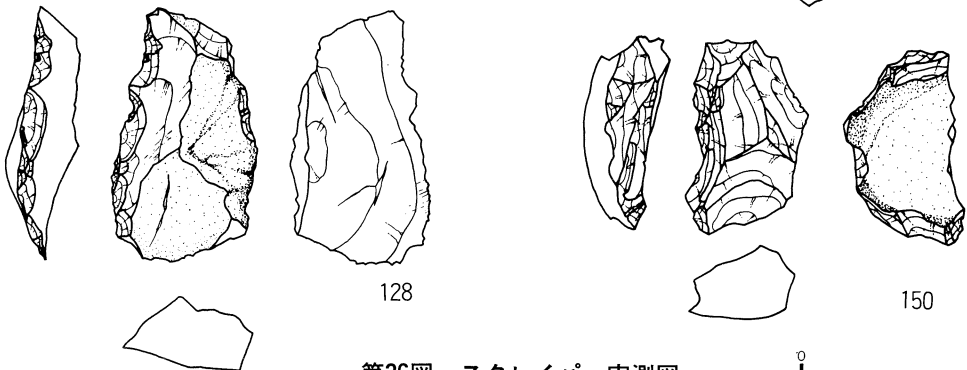
18

69



77

127

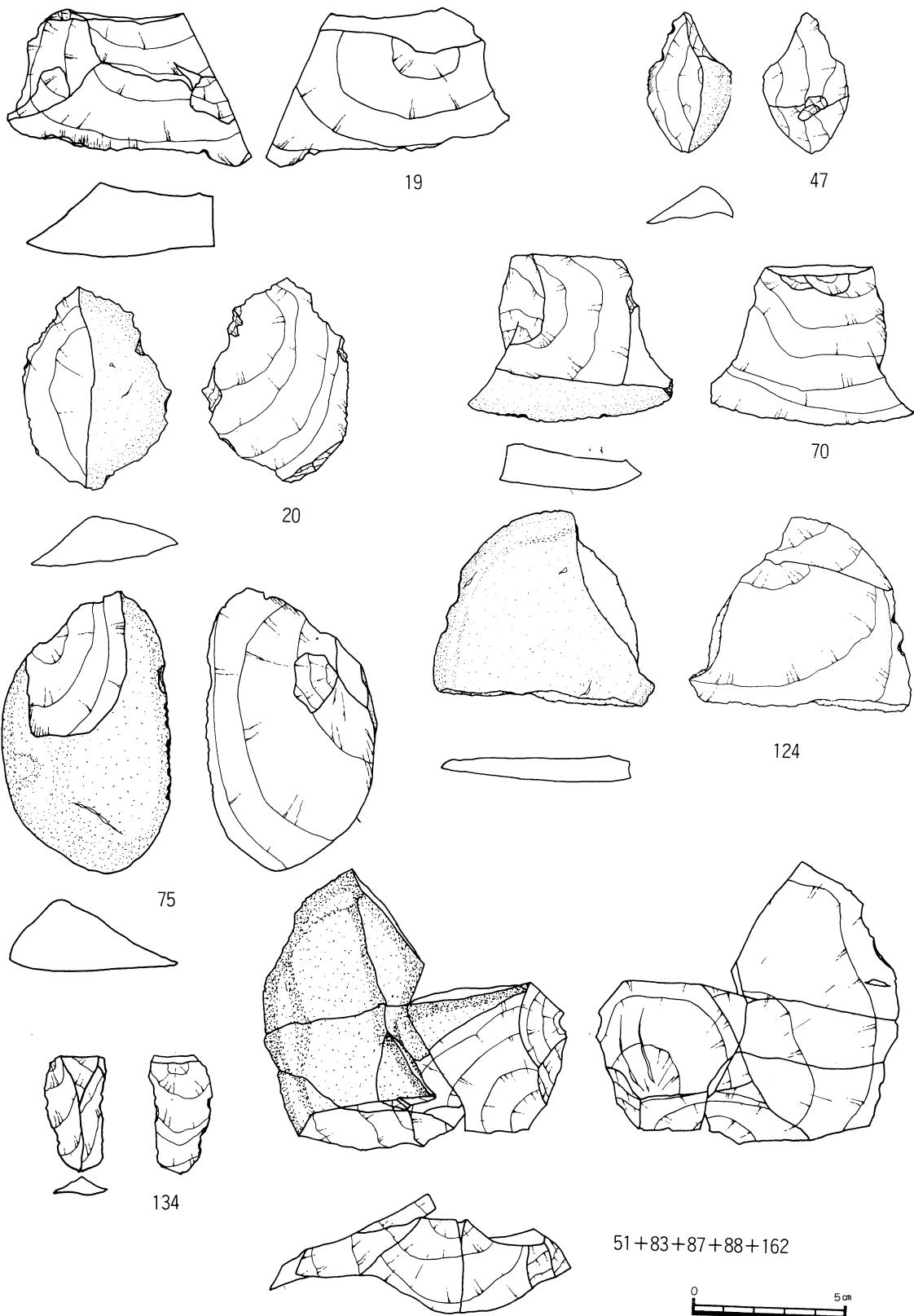


128

150

第26図 スクレイパー実測図





第27図 使用痕剥片・接合資料

している。47は、使用痕が左側縁上半部に認められる。75は打面を残すもので、刃部は右側縁に認められる。124は左側縁を刃部とするもので右側部を欠損している。

70, 134 縦長剥片を素材とするもので、70は下端部を使用し、134は小型の剥片を用い、両側縁を刃部とするものである。

接合資料 (第27図)

51+83+87+88+162 単に折れたものようであるが、横剥ぎによる調整剥離が全体に行われ、横長剥片の剥取のための整形を行っているようである。主要剥離面の剥離痕は、横長の剥片を剥離しているようである。

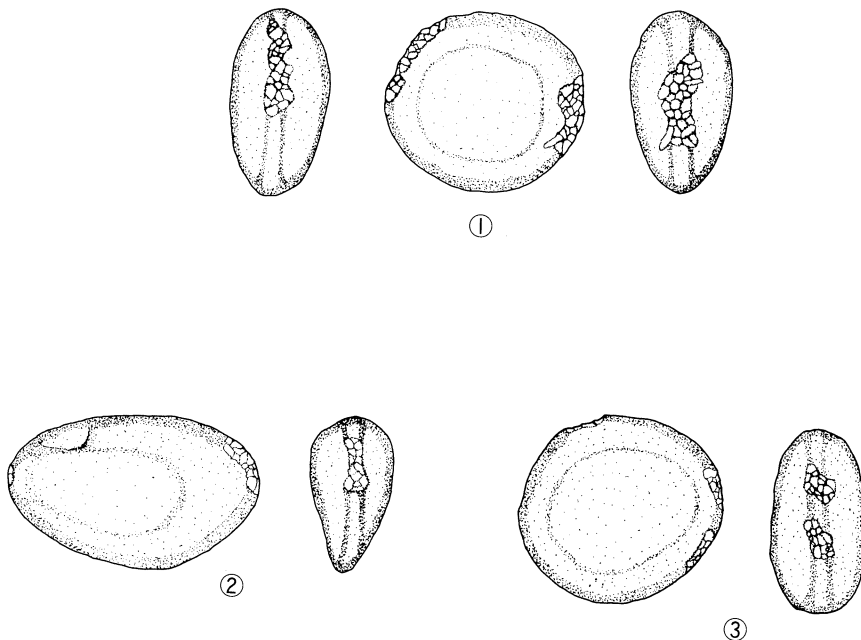
敲石 (第28図)

2号集石から敲石が発見され、完形なもの3点について説明を加えてみる。3点とも円礫であり、赤化現象が著しい。

①は重量180gで礫の両端部に打痕を残すものである。②は重量150gで楕円状を呈し一端に打痕を残す。③は重量195gで細かな打痕を残すものである。

剥片の長幅比について

金剛寺原第2遺跡の剥片の長幅比は、だいたい2:1から1:2の間に収まるが、2:1と1:2に片寄る群が存在する金剛寺原第1遺跡に比べて横長剥片が多い。



第28図 2号集石出土敲石



第5表 金剛寺原第2遺跡遺物観察表

No.	グリッド	器 種	石 材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備 考	実測
1	A-5	ナイフ形石器	流紋岩	2.8	1.3	0.5	1.5		○
2	A-5	使用痕剥片	〃	4.0	6.1	1.6	37.0	横長	
3	A-5	二次加工剥片	〃	6.7	7.4	1.0	57.5	+6+120+40 接合	
4	A-5	スクレイパー	〃	8.3	8.5	2.1	172.0	+5 接合 使用痕あり 横長	○
5	A-5	使用痕剥片	〃	6.7	5.4	1.8	55.0	+4 接合	○
6	A-5	二次加工剥片	〃	9.7	6.9	2.6	167.0	+3+120+40 接合	
7	A-5	剥 片	〃	2.4	2.5	0.5	2.0		
8	A-5	剥 片	〃	3.0	2.1	1.6	6.0		
9	A-5	不 明	〃	6.5	4.0	2.2	51.0		
10	A-5	剥 片	〃	2.5	3.5	0.5	5.0		
11	A-5	剥 片	〃	4.0	3.0	0.5	5.0		
12	A-5	二次加工剥片	〃	4.9	4.2	1.0	22.0	スクレイパー?	
13	A-5	剥 片	〃	3.0	2.9	0.8	8.0		
14	A-5	二次加工剥片?	〃	10.3	5.4	1.2	91.0		
15	A-6	剥 片	〃	3.0	1.2	0.5	1.0	使用痕あり	
16	A-6	使用痕剥片	〃	11.3	7.0	1.9	139.0		
17	A-6	使用痕剥片	〃	5.7	9.4	1.9	74.0	横長	
18	A-6	スクレイパー	〃	5.5	7.3	1.7	82.0		○
19	A-6	使用痕剥片	〃	4.5	7.2	2.2	69.0		○
20	A-6	使用痕剥片	〃	5.0	6.5	1.5	41.0	横長	○
21	A-6	石 核?	チャート	5.0	2.9	2.1	41.0		
22	A-6	剥 片	流紋岩	3.5	4.2	1.5	10.0		
23	A-6	剥 片	〃	3.1	2.1	2.1	3.0		
24								欠番	
25	A-6	二次加工剥片	流紋岩	6.7	4.3	2.0	41.0	使用痕あり	
26	A-6	剥 片	〃	1.6	2.7	0.8	3.0		
27	A-6	剥 片	〃	2.5	2.3	2.7	2.0		
28	A-6	剥 片	チャート	2.1	3.2	0.8	6.0		
29	A-6	使用痕剥片	流紋岩	5.0	3.1	1.5	18.5		
30	A-6	剥 片	〃	2.5	7.5	1.3	23.0	横長	
31	A-6	使用痕剥片	〃	5.8	5.0	1.4	38.5		
32	A-5	剥 片	チャート	3.4	2.5	1.3	9.5		
33	A-6	剥 片	流紋岩	6.5	6.4	2.2	67.0		
34	A-6	剥 片	チャート	2.7	4.3	0.9	10.0	横長	
35	A-6	二次加工剥片	〃	3.5	3.1	1.3	15.5		
36		不 明	〃	4.0	3.0	1.0	10.0		
37	B-6	剥 片	流紋岩	3.2	1.6	0.5	2.4		
38	B-6	ナイフ形石器	〃	4.0	5.3	1.4	30.3	横長	○
39	B-5	剥 片	〃	4.8	2.5	0.9	11.0		
40	B-5	剥 片	〃	5.3	2.1	0.7	4.5	+3+6+120 接合	
41	B-5	縄文石器?	〃	11.0	8.4	2.0	174.0	攪乱層	
42	B-5	縄文石器?	〃	9.9	6.8	2.4	188.5	〃 打製石斧?	
43	A-4	二次加工剥片?	〃	2.5	1.8	0.5	3.0		
44	A-4	剥 片	〃	1.8	2.1	1.5	4.5		
45	A-4	使用痕剥片	〃	4.9	3.4	1.4	15.0		
46	A-4	使用痕剥片	〃	3.4	4.5	1.2	15.0	横長	
47	A-4	使用痕剥片	〃	2.5	4.5	1.1	9.5	横長	○
48	A-4	剥 片	〃	2.2	2.3	1.4	3.5		
49	A-4	剥 片	〃	1.8	2.0	0.7	3.5		
50	A-4	剥 片	〃	3.6	2.7	1.1	10.5		
51	A-4	剥 片	〃	6.7	4.0	2.6	49.0	+83+87+88+162 接合	
52	A-4	ナイフ形石器	〃	2.8	2.2	1.0	6.5		○
53	A-4	土器片						攪乱層	
54	A-3	剥 片	流紋岩	5.3	6.8	1.1	51.5	横長	
55	A-3	剥 片	〃	2.0	2.7	0.4	2.0		
56	A-3	剥 片	〃	2.6	2.9	0.7	4.0	横長	
57	A-2	二次加工剥片	〃	5.0	6.6	1.9	64.0	横長	
58	A-5	剥 片	〃	2.5	4.5	1.6	15.0	横長	

No.	グリッド	器 種	石 材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備 考	実測
59	A-5	石 錐	流紋岩	1.5	4.2	0.8	3.5	横長	○
60	A-5	ナイフ形石器	"	1.5	4.0	1.1	5.0	横長	○
61	A-5	使用痕剥片	"	2.3	2.3	0.8	3.0		
62	A-5	ナイフ形石器	"	3.5	1.5	0.8	2.0		○
63	A-5	使用痕剥片	"	2.7	3.8	1.7	25.0		
64	A-5	角錐状石器	"	1.2	3.0	1.0	3.0	横長	○
65	A-5	剥 片	"	2.8	2.1	0.6	2.0		
66	A-5	剥 片	"	1.3	2.1	0.9	1.0		
67	A-5	剥 片	"	1.8	2.0	0.5	1.0		
68	A-5	剥 片	"	2.7	4.6	0.9	13.0		
69	A-6	スクレイパー	"	3.8	6.7	2.1	58.5	横長	○
70	A-6	使用痕剥片	"	5.4	6.6	2.4	52.5		○
71	A-6	剥 片	"	3.3	1.9	0.6	3.5		
72	A-6	二次加工剥片	チャート	3.5	6.5	1.3	31.0		
73	A-6	二次加工剥片	"	2.8	3.9	1.4	13.5		
74	B-6	剥 片	流紋岩	1.7	0.9	0.3	0.2		
75	B-6	使用痕剥片	"	5.7	9.0	2.4	101.0	横長	○
76	B-5	剥 片	"	2.8	1.8	1.1	3.0		
77	B-5	スクレイパー	"	3.0	6.0	1.9	28.5	横長	○
78	B-5	剥 片	チャート	5.4	3.5	1.2	18.0		
79	A-4	砕 片	流紋岩	0.9	1.0	0.2	0.1		
80	A-4	二次加工剥片	"	1.7	3.4	0.5	3.0	横長	
81	A-4	砕 片	"	0.7	0.9	0.1	0.1		
82	A-4	剥 片	"	2.2	3.4	0.7	5.0	横長	
83	A-4	剥 片	"	5.4	5.1	2.0	46.0	+51+83+88+162 接合	
84	A-4	剥 片	"	1.3	1.7	0.6	1.0	横長	
85	A-4	剥 片	"	1.8	1.3	0.7	1.2		
86	A-4	ナイフ形石器	"	1.3	2.9	0.7	3.0	横長	○
87	A-4	剥 片	"	3.2	6.1	2.1	35.0	+51+83+88+162 接合	
88	A-4	二次加工剥片	"	4.5	4.8	2.7	75.0	+51+83+87+162 接合	
89	A-4	剥 片	"	1.6	2.0	0.3	0.5	横長	
90	A-4	剥 片	"	3.5	2.6	1.0	7.0	+160 接合	
91	A-4	使用痕剥片	"	2.4	2.3	0.5	2.0		
92	A-4	剥 片	"	1.1	1.6	0.2	0.2		
93	A-4	剥 片	"	1.7	1.1	0.5	0.5		
94	A-4	剥 片	"	2.9	2.0	0.8	4.5		
95	A-4	剥 片	"	2.1	2.2	0.7	2.5		
96	A-4	二次加工剥片	"	3.0	1.6	1.3	6.0		
97	A-4	二次加工剥片	"	1.7	1.1	0.6	0.5		
98	A-4	砕 片	"	1.0	0.8	0.5	0.3		
99	A-4	剥 片	"	3.2	2.2	0.5	4.0		
100	A-4	使用痕剥片	"	1.6	1.0	0.4	0.5		
101	A-4	剥 片	"	1.3	1.6	0.3	0.4	横長	
102	A-4	剥 片	"	1.8	1.0	0.5	0.5		
103	A-4	礫 片	"	2.2	1.8	0.5	1.0		
104	A-4	使用痕剥片	"	2.0	3.5	1.0	0.3		
105	A-4	剥 片	"	1.5	1.9	0.3	0.5		
106	A-4	剥 片	"	3.7	2.8	1.2	9.5		
107	A-4	剥 片	"	1.8	2.8	0.5	1.5	横長	
108	A-4	二次加工剥片	"	4.3	3.2	1.1	15.0	使用痕有り	
109	A-4	二次加工剥片	"	3.1	1.7	0.9	4.0		
110	A-3	陶 器 片						攪乱層 胴部片	
111	A-3	土 器 片						" "	
112	A-3	土 器 片						" 弥生土器甕口縁部	
113	A-3	土 器 片						" 胴部片	
114	A-3	土 器 片						" "	
115	A-3	土 器 片						" "	
116	A-3	剥 片	流紋岩	4.5	3.6	0.4	8.5		
117	A-3	使用痕剥片	"	6.5	11.0	2.1	17.7	横長	
118	A-2	使用痕剥片	"	3.2	5.0	1.3	15.5		

No.	グリッド	器種	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考	実測
119	A-2	二次加工剥片	流紋岩	2.8	2.0	0.9	4.0		
120	B-5	剥片	〃	4.7	5.6	1.6	35.0	+3+6+40 接合	
121	B-5	剥片	〃	2.5	3.3	0.7	3.0		
122	B-5	二次加工剥片	〃	5.2	4.6	1.0	31.0		
123	B-5	使用痕剥片	〃	6.5	9.1	1.9	98.0	横長	
124	B-5	使用痕剥片	〃	6.3	6.8	0.9	41.5		○
125	B-5	二次加工剥片	〃	7.1	3.9	1.5	45.0	使用痕有り	
126	B-5	剥片	〃	1.6	2.3	0.7	1.5		
127	B-5	スクレイパー	〃	5.9	5.5	2.0	46.5		○
128	B-6	スクレイパー	〃	3.5	6.8	1.9	43.0	横長	○
129	B-6	剥片	チャート	2.2	1.7	0.8	3.9		
130	B-6	二次加工剥片	流紋岩	1.5	2.2	0.6	1.0	横長	
131	B-6	使用痕剥片	〃	5.2	2.3	1.1	12.0		
132	B-6	剥片	〃	7.4	3.5	1.7	41.0		
133	B-6	剥片	〃	0.9	1.5	0.7	0.2		
134	A-6	使用痕剥片	〃	3.6	2.9	1.1	4.5		○
135	A-6	使用痕剥片	〃	3.1	2.8	1.0	10.0		
136	A-6	二次加工剥片	〃	4.6	3.5	1.0	11.0		
137	A-6	剥片	〃	2.2	2.6	1.1	4.0		
138	A-6	石核?	〃	8.0	4.6	3.1	131.0		
139	A-6	使用痕剥片	〃	2.0	3.1	0.5	4.0	横長	
140	A-6	剥片	〃	2.3	4.1	0.5	3.0	横長	
141	A-6	剥片	〃	3.0	1.9	0.6	3.0		
142	A-6	剥片	〃	2.1	1.7	0.4	0.5		
143	A-6	剥片	〃	1.7	1.1	0.1	0.2		
144	A-6	ナイフ形石器	〃	1.5	2.4	0.7	1.0	横長	○
145	A-5	剥片	〃	3.9	2.3	0.5	5.0		
146	A-5	剥片	〃	2.2	2.0	0.4	1.0		
147	A-5	使用痕剥片	〃	2.5	3.6	1.1	7.0		
148	A-5	使用痕剥片	チャート	2.6	3.6	0.5	3.0	横長	
149	A-5	剥片	流紋岩	1.3	1.3	0.3	0.1		
150	A-5	スクレイパー	〃	4.7	4.5	2.0	36.0	+156 接合	○
151	A-5	剥片	流紋岩	1.2	1.7	0.7	0.5	横長	
152	A-5	二次加工剥片	〃	2.8	3.3	1.1	9.0		
153	A-4	剥片	〃	1.5	1.5	0.4	0.3		
154	A-4	砕片	〃	0.6	0.8	0.2	0.1		
155	A-4	二次加工剥片	〃	2.1	3.8	1.0	5.0	横長	
156	A-4	剥片	〃	1.9	1.6	0.5	1.0	+150 接合	
157	A-4	剥片	〃	3.3	3.1	1.1	6.9		
158	A-4	砕片	〃	1.0	0.5	0.4	0.1		
159	A-4	剥片	〃	1.5	1.5	0.4	0.8		
160	A-4	剥片	〃	2.3	1.3	0.6	2.2	+90 接合	
161	A-4	剥片	〃	1.3	1.7	0.4	0.4	横長	
162	A-4	剥片	〃	1.9	1.9	0.9	3.0	+51+83+88+87 接合	
163	A-4	砕片	〃	0.6	1.0	0.2	0.1		
164	A-4	剥片	〃	1.6	1.5	0.6	1.0		
165	A-4	二次加工剥片	〃	1.7	3.5	0.9	3.0	横長	
166	A-4	剥片	〃	1.6	1.4	0.4	0.5		
167	A-4	剥片	〃	1.2	1.7	0.5	0.5		
168	A-4	使用痕剥片	〃	1.5	1.7	0.4		横長	
169	A-4	使用痕剥片	〃	2.1	2.7	0.8	3.2	横長	
170	A-4	二次加工剥片	〃	1.1	3.3	1.0	2.7	横長	
171	A-4	二次加工剥片	〃	1.4	1.2	0.6	0.7		
172	A-4	剥片	〃	1.9	4.5	0.8	9.6		
173	A-4	剥片	〃	1.6	1.3	0.6	1.0		

5. まとめ

【礫群と集石遺構について】

金剛寺原第2遺跡の旧石器文化の生活実態を知るうえで、礫群と集石遺構の検出は重要な資料提示を与えてくれた。

まず当遺跡の3基の集石遺構について諸特徴を列举して整理してみることにする。共通の特徴としては赤化現象が著しく見られ、少数ではあるが炭化物の付着が散見できる。

1号集石は単に礫群を集石させた感じであり、周辺に碎片のブロックや石器群の集中が見られる特徴がある。

2号集石は破損礫の度合いが高く、拳大以下の小礫が主体を占めており使用頻度の多さを推測させるものである（意図的に打ち割った?）。石器群、礫群の集中も周辺に見られる状況である。

3号集石は拳大から掌大の、比較的大きめの礫で構成されており、集石内接合が顕著に見られるものの、周辺には遺物が少ないといった特徴がある。

以上の状況を見ると、3基とも機能、用途の違いがあるものと推測される。また、礫群については石器群の集中部と分布が重なる状況にあり、両者の関係は重視されるべき傾向性があると言えよう。これらの特徴を念頭におき、礫群、集石遺構に有効な理解、判断をしておくためにも現在の研究状況をみてみたい。

最近の旧石器時代の発掘調査例から、礫群、集石遺構、焼土、炭化物等の火の使用を裏づける情報が蓄積されつつある。礫群と集石遺構のこれまでの研究過程から、調理用施設、暖房用施設といった用途が考えられている。特に、集石遺構の機能に関する研究は、発掘調査の諸例に加え民俗例、実験例などを踏まえながら諸検討がされている。

民俗例からは、縄文時代の集石炉の例から地炉のことを指すアース・オープン法、焼石を投入して湯を沸かす調理法のストーン・ボイリング法が知られており、また各地の集石遺構の出土例から墳墓施設、祭祀遺構の可能性も指摘されている。

次に実験例として、石蒸炉の復元実験を試みた例が紹介されている。石蒸を行う場合に、用途の異なる被覆石と炉石が存在するわけだが、石蒸炉の復元実験を3回試みた結果、被覆石は細片と軽量のものが多く、炉石は大きく重量のものが多いという特徴を判明させている。（註）この実験結果は当遺跡の軽量の礫が多い2号集石を前者、大きめの礫で構成される3号集石を後者として機能、用途を考察したときに、興味ある結果が導き出せそうではあったが、3号集石については、形態的に見て、炉石と考えるには、無理がありそうである。

いずれにせよ、旧石器時代の集石遺構の構造解明には面的な位置付け、形態分類等の作業において把握される必要がある。当遺跡においては、礫群、ブロックとの面的な相互関係、構成礫の破損度合い、大小の差、量的な面について、ある程度の特徴が把握されたと言える。

本来ならば、ここで機能・用途論の推定について迫るべきであろうが、旧石器時代の集石遺構については類例が少ないため、民俗例、実験例も少なく、形態的な分類がされただけに留めておいて、敢えて慎重な立場から言及を避けておきたい。

今後、上記に挙げた例を参考としながらも自然科学等の関連諸科学の分析をも検討し、資料増加と研究者の再考に期待するものである。

(註) 新東晃一「古代生活の復元」鹿児島県考古学会『シンポジウム橋牟礼川遺跡をさぐる』

発表要旨 1989年7月

【金剛寺原第2遺跡の石器群について】

金剛寺原第2遺跡では、わずかであるがATを確認することができ、ATより一層をはさんだ第Ⅲ層から石器群が出土した。時期的には、後期旧石器時代のナイフ形石器文化期所産の資料であり、宮崎平野では船野遺跡、堂地西遺跡など数例が知られているだけである。

石器組成については、ナイフ形石器7点、角錐状石器1点、石錐1点、スクレイパー7点、二次加工剥片25点、使用痕剥片33点という状況である。組成の特徴としては、角錐状石器が伴うことと、調査面積が狭かったにも拘らずナイフ形石器が多く、スクレイパーについて見ると僅か7点にすぎず、スクレイパーが多量に出土している金剛寺原第1遺跡と比較して、組成内容に異なりを示している点が挙げられる。

また、ナイフ形石器、スクレイパーの特徴をまとめておくと、ナイフ形石器は切り出し状のもの、二側縁加工のもの、一側縁加工のもの、部分加工のものがある。特に素材は、縦長剥片素材、横長剥片素材の両者が認められる。また、スクレイパーに関しては、サイド・スクレイパーが認められ、エンド・スクレイパーが1点も認められない。技法的には、背面に自然面を残す特徴を持っており、定型化した製作技術は見出せないが、総じて刃部が直線状に作り出されているようである。横長剥片素材に主体が置かれる。

以上の点から宮崎県下の他の遺跡の諸様相と比較して金剛寺原第2遺跡の性格を考えてみたい。金剛寺原第2遺跡と同じように間層をはさんでAT上位から石器群が出土している遺跡としては、赤木遺跡、船野遺跡、堂地西遺跡が挙げられる。赤木遺跡では、切り出し状のナイフ形石器と剥片尖頭器、三稜尖頭器が出土し、船野遺跡では、細石核、細石刃、ナイフ形石器、台形様石器、三稜尖頭器が出土している。一方、堂地西遺跡ではATの漸移層を挟んで縦長剥片素材を主流に切り出し状のナイフ形石器、剥片尖頭器が出土している。

九州では、AT上位のナイフ形石器文化においては、ナイフ形石器と剥片尖頭器、角錐状石器等が伴出して認められることが特徴に挙げられ、赤木遺跡、堂地西遺跡は特にその特徴を兼ね備えていると言える。金剛寺原第2遺跡については、剥片尖頭器の出土がなかったが、角錐状石器、切り出し状のナイフ形石器を伴うなど、赤木遺跡、堂地西遺跡の石器組成に類似した性格を持ち、時期的にもほぼ同一時期であろうと考えられる。なお、船野遺跡については、細石核、細石刃、台形様石器が組成に新しく加わり、より新しい段階のものに位置づけられる。

さらに、金剛寺原第2遺跡の剥片剥離技術に注目すると、横長剥片の石器及び横長剥片を多く用いており、割に瀬戸内的な技法が看取されている可能性も指摘できる。瀬戸内技法は、九州では東九州と北部九州に分布しており、東九州では大分県の大野川流域に認められるようである。宮崎県下でも赤木遺跡、堂地西遺跡、垂水公園遺跡で瀬戸内系のナイフ形石器が確認されており、その技術伝播の在り方が注目されつつある。

こうした点から、金剛寺原第2遺跡の石器群は特に横長素材のものが主流を占めているため、興味ある資料といえ、瀬戸内技法が看取されているのか否か、瀬戸内技法の波及を追求するにあたって一つの解明の糸口を与えてくれそうである。

宮崎平野においては、旧石器時代の調査が増えつつあり、今回の資料は、これまでの旧石器研究の空白を補う、格好の資料提示と成りえた。今後は、早急に宮崎平野の時間的な段階的位置付けを行い、地域様相を着実に究明していくことが望まれる。
(宮下)

参考文献

- | | | |
|-----------|------------------------------------|-------|
| 橘 昌信 | 「宮崎県船野遺跡における細石器文化」考古学論叢 3 | 1975年 |
| 鎌木義昌・間壁忠彦 | 「九州地方の先土器時代」日本の考古学 I | 1965年 |
| | 「堂地西遺跡」宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書第2集 宮崎県教育委員会 | 1985年 |
| | 「延岡市文化財調査報告書Ⅲ」 延岡市教育委員会 | 1987年 |

IV. 金剛寺原遺跡の石器群とその位置づけ

橋 昌 信

金剛寺原第1遺跡および金剛寺原第2遺跡における石器類についての出土状況や個別の観察はすでに詳細に述べているので、それらを踏まえて両遺跡の特徴や時間的位置づけについて若干の考察を試みることにする。

両遺跡とも農免道路整備事業に伴う限られた区域での発掘調査と言う制約が有るため、遺物の包含が予想されながら未調査の部分が残されるなど、遺跡の全貌を十分に把握するまでに至っていない。それに起因して金剛寺原遺跡の特徴を抽出、あるいは他の遺跡との比較検討する上で、当然、問題を残すことになろう。しかしながら、ATの上位に単一のナイフ形石器文化の石器群が発見されている遺跡として重要視される。

石器群の出土層位

そこで、まずこの遺跡の時間的位置づけを考える上での重要な一つの要素となる出土層位について、ナイフ形石器文化の編年での鍵層と成っているAT(始良Tn火山灰・第2オレンジ)との関係を見ることにする。金剛寺原第1遺跡の石器群は、第3層黄褐色土層から出土している。その層の直下に、ATのブロックが部分的に認められ、また、ATが風化したと考えられる土層が堆積している。当遺跡の層位は、地形の関係などで良好と言えないまでも、石器群の出土は層位的にAT直上と考えると大過ない。

一方の金剛寺原第2遺跡については、第3層の明褐色ローム層から石器群および集石遺構が検出されている。当遺跡でのATの層位は、第4層の暗褐色硬質土層を1枚挟んだ第5層に位置しており、ブロック状、あるいは土壌化した状況で認められる。このことから、金剛寺原第2遺跡では明らかにATより上位に石器群の包含層が存在することになる。なお、旧石器文化の遺物包含層である3層直上の明褐色土層は二次堆積と考えられ、実際、縄文・弥生時代の石器片が混入している。3層より上位の地層については、他遺跡でのプライマリーな堆積土層との比較は不可能である。

金剛寺原第1遺跡と金剛寺原第2遺跡とは近接した距離に立地しているが、土層および石器群の出土層位について直接的な対比は困難である。しかし、ATやAT風化土層を参考にすれば、層位的には第1遺跡はATの降下堆積に近い時期の21,000年前の前後の時期が考えられ、第2遺跡はATとの間に別な層を挟んでいることから、そのぶんだけ新しい時期と判断されよう。

出土石器群の特徴

金剛寺原第1遺跡出土の石器総数は217点であり、それらの中でまず目を引くのは、33点の搔器・削器(スクレイパー)の存在である。当遺跡出土石器類の総数の約15%を占めており、石器だけでの全体の比率は実に30%をも占めるのである。これらのスクレイパーは数量的に卓越しているだけでなく、その種類もエンドスクレイパー、サイドスクレイパー、ノッチドスクレイパー、コアースクレイパーと極めて多彩である。特にエンドスクレイパーは九州地域の旧石器時代遺跡にあっては希有な存在として注目される。

旧石器文化の指標されているナイフ形石器は、金剛寺原第1遺跡ではわずかに4点と少ない。二側縁加工・一側縁加工それに部分加工のナイフ形石器が見られるが、縦長剥片を素材に用いているということ以外の特徴を抽出することは難しい。

外の石器として、剥片の一部に二次的な調整加工を施した二次加工のある剥片石器が18点、剥片の側縁に使用によるものと推測される微細な刃こぼれ状の痕跡が観察される使用痕剥片が45点出土している。特に使用痕剥片の45点はスクレイパーの量をさらに上回り、石器全体の40%にのぼっており、当遺跡における石器組成での大きな特徴とされよう。

剥片石器の素材となる剥片剥離技術を端的に示唆する石核は、9点出土している。これらの石核は、打面と剥片の剥離作業面がほぼ固定して、主として縦長剥片を目的とする剥離が行われているもの、打面転移を繰り返しながら、剥片の幅と長さの比率が1:1前後の剥片を剥離したもの、さらに打面と作業面とを交互に逆転させながら、幅広の剥片を目的に、剥片剥離が行われているものに三大別できよう。

実際、金剛寺原第1遺跡で出土している剥片の計測可能なものの長さとの比について見ると、長さ1:幅1と長さ2:幅1の間に、剥片全体の約半数がおさまっている。残り半数の剥片が1:1よりも横に長い剥片と2:1よりも縦に長い剥片とに分かれ、しかも、それぞれほぼ同じ数である。全体的には1:1よりも縦に長い剥片がより多く剥離されていると言える。

次に、金剛寺原第2遺跡の出土遺物について触れることにする。

この遺跡での旧石器文化の遺物総数は200余点で、主要な石器としては、ナイフ形石器・スクレイパー・二次加工剥片・使用痕剥片、それに1点であるが角錐状石器などが見られる。

ナイフ形石器は7点出土しており、二側縁加工・一側縁加工・部分加工のものが含まれている。一側縁加工のナイフ形石器の中に横長剥片を素材に用いたものが有る。これは金剛寺原第1遺跡では認められず、金剛寺原第2遺跡を特徴的づけるナイフ形石器である。

このナイフ形石器と同様に、横長剥片を素材にした横断面がほぼ三角形を呈する角錐状の尖頭器もこの遺跡の特徴とされよう。

スクレイパーは7点出土しているが、この中には金剛寺原第1遺跡で特徴的であったエンドスクレイパーが見られない。

第2遺跡では剥片剥離技術を知ることのできる石核の好資料に恵まれていないが、80点ほど出土している剥片から、第1遺跡との剥片剥離技術の対比は可能である。

第1遺跡と同様に、剥片の長さとの関係についての長幅比をみると、第2遺跡では、長さ1:幅1を基準にして、1:1~2:1の縦長剥片と、1:1~1:2の横長剥片とが数量的に等分される。このことは金剛寺原第1遺跡に比較して、第2遺跡では横に長い剥片を剥離する剥片剥離技術が勝っていることを示している。実際、ナイフ形石器・スクレイパー・二次加工剥片・使用痕剥片など剥片石器に、横剥ぎ素材のものが多く認められ、このことを裏づけている。

金剛寺原第1遺跡と第2遺跡は互いに近距離な位置に立地していながら、石器群が包含されている地層の違いの外、両遺跡とも十分な資料が揃っていると言い難いものの、石器組成や

ナイフ形石器・スクレイパーの形態的技術的の相違、さらに主体的な剥片が異なることなどを指摘できよう。この両遺跡は近距離に立地していることから、その違いは時間的な差に起因しているものと考えられる。

石器群の位置づけ

そこで、次に金剛寺原第1遺跡および金剛寺原第2遺跡の時間的な位置づけ、すなわち宮崎平野部におけるナイフ形石器文化での編年を試みることにする。

この地域でナイフ形石器を特徴とする石器群が、AT（始良Tn火山灰・第2オレンジ）との関係で把握されている主要な遺跡として、船野遺跡（佐土原町）・堂地西遺跡（宮崎市）・札ノ元遺跡（田野町）・芳ヶ迫第1遺跡（田野町）などを挙げることができる。

昭和45年、宮崎平野で最も早い時期に発掘調査が実施された船野遺跡では、Ⅲ層のローム層最上部から石器群が出土し、Ⅴ層のAT層との間に30～40cmの無遺物層を挟んでいる。石器群がロームの最上部に包含されていることから、層位的に金剛寺原第1遺跡・第2遺跡よりも新しい時期が考えられる。また、当遺跡の石器群は小型のナイフ形石器と細石刃・細石核との共伴が示唆されており、ナイフ形石器文化と細石器文化の過渡的な時期が予想され、石器群の様相からも金剛寺原遺跡よりも明らかに新しい時期が与えられる。

堂地西遺跡は学園都市建設に伴う発掘調査として昭和59年に実施された。Ⅵ層のAT層（第2オレンジ）の直上に10cm前後の漸移層を挟んだ上位のⅤb層に、ナイフ形石器文化の包含層が認められる。出土層位では金剛寺原第1遺跡と比較的近似しているように思えるが、Ⅴc層の堆積の時間幅を考慮すると、層位的に第1遺跡よりやや新しい時期を考えるべきであろう。

堂地西と金剛寺原の遺跡では石器群の内容は大きく違っている。すなわち、堂地西遺跡の石器群で最も特徴的なのは、縦長剥片を素材にして一側縁と基部に二次加工が施されている剥片尖頭器とナイフ形石器の存在である。これらの石器は金剛寺原第1遺跡・第2遺跡では1点も発見されてないのである。これとは逆に、金剛寺原第1遺跡で特徴的な搔器・削器（スクレイパー）は、堂地西遺跡で全く出土しておらず、両遺跡の石器組成が異なっている。また、石材の面でも、堂地西遺跡では砂岩系のものが多用されており、流紋岩（ホルンフェルス）を主体とした金剛寺原遺跡とは様相を異にしている。これらの違いは時期差によるものであろう。

一方、金剛寺原第2遺跡出土の横剥ぎ素材で一側縁加工のナイフ形石器は、堂地西遺跡においても発見されており、このことは両者が比較的近い時期であることを示唆するものとみなされよう。

堂地西遺跡と同様に、宮崎平野南部に所在する芳ヶ迫第1遺跡は、昭和58～59年にかけて発掘調査が実施されている。AT（第2オレンジ）を含む第Ⅷ層の礫層直上からナイフ形石器・剥片尖頭器などが発見されている。これらの石器は堂地西遺跡と類似しているが、当遺跡ではこれらの外に、定形的な石器として角錐状石器が見られる。角錐状石器は金剛寺原第2遺跡で発見されており、形態的には多少違いが認められるが、第2遺跡との対比を行う上での一つの資料とされよう。この際、両遺跡の遺跡の遺物出土層位の違いが問題になると思われる。

芳ヶ迫第1遺跡ではATの検出は礫層であり、しかも、石器群はこの礫層直上出土であり、

一方、金剛寺原第2遺跡では間層を挟んでの出土である。この両者の層位的な関係は、他の遺跡と同様に論じることができないであろう。すなわち、礫層中のATや礫層直上の遺物包含層は多分に二次的な要素が加わるため、当遺跡の石器群がAT堆積直後の時期を必ずしも示していない可能性が考えられるということである。

札ノ元遺跡は、芳ヶ迫第1遺跡と300m前後の近接した地点に立地しており、昭和59年に発掘調査が実施され、第Ⅶ層からナイフ形石器・石核・剥片などが出土している。AT層に相当する層は、Ⅷ層の間層を挟んだⅨ層に認められる。

石器群の出土総数が少ないこともあり、金剛寺原第1遺跡・金剛寺原第2遺跡と直接対比できる石器は見当たらないようである。

宮崎平野の地域を離れて、宮崎県内でナイフ形石器が出土している旧石器文化の遺跡に目を転じてみると、昭和59年に調査が実施された県北の赤木遺跡（延岡市）で好資料が出土している。

ここでは、Ⅴa層の下部からⅤb層直上にかけて細石器文化の石器群（赤木第Ⅱ文化層）が、さらにⅤb層の下位を中心にナイフ形石器文化の石器群（赤木第Ⅰ文化層）が発見されている。AT層は20cmほどの厚さを有するⅥ層を挟んで、Ⅶ層に存在する。

問題のナイフ形石器文化の石器群としては、ナイフ形石器・剥片尖頭器三稜尖頭器・（角錐状石器）などが有る。ナイフ形石器は二側縁加工で、細長い形態のものと同じ形のもの主体にしているが、横剥ぎ素材の一側縁加工のものも見られる。これらの石器組成は、AT上位におけるナイフ形石器文化の一時期での典型的な様相を示すものと考えられる。

地理的にやや離れているが、金剛寺原第2遺跡と対比させたとき、切り出し形のナイフ形石器や、横剥ぎ素材の一側縁加工のナイフ形石器、それに角錐状石器などで共通した要素が認められる。これに対して、金剛寺原第1遺跡と共通する要素の抽出はできそうもないのである。

以上の諸遺跡の状況を参考にして、金剛寺原第1遺跡および第2遺跡の編年的位置づけを試みしてみる。

まず、第1遺跡が第2遺跡に先行することは、層的なことおよび横剥ぎ素材の一側縁加工のナイフ形石器や角錐状石器の存在から十分予測されることである。

次に金剛寺原第1遺跡であるが、剥片尖頭器・角錐状石器などが石器組成に欠けていることや、一方で、縦長剥片素材のナイフ形石器や発達した各種の搔・削器（スクレイパー）が存在することは、AT層との間に一枚別の層を挟んだ上位の土層に、包含層が認められるナイフ形石器文化との最大の違いである。このことは、少なくとも東九州南部の宮崎県においては、AT直後の時期に、剥片尖頭器・角錐状石器それに定形的な横剥ぎ剥片などを石器組成に含まないナイフ形石器文化の存在を示唆していると言えよう。結局、金剛寺原第1遺跡は、先に挙げた宮崎県内の諸遺跡の中では、最も古い時期が与えられるであろう。すなわち、ATが降下・堆積した時期に極めて近接した時間的位置づけを考えておきたい。

一方、金剛寺原第2遺跡は、堂地西遺跡・芳ヶ迫第1遺跡および赤木遺跡などとほぼ同じ時期か、あるいは、やや新しい時期を考えることができよう。



図版11

金剛寺原第2遺跡

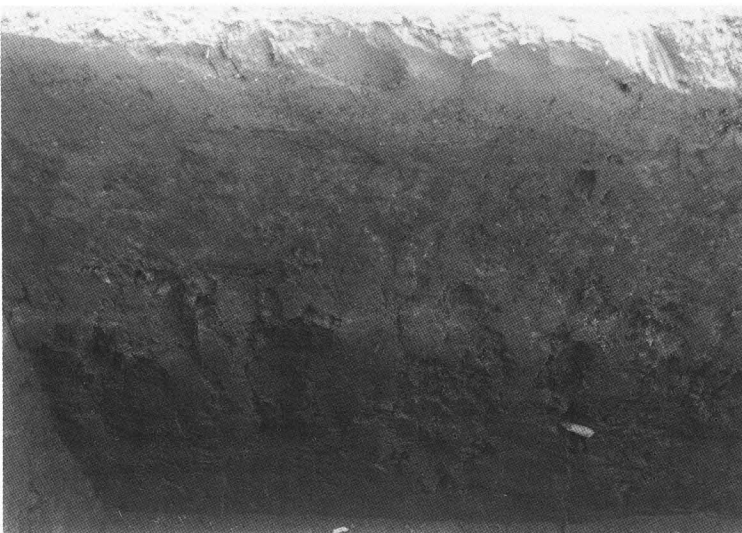
調査風景



図版12

金剛寺原第2遺跡

石器群の出土状況



図版13

金剛寺原第2遺跡

土層断面



图版14

1号集石遺構



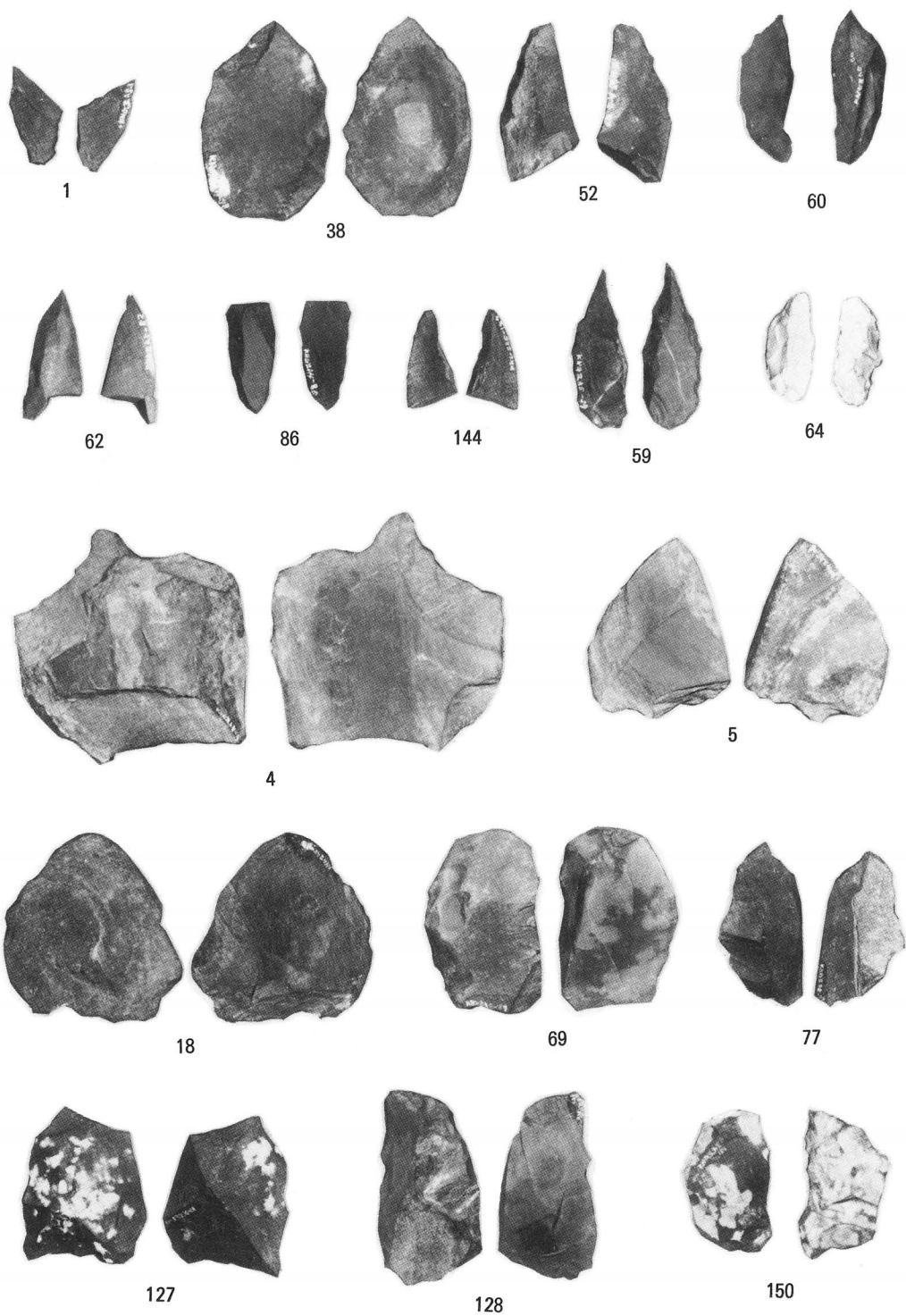
图版15

2号集石遺構



图版16

3号集石遺構



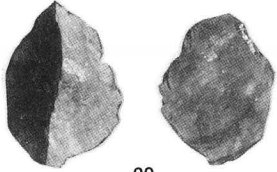
図版17 ナイフ形石器・石錐・角錐状石器・スクレイパー



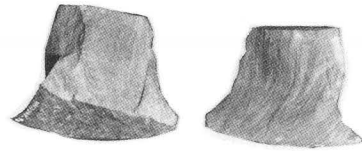
19



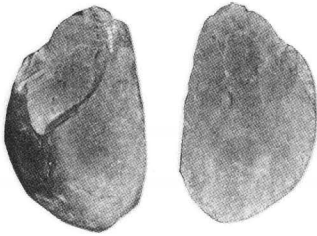
47



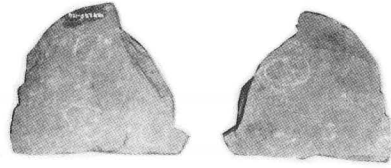
20



70



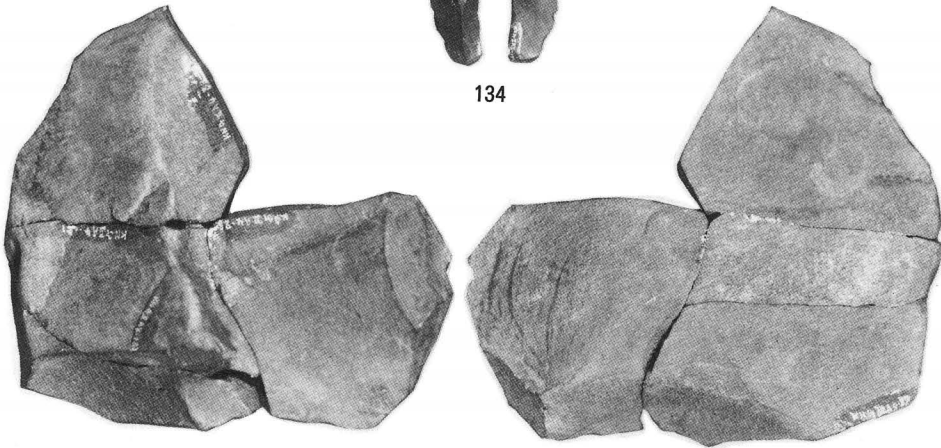
75



124



134



51、83、87、88、162

図版18 使用痕剥片・接合資料

金剛寺原第1遺跡
金剛寺原第2遺跡

〔県営農林漁業用揮発油税財源
身替農道整備事業瓜生野地区〕
に伴う発掘調査報告書

平成2年3月

発行 宮崎市教育委員会

印刷 宮崎南印刷